
死ねない俺の異世界召喚戦記

利瀬 時夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死ねない俺の異世界召喚戦記

【Nコード】

N4753Y

【作者名】

利瀬 時夜

【あらすじ】

『君は死なないのでは無く、死ねない人間なのさ』——この言葉が全ての始まりで、終わり。始まりも終わりも同じとは、いやはや皮肉な物である。異世界に召喚された俺に課せられた願いは、世界ライツアーク改変。まずは世界を支配する者を倒そうとテンプレ的展開を求め旅に出た。のだが、それは無駄。世界を支配するのは人では無く、国自体。その世界を甘く見ていた俺が馬鹿だった。その世界は、神様史上最低最悪な世界だったんだ——。これは俺の世界を巡る、異世界記録。（主人公最強要素在り。そして削除三度目、何と友人曰

く、これ、前より酷いと言われ完璧に設定を考え創り上げました。もう二度と消す事は在りません。卑猥克残酷描写と表現が登場します。苦手な方は即座にバックブラウザ。暇潰しにでも登校、通勤時に読んで貰えれば幸いです）第一章終了、第二章アクトセリア篇開始。50000PV突破！このまま限界まで……飛ばすぜッ！！

つと、その前に、進みが速いのはマンネリ化しない為ですので、間違われないように↑ノ申し訳御座いませんでした。現在第二章怒涛の展開！！ 寄ってらっしゃい見てらっしゃいですね、ではどうぞ

（土下座

物語用語紹介（前書き）

さて、まずは謝罪。

友人曰く「前より酷い」の一言で削除されました。

結果、友人と内容を考え、書き上げた結果です。

今度は削除不可能、不能、完全作品として書き上げます。
では、どうぞ！

物語用語紹介

ライツアーク

通称『光を創る世界』。しかし神様曰く神史上最低最悪な世界。奴隷制度、君主制政治、世俗に塗れた新興宗教。紛争内戦戦争。最低最悪な単語の羅列が存在する世界。第四の大陸から成り立っており、数百年前の戦乱で分かれたのだと言う。

魔法を主力に、空を舞う船や、車、バイクと言った乗り物、普通に海を走る船を除けば他は全てと言う訳では無いが、魔力や魔力の秘められた魔石によって動いていると言う。

魔力

自然界に存在する不思議な力。

自然界に干渉する事で、魔法攻撃、魔法治癒、魔法修復といった様々な便利ことが出来る。

しかし、干渉するには、魔法学校の魔法科に通う必要がある。独学でも習得は可能だが、学校で学んだ方が楽だと言う。

東方国家群

西方国家群と数百年前の戦争で対峙し、勝利した大陸。国家の一番多い大陸であり、様々な国家から成り立つ。

マテリアワールド 物質世界

地球の事を指す言葉。

物質や法則が完全に支配する事から名付けられた。年に一度、地球から合計十名の地球人がレジエンディアの召喚させられる。

アクトセリア帝国

東方大陸東部を統治する軍事大国。
覇権を狙う一国でもあり、東方大陸完全統一を狙う。

ラディルフィア王国

東方大陸西部に位置する王国。

同じく覇権を狙う一国で、東方だけでなく全大陸統一を目指している。

海や川、樹林地帯に近い為に、様々な産業に恵まれるが、その分魔物の襲来を受け易い。

エルテニア王国

東方大陸北部に位置する王国。

アクトセリア帝国と隣接する砂漠の中に佇む国家。

砂漠の中に存在するが、近隣にオアシスが多数有る為飲料水や食物には困らないが、武装に金属製品を使用する為に、ラディルフィアからの輸入に頼っている部分がある。

アシミネシア王国

覇権主義を掲げ、覇権を狙う一国。

軍事大国でもありながら、身分差別、階級差別、人種差別、貧困差別、奴隷制度が未だに定着している国家の中では強力な分、奥底が深い国家。

大きな湖と大森林の近くに存在しているが、魔物避けの結界を張り巡っている為に、普通では魔物に襲われる事はないと言う。

ケルニス王国

アクトセリア帝国とは現在冷戦中の中央に位置する軍事国家。

北部地方への進出を目指し、物資補充と休憩場所として何処かの国を一国配下に付け様としている。現在は特にない。

エーディハイム港町

腕っ節の集まった港の町。帝国や王国に反抗意識や反対意見を持つ者たちで構成された場所であるが、元々は皆海賊上がり。輸入や輸出に頼ることなく、自分達で採って来た物や奪って来た物で対抗する。

諸国家群

北部に存在する、小さな国家群。

この国家群の集まりで成り立つ居場所は色々と存在し、多勢で攻め落とす際には魔法に注意を心掛けている。通称『術国』と呼ばれる程。

魔法

レジェンディアに存在する力。

^{スベル}詠唱により発動を可能とし、自然界への干渉をする事で、神々を召喚する事も可能とされているが、召喚出来る物は数少ないとされている。

^{スベル}詠唱

自然界に干渉、精霊、神々へと祈りを捧げる為に存在する言の葉。長ければ長い程、威力は増し、短ければ短い程威力は低い。

^{アビリーテ}能力

魔法とは違った、それぞれの剣術や武術、流術で行える行動術式。剣で攻撃する際に、剣に炎を纏わせるのを魔法とするならば、剣による連続攻撃は能力である。

業Ⅱ能力と捉えるのが良いかもしれない。

魔銃

通称？魔導銃？と呼ばれる軍用兵器。

魔弾と呼ばれる魔力の秘められた弾丸を放つ事以外にも、魔力自体を含め、そのまま魔法の弾丸、閃光として放つ事も可能。

解放軍

帝国の意志に飲み込まれている者達、奴隷達、差別により苦しむ者達に平和を与える為の組織団体。しかしその反面、皆が魔法を当たり前の様に使う為に、被害が大きいのが特徴的。

『民族解放』と『革命』を主義に掲げ、戦い続けている。

黒鷲

解放軍の頂点に立つ組織団体。解放軍同様『民族解放』や『革命』が主義だが、実質戦争の表舞台に立ち、戦争の緩和や、鎮圧。紛争も追加するが、魔法使い、戦士にせよ集まるのは上位ばかりで、通常解放軍同様の行動は行わない事が多い。

ISTS (Infinite System The Sekondo)

大量殺戮兵器として開発された技術の結晶。

魔力の源である魔石を動力源に使用し、大量生産されている模様。実際他にもDSTT (Disteny System The Teard) 等と言う兵器も開発されたらしいが、処分され、現在は新型ISTSが開発されているらしい。

第一章登場人物紹介（随時更新）

名前：七海 棕 | R y o N a n a m i |

年齢：17歳

職業：高校生

部活：無し

装備：不明

能力：『ダルア救済へと導く闇』サルバティア『クリエイス創造し想像する者』クリエンツ

体質：『死隔』死から隔絶された者

台詞：『最低最悪な世界を最高で最良な世界に変えてやるさ、それが俺だ』

本作品の主人公にして、不死身の体質を持つ不運過ぎる青年。

小学時代から剣道、柔道、空手を習い続け、有段者。それにしては華奢で細身な肉体。

黒髪黒眼に黒縁眼鏡を掛けており、ラフな格好を好む。

ヤル時はヤルのだが、普段はダルそうにしており、ツッコミ役。

卑怯でも姑息でも作戦は作戦と言い切り、必ず皆生きて帰る事を目標とする。

頭も良く、運動神経も悪くは無いのだが、特筆すべき点が無い為に、『普通』と言われている。

温厚で人当たりが良く、優しい性格の持ち主で、怒ると何が起こるか解らないと言う。

名前：無し

年齢：不詳

職業：神界第零番統括創造神

趣味：惰眠

装備：不明

能力：『ディア授け分け与える者』ギフリアアハルト

体質：『絶対加護』絶対に護られる

台詞：『脇役より主役ってね』

棕を異世界に召喚した自称神様。名前はまだ無い。

数億の能力を所持しており、それを分け与える能力を所持する。

金色の長い髪を、碧眼持ち。運動神経抜群克頭も良いが、ドジ。

案外主人公に優しく、厳しい時は厳しい母親のような存在。

喧嘩にもよくなるが、アドヴァイスもよくしてやり、優しい場合は慰めてもくれる。

名前：リーラ＝ゲシュタルト

年齢：15歳

職業：奴隷

趣味：自然観照

装備：『アルターマスティア998』

魔法：『ウィアレント疾風』

体質：特に無し

種族：人間

台詞：『私に出来る事をするだけです。だから、私は前へと進みます』

己の住んでいた故郷が内戦により壊滅し、奴隷として売られた少女。淡い紫混じりの銀色の髪と、紫色の瞳を持つ美少女で、スタイルも年齢の割りには豊満。

名前のリーラは『薄紫色』である為、髪の色から取られたのかもしれないと言う。

優しく、微笑む姿や照れる表情に棕は何度かノックアウトされている。

撫でられる事を好み、褒められる事をする。泣いてしまう場合も多く、感情豊かと言われている。棕に懐いている。

名前：バイツ＝アルトハイゼン

年齢：17歳

職業：賞金稼ぎ

趣味：絡む事

装備：『エルシアクエスター』

魔法：『ローティアメステイ火炎』

体質：特に無し

種族：人間

台詞：『熱い熱いね……そうだな、熱くなきやなあっ!!』

一言で言えば暑苦しい直情型熱血馬鹿。

赤い髪と赤い瞳の持ち主で、赤い髪を上につんつんに逆立てている。左耳には魔力増幅ピアスを付けており、黒と赤二色構成の服を纏う。明朗快活で、馬鹿だが、皆の支えとなる人物。賞金稼ぎとして今まで過ごしていた。

近接戦に関しては、もはや騎士団に入団出来そうな腕の持ち主で、魔法は中級程度。

攻撃的で、好戦的。負けたら相手を好敵手とする。

第零話 後方不注意（前書き）

はい、どうも。

完全深夜投稿。

さてさて、どうなるのか？

設定の都合故、多少物語に変更が御座います。
それではどうぞ

第零話 後方不注意

「君は死なないのではない。死ねないんだよ」

「……はい？」

この言葉が全ての始まりであり、終わり。

この言葉が全ての終わりであり、始まり。

嗚呼、中間と語尾が違っただけ何て、皮肉なのかね？

そもそもの始まりは、約二時間前の事。

高校二年生二学期終業式終了後、俺は顔の下半分をマフラーで覆い、何時もの帰路を徒歩で帰っていた。

季節は冬、本日の気温は最高で確か4度、最低マイナス1度とか言っていた。

（朝は氷張ってたしなあ……、今夜は雪かねえ）

と、言うか雪が降る前には帰宅したい。

夜間雪が降るのは構わないが、帰宅途中での雪はホントに勘弁して欲しい。

雪は嫌いだ。

交通網が停止するから。

雪は好きだ。

幻想的だから。

矛盾している？ 致し方無いだろうよ、これが本音なんだから。

「てかホントに寒いな……、まあ冬だから仕方無いけど」

俺は溜め息と同時に白い息を吐き出し、天を仰いだ。

空は何時の間にか、青空では無く、灰色の空に成っている。

厚い厚い雲が覆っている様で、雲の隙間が無い。

「こりゃあ夜降るかもなあ……」

天を仰いで一人呟いていれば、冷たい風が吹きぬけた。

「寒っ！！」

俺は両腕で己の体を抱き締める様にして震え上がれば「さつさと帰ろ、さつさと」と続けて歩み始める。

そもそも雪が嫌い以前に、冬が嫌いって言えば良かったのかね？

数分後、見えて来た自宅。

だが、その前に存在するのが、悪夢の十字路二連発。

事故発生率、死亡事故率、両者ともに一番高い場所である。

俺はまず一つ目の十字路を左右確認してから渡り、次も無事渡る。

さてさて、今日も無事に怪我無く帰宅しましたとさ――。

まあそうは問屋が降りなかったよね。

完全に安心し切っていた俺は、家の前で自宅の鍵を探していた。

確かポケットに、などと呟いて。

刹那、形容し難い一撃が俺を吹き飛ばした。

何故吹き飛ばされている？

後方確認しなかったから。

何故吹き飛ばされている？

不注意。

何故吹き飛ばされている？
自業自得。

そのまま投げ出された俺は、冷たい、舗装されたコンクリートに
転がった。

声が出せない。

息が吸えない。

痛みが無い。

確実に感覚が麻痺している。痛みも限界を感じると感じなくなる
らしいよ。助からないと自覚しているからなのか、それとも痛みを
感じ過ぎて狂ってしまったのか。

朦朧とする意識。

霞む視界。

歪む記憶。

俺は天に向けて手を伸ばし、指先に触れた冷たい感触に綻ほころんだ。

嗚呼、予想通り、今夜は雪だ、と。

空から舞う綿の如き白い結晶は、俺へと積もり、溶けて行く。
紅色の雪、か……。

中々幻想的じゃあないか……。

其処で俺の意識は完全に途絶えた。

第零話 後方不注意（後書き）

感想をお待ちしております。
それでは

第一話 桃源郷じゃなくて天国でした

そして今に至る。

俺は今、何故か解らないが寝転んだ状態で空を見上げていた。
いや、それよりも何故、生きている？

俺は開く事の出来た瞳に驚いてから、両手を目の前に持って来て、
開いたり握ったりしてみる。

「生きてる……、のか？」

俺はそう呟いた後で、両手を投げ出し、深呼吸した。

甘い花の香り。

冷たい風。

暖かい日光の香り。

鼻孔に流れ込む香りは情報として脳内で整理され、現在状況を把握しようとする。

で、ちよつと待て。

日光？ 花？

ワイワイワイ？

「……」

俺は上半身だけ起こして、周囲を見回した。

一面の、大地を彩る色取り取りの花畑。

木々に実るのは、赤い果実。

吹き抜ける風は、季節による物では無く、花畑を両断する様に流れている川による物。

さて、読者諸君に質問だ。

俺は先程まで何処に居た？

……その通り、冷たいコンクリの上だ。

季節は冬なのに、こんなに花が咲いているわけが無い。
てか川も流れていなかったぞ、傍に。花もそうだけど。

「此処、何処よ……」

俺は口から思った事を漏らせば、再び寝転んだ。

そもそも日本にこんな桃源郷みたいな場所あったか？

嗚呼、沖縄とかにならありそうだな、風土的に。

そう言えば、修学旅行沖縄だったよなあ――。

「現実を直視しなさいな」

泡盛旨かったなあって、はい？

軽く現実逃避自暴自棄になっていると、声が掛けられた。
良かった、一応日本らしいと思って上半身を起こす。

「……」

「やあ」

「お休みなさい」

悪い、夢だったようだ。

どうにも俺は頭の中が少女漫画な奴の脳内に来てしまったらしい。

「寝たら軽い飛び膝蹴り喰らわせるけど準備は？」

「さて、お話聞かせて貰いましょうか、お嬢さん」

瞬時に体を起こせば、正座して、敬礼をする。

「最初からそうしてよね、私だって脅しとか嫌なんだから」

「あ、はい」

素直に頷いて、俺は「せんせー」と手を上げた。

「はい、どうぞ」

「此処って何処ですか？」

「天国」

「……お休みなさい」

満面の笑顔で告げられれば、俺は再び寝転がる。
無いわ、絶対夢だよ。

確定、マイ、ドリーム。

「レッツゴー救急車」

「は——っごは?!」

夢だと確定して眠ろうとしていたら、見事に膝が俺の後頭部にク
リーンヒットし、俺は軽く吹き飛ばされた。

て、痛いわ!! 吹き飛ばすなよ、人を!! 俺舞空術とか使え
ないんだぞ!!

「てて……、悪い悪い。ってもさ、突然言われたってね、俺は天国

地獄とか信じてなかったし」

後頭部を擦りながら戻って来れば、目の前の金色の長い髪を持つ、確実に美少女にカテゴライズされる彼女は「不貞寝した君が悪い」と告げて来た。

「まあ、だから悪かったって。で、此処は？」

「天国」

再びリピートされる台詞と、彼女の満面の笑みに今度はノックアウト。

「それ、マジ？」

「大マジ」

俺は額に手を当てて、天を仰いだ。

「今日は良い天気だな……」

「これ以上私を怒らせないでね？」

「はい」

怖い。怖いよう、今般若が見えたよう……。正座して敬礼してから「で」と俺は続けた。

「此処が天国と言うのなら、俺は死んだんだな？」

これを聞いて置きたい。

多分だが、死んだだろうよ、俺は。

「死んだね、交通事故で。出血多量と内臓破裂。骨の複雑骨折に、重度の裂傷と、頭蓋骨陥没。酷い有様だったみたいだよ？ 七海君」

「……、アンタ、名前は？」

俺の名前どころか死因まで知っているのなら、裏稼業の人間か何か？

心の中で身構えていると、彼女はふわっふわした笑顔で、その貧相な胸を張って告げて来た。

「貧相言っとなっ！！！！ まあそうだけでも……、うん、私は神様。神界第零番統括創造神だよ」

「……嘘だあ」

「何その残念な物を見る哀れんだ視線！？」

「だって、ねえ……」

暴力で解決するし、可愛いけど、貧相だし。

「だから貧相言っとなっ！！ 結構気にしてるんだぞ畜生めっ！！」

「あー、はいはい。解ったから涙目にならないの」

取り敢えず泣かれると、本物の神様だと面倒なので泣き止まず為にも、その小さな頭を優しく撫でる。

「むう……、まあ話を戻すけど、君は死にました」

「はい」

「で、此処からが本題の中でも超本題」

「今までのを超える程の本題ってどんな本題よ?!」

実は俺は能力者でしたとかか？ 有り得るかい！

「君は死なないんじゃない。死んだけど、実は死ねない体質の持ち主なんだよ」

「……はい？」

この言葉が俺の耳に届いた瞬間、俺の中の歯車が何かと噛み合った。

ガツチリと噛み合った歯車は、今にも動きそうだった。

オイオイ、死ねないけど死んだって、まだあの時は覚醒してませんでしたってか？

……「冗談はこの場所だけにしてくれよ……」。

嗚呼、そうだ。落ち着きたいから、コーヒープリーズ、無論、無糖で。

第二話 お願いは壮大で（前書き）

さてさて、第二話まで連続投稿！！

ヤバイ、テンション高い。

おぐふっ、落ち着って待って待てま、
アーツ!!!!!!!!!!

第二話 お願いは壮大で

さて、今、俺は美少女自称神様の家に来ている。

家と言っても、プレハブの様な場所で、仕事器具が散乱していた。青いコードや、赤いコード、黒い太いコードに「書類の山」。

座る場所なくね？ 等と差し付けがましい事を思っていると、神様は「こっちこっち」と手招きして来た。

こっち？ と俺は首を傾げて、手招きされた方へと歩み寄り、驚いた。

先程の部屋とは全然違う、プレイベートルームと言った所だろうか？

大きなソファ^{ベツト}ア^{レッドカー}に、硝子テーブル、小さいがシャンデリアに赤絨毯^{ベツト}と来たもんだ。これはこれは……、もう絢爛豪華としか言い様が無い。

「座って？ 説明するから」

彼女は手に持っていた缶のコーヒーを俺に投げ渡してから、指定の位置とでも言うように、黒い椅子に腰掛けた。

「お、サンキュ。じゃあ俺は此处で」

言われた通り、ソファ^{ベツト}ア^{レッドカー}に腰掛ければ、缶コーヒーを開けて、中のほろ苦い液体を喉に流し込んだ。

「ふう……、で？」

落ち着いてから、首を捻る。

「ん、まずは君の事。君はあの後救急車で救急搬送。しかし死亡で、今日葬式が執り行われたね。見る？」

「見ないよ、自分の葬式何て見たって嫌な気分になるだけさ」

肩を竦めて呟いた俺に、神様は微笑んで「そう」と頷いてから「じゃああの視ねない事についてね」と続けた。

「それ、それが知りたかった」

再び液体を喉に流し込み、潤してから、頷いた。

「君は今回は死んだけど、後一カ月後だったら死ななかった。無論、あの一撃でもね」

「はい、質問。何故？」

「君の体質、死なないのでは無い。死ねないんだよ」

直後、俺の背筋に悪寒が走った。

彼女の言葉が、妙に冷たかったのか、それとも……？

「死なないと死ねない。その違いは、死なないのは殺されれば死ねる。けど、死ねないのは、寿命が無く、永久にその年齢のまま、永久に、地球が崩壊しても行き続ける事。不老不死とか言うでしょ？あれだよね。

まあ、不老不死何て幼稚だけどね」

淡々と告げる彼女に俺は首を傾げて「じゃあさ」と続け「俺は一生このままなのか？」と尋ねた。

「うん、そうだね。一生そのままだよ」

「……、あのさあ、少しは気を使って黙ろうとしようよ」

「気を使って欲しい？ それこそ君が苦しむだけだよ」

彼女の言葉は全てが直球だ。

何度も俺の言葉をその直球で粉碎して来る。

俺は彼女にはこう言う場合では敵わないらしい。

「でね、その不死身な君にお願いがあるの」

「お願い？」

不死身な君って言うのもいささか可笑しいけど、まあ何だね？

「一つの世界に行つて、世界を改変して来て欲しいの」

「……はい？」

悪い、今雑音が。
パードウン？

「君は不死身だから、私の上げる能力も含めれば最強なの。だからその能力と体質を買つて、世界を一つ改変して来てくれないかな？」

「改変つつたつて……、世界を、だろ？」

多分、今の俺は口元が引き攣っている事だろう。それこそ歪んで

「うん、君にしか出来ないよ。以前行つた人も確かに改変したけど、即座に元に戻っちゃつてね。以前の人はそのまま消息生存不明。だから君に頼んでるの」

「いやいやいやいやいや、消息生存不明ってどんな世界なのさ？！」

物騒過ぎるだろうよ、おい。

「神史上最低最悪の無秩序無法世界だよ。名はライツアーク。君主

制政治、奴隷制度、世俗に塗れた新興宗教。紛争、内戦、戦争が未だに存在する世界。

所謂乱世^{いわゆる}。でもね、前の人は破竹の勢いで世界を改変した。だから君にも出来ると思うんだ」

「何で出来ると思った？ こんな無力平凡普通な一般男子高校生に、そもそも俺は脇役。主役じゃあないんだぜ？ こう言うのは主役に任せるもんだろ？」

「馬鹿だね、脇役だって主役になれるんだよ？ それに、私が選ぶ人は必ず主役になれる」

「……ホントにか？」

「うん、今までの人は皆主役になったよ。人生の、物語の、国の、世界の主役にね」

俺は啞然とする。

脇役から主役になれるチャンスが来たのだ。

もう脇役じゃあない、主役だよ、主役。

しかし、俺に出来るのか？

不安に駆られる。

「それに」

しかし、

「それにさ」

次の君の言葉を聞いたなら、

「君なら出来るよ、主役じゃあなくても、脇役でも」

出来る気がしたんだ。

「だって」

だって、

「君だもん」

これだぜ？

俺はぽかんとしてから、直ぐに口元に手を当てて、笑った。

目の前では何故か顔を赤くして、文句を言っている彼女。

嗚呼、そうか、そうなのか。

俺なら出来るのか。

嗚呼、忘れてたよ。

俺の可能性を。

俺だけの可能性を。

笑わせる、俺だけの物語を忘れてたよ。

あんなに付箋貼ふせんつてまで頑張った癖に、俺の馬鹿。

笑いを納めれば、彼女の頭に手を乗せて、優しく撫でてから告げる。

「上等だよ、やってやる。今更だけど、自分の可能性って奴に賭け

たくなつた」

その後の彼女のあの、太陽の様な微笑みは、忘れられなかった。

第二話 お願いは壮大で（後書き）

感想、お待ちしております

第三話 全てをぶち壊す程のチート能力（前書き）

どんな能力なんでしょうか？
それではどうぞ！

第三話 全てをぶち壊す程のチート能力

破れた窓から覗く、灰色の空。

曇りと言っわけでは無い。戦争で使われ、破壊された兵器から上がった煙や、火薬の影響による物だ。現に、周囲には幾つもの銃火器や、四本足の重火器を幾つも搭載した兵器が転がっている。

キナ臭い、血生臭いこの場所。

良く良く見てみれば、人々が地面に転がっている。

手には銃火器や、武器。

嗚呼、戦ったのか。

嗚呼、負けたのか。

嗚呼、……終わったのか。

その場に、誰かの泣き叫ぶ声が、阿鼻叫喚に近い絶叫が木霊したのは、数秒後の事だった。

其処で俺は目を覚ました。

周囲を見回し、安堵の息を吐く。

「……夢、か」

「あ、起きた？ 寝ちゃったみたいだけど」

「嗚呼……、てか天国でも寝れるんだな」

「寝れるし遊べるよ？ でも君の場合は特別だからね、はい、コーヒー」

「特別？」首を傾げて、コーヒーを受け取ってから「有難う」と告げて、カップに口付ける。

「うん、君は死ねない子。つまり、寝ても楽園に誘われる事はない」
まーた訳が分からないんですが？

「普通はね、寝ると天国に一瞬にして適応するの。それでこの場所で遊び、子供の様な感情に囚われ、二度と離れられなくなる。それが天国だよ」

「……つまり、牢獄みたいなの？」

「まあ、言い方は悪いけどその通りだね。でも、昔の人々の描いた天国はこう言う場所。死んだ人間が極楽浄土、天国で平穩に、樂に楽しんで暮らせますようにと願われ、創られた幻想の地。宗教染みちゃったね、まあ、天国は良い所じゃあないよ、それだけ」

苦笑を零す彼女に俺は頷いて、コーヒーを啜^{すす}ってから「で、話を戻したいんだが」と続けた。

「あ、了解」

「ん、俺の行く世界、その、ライツアークだっけか……。其処は何が主力何だ？」

「主力？」

「ほら、俺達で言えば科学技術とか」

「嗚呼」神様は頷いてから「魔法だよ」と続けた。

悪い、完全RPG宜しくな世界だったよ、其処。

やっぱり魔法か……。半場予想してたけどまさか的中するとは。

「魔法が主体の世界さ。自然と干渉する事により、攻撃、治療が出来る。それに魔石って呼ばれる魔力を秘めた石を原動力に空を舞う船とか、車とか、バイクとかも開発されたみたいだしね」

「あれ、案外技術も発展してるのか？」

魔法が主体の世界なのにバイクとか車って……。まあ、無くも無いが。

「案外ね。だから水道水とかもあるし、電気は稲妻魔法の宿った半永久魔石を使って作り出している見ただけで存在してるよ」

「すげえな、案外」

電器を魔力から作り出すとは……。やるな、ライツアーク。

「嗚呼、そうそう。君の能力なんだけどね」

「能力？」

唐突に切り出されれば、俺は首を傾げる。
嫌な予感がバリバリするよ、旦那。

「君の能力はまず？救済へと導く闇？。次に？創造し想像する者？」

「完全チートっぽい能力だね、それ」

「てか闇って、俺に魔王になれってか？ え？」

「チート、じゃあ、ないよ、多分」

「歯切れ悪っ」

絶対チートだよ、これ。

「でも君の想像している闇とは違うよ？」

「へ？」

何？ あの破壊専用闇とか、飲み込んだり、押し潰したりする魔王の使いそうな闇じゃあないの？

「君の闇は、光にも屈さない、むしろ光に近い、人々を救済へと導く闇。そんじゃそこの餓鬼の使いそうな光とは違うよ」

「神様が餓鬼とか言うなよな、おい」

それに光にも屈さない闇、ね……。

「ふむ……」俺は顎に手を添えて唸ってから「用途は？」と首を傾げる。

「様々、数百通りあるよ、確か」

「結構あるなあ……。使い方とかは？」

「自分で勉強」

「酷いな、おい」

切り捨てられたよ、しかも勉強とか……、嫌いなのに。

「で、次だけど？創造し想像する者？は、望めば全ての種類の武器を得る事が出来る。勿論、漫画内とか小説内とか、神様とか魔王とか英雄とかの使ってる武器でも可能だし、能力、魔法、業も使用可能だよ？」

「闇以上に全てをぶち壊す程のチートじゃねえかそれ!？」

不死身の体に闇とチートって悪魔か俺は!!

もう気持ち悪いくらい異常パラメーターだぞオイ。

「でも君、あの世界じゃあ闇だけだと二三回は殺されるよ? だから渡したの。ちなみにどんな能力、魔法、業でも使えるから人智を超えたのも出来る」

「ちなみにが要らない内容だった……」

完全に頂垂れ、溜め息を吐いてから「しかし、どうやって能力を受け渡すんだ?」と尋ねた。

書類か? 契約か? 握手とかか?

「ん? まあ、ちよつちね、じゃあ渡すよ?」

「おう、って、どうやつ——?!」

彼女の手が頬に触れば、引き寄せられ、見事なまでに唇が重なりました、まる。

数秒間の沈黙と、静寂。

ぷは、と唇が離れば、再び沈黙と静寂が空間を支配する。待て待て待て待て、俺、ファースト。

俺は己の唇に手を当てて、完全に頂垂れてから「まさか」と呟いた。

「ま、これで受け渡しは完了だよ」

「何でお前はそんなに笑顔で居られる?!」

「え、キスが何か?」

「……、もう良いや」

サラッと流されたので、俺は話を進めて置く。

頭を二三度横に振って、良しと頷いてから俺は、で、と続けた。

「ん、これで準備は万全。ついでに向こうでの資金は日本円でも自動精算されると思うよ。お金がなくなったら稼ぐ事だね」

「何その便利機能。まあ了解って稼ぐかあ……、あいよ」

第四話 殺すと言ふ事（前書き）

人間にとって最大のタブーは、

『カニバリズム』

『殺人』

『×××』

この三つ。

では、どうぞ

第四話 殺すと言う事

見渡す限り樹、樹、樹。 たまに草。

富士の樹海宜しく、此処は樹林地帯の様だ。

富士との樹海の違いを強いて言うならば、巨大な岩が所々にある程度。

結論から言わせて貰おう。

何故、都市の近くに召喚しなかった？

俺に恨みでもあるのかよ、あの神様。

完全此处、行方不明者が続出しそうな場所だぞ。

普通の登山コースとは違うんだぞ、おい。

はぁ、と溜め息を吐いてから、俺は額に手を当てて、天を仰ぎ、

葉と葉の隙間から差し込む陽光に目を細めた。

（まあ……、嘆いてても仕方無い、か……）

天から視線を戻せば、深呼吸。

（空気が美味い……、さあて、……、逝こうか）

決心すれば、俺は偉大なる異世界への第一歩を踏み出す。

誰か写真写真、月面への第一歩じゃないけど、偉大だよ、これ。

まあそんな戯言は程々に、草木を掻き分けながら歩み続けていると、不意に自分の能力の事について考えた。

（そっぴや、俺の能力。闇と創造だっけか？ あれ実際大丈夫なのかね……、救済へと導く闇とか言っても闇は闇だし……）

ふむ、と唸りながら危険性を思考する。

闇は元来、俺の中では光に必ず屈して負けるものだと思っていた。それが何だ、俺の闇は光にも屈さない、救済の闇だと言うのでは無いか。

彼女の言葉が本当ならば、信じられるが、いや、半信半疑なのだ……。まあ、結論を述べてしまえば危険性を知りたいのだよ、俺

は。

歩く事数分、岩の近くまで来れば、一度岩に背を預け、一息吐く。ごつごつとした感触がまた……、嗚呼、見事にツボに……。緊張感の無い自分に落胆しながらも、俺は未だに危険性について思考していた。

刹那――。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツツツ！！」

大地を揺るがす程の咆哮が耳を劈いた。

無論、RPGやゲームでは経験出来ない、この感覚。

それこそ、心臓を鷲掴みにされた様な、純粋な恐怖。

咆哮を聞いた瞬間、俺の背筋に悪寒が走り、脳が？逃げろ？と避難命令を体に出している。

嫌な汗が頬を伝い、顎から滴る。

「確かに能力は試してみたいけど……、初っ端から中ボス級な感じじゃね？これ」

余裕ぶって見せるのが、俺の悪い癖だ。

怖い時は怖いって言えば良いのに、と自分でも思う。

「ま、避けよう……、最初からは不味い」

俺はそう決意して、頷いてから声とは正反対の方向に体を移して――。

「グウウルルル……」

元に戻す。

さて、問題です。

人間、純粋な恐怖を覚えさせられた相手を目の前にすると、どうなるでしょうか？

正解は、

「ぎいいいやあああああああああああつっ！！
！！！！」

全速力での逃走。

俺、格好悪っ。

さてさて、現在俺は樹に身を隠し、あの巨大な熊が去る事を待っております。

逃げてから数分、逃げ切れませんでした。

で、何とか隠れられた俺は、巨大な熊を目の前に、ガクブル震えます。

いやいやいや、怖いよ。滅茶苦茶怖いよ。

（能力つつたつて……、使い方知らないもの……っ）

役立たずー！！ と叫びたい。

天を仰いで、溜め息を吐いた瞬間――。

「ゴオオオワアアアアアアアアアアアッッ！！！！」

熊もどきが突如叫び、俺の身を隠している巨大な樹を薙ぎ倒しました。

何故！？ 何故！？ 俺何かした？！

「クッソ……、逃げられない、隠れられない……、どうするよ、俺」

目の前には巨大熊モドキ、対する俺。

絶体絶命、とはこの事だね。

嗚呼、こりゃあ今日で連載終了か？ お疲れ様でしたって……、
終われるかいっ！！

「一か八か……、闇ってモンを、使ってやるさ……」

闇の使い方、呼び出し方は知らない。

なら、俺の使い方、呼び出し方を闇に教え込めば良い。

「吾^{われ}、面影に糸を巣と張る蜘蛛^{クモ}——ようこそ、この素晴らしき闇空間に」

吾等が厨二の王子様の臭いポエマーの様な台詞を改造して告げてから、両手を一杯に広げる。

さあ、頼むぞ、闇……——と、同時に己の下から噴き上がる漆黒の力。

それは某とあるの学園都市最強の黒い羽にも似ているが、また違う。

圧倒的存在感と、密度を持った、一種の力。

「グウウウツ?!」

少し怯む熊モドキを俺は見据えれば、その噴き上がった漆黒の力を己の体に纏わせ、右腕に凝縮する。

「さあ、終わりにしようか。逃げ続けて——悪いね」

同時、俺は腕を地面に叩き付け、漆黒の衝撃波の波を作り出し、熊モドキに放つ。

「ギャアアアウアアアウアアアアアアッツ——!?!」

甲高い、それこそ断末魔に近い悲鳴がその場に轟く。

漆黒の衝撃波の一撃は熊モドキを薙ぎ倒し、流し、吹き飛ばす。

そのまま漆黒の力を手元に戻した俺は、熊モドキに歩み寄り、気付く。

（外傷は無い……、中身をやったのか……？）

顎に手を添えて悩んでいると、其処で有る事が脳裏に過ぎった。

「殺した……、のか……、俺が」

そう、殺したのだ、俺が。

確かに世界には、生き延びる為に殺してしまった事は罪にならない、と言う法律があるが、それはどうなんだろうか？

俺は思う。一生のトラウマ物ではなからうか、と。

私が、俺が、この手で、殺した。手放した。終わらせた。

嗚呼、俺が、私が、この人を、この人が、この人達を――。

俺が今殺したのは熊モドキ。これが人間だったら――そう思うと、嘔吐感と、恐怖が喉を競り上がってくる。

脳内が真っ白に染まり、意識が飛びそうになる。

動悸が早くなり、呼吸が荒れる。視界が明滅する。

気持ちが歪む。精神が侵食される。

――生き残るためなら、殺せ。

――生き延びたいんだろう？　なら、殺せ

――お前は死にたいのか？　死にたくないなら迷わず目の前の敵ソレを――。

「やああめろおおおおおおおおおおおつつつつ
！……！……！」

途端に口から迸はなる、絶叫。

――お前が殺したのか？

――そうか、お前が殺ったのか。

――何て罪深い事を。地獄に落ちろ。

「や、めろ……、やめ、口オオあああああああああああ
っあああああー！！！！」

俺の何処かが壊れて行く。崩れて行く。落ちて行く――！！

刹那、俺の脳裏に過ぎつたのは、また違う事。

それは、彼女の、太陽の如き、眩い笑顔。

そして、救いを求める、世界の声。

皆が皆、求めている。

するとどうだろうか、次第に声は消えて行き、俺は虚ろだが、天を見上げた。

迷わず、空一点を見詰める。

そのまま深く、深く深呼吸をすれば、瞳を閉じ、頷いた。

「……、よし」

俺に出来るのは、確かに救いと言う名の、殺しだ。殺して、救う事しか出来ないかもしれない。それでも、それでも、人が救われ、喜んで、微笑んでくれるのなら……、俺は俺に出来る事をする。

この俺の進む道が、血塗られようと……。

俺は、俺にしか、出来ない事をする。

俺の、俺による、俺らしい事をすれば良い。

これは俺にしか出来ない事、俺だから出来る事なんだ。

この世界、生き残る為には殺すしかない。

無殺生は不可能なこの世界。

なら、迷ってはならない。

迷ったときが、俺の死。

俺は気を引き締め、落ち着いてから、再び歩み始めた。
闇も使えるようになったし、取り敢えず森を抜けよう。

俺はそう思い、再び歩み出す。

足取りは覚束ないが、それでも一歩一歩確実に。

嗚呼、暖かい無糖のコーヒーが飲みたい、それで落ち着きたいよ、
全く。

やれやれだぜ……。

第五話 奴隸な彼女とサディな俺と（前書き）

さてさて、サディⅡサディスティック。

それではどうぞ。

またまた深夜更新ですね、ホントこの習慣駄目だなあ。

第五話 奴隸な彼女とサディな俺と

さてさて、それでは今の俺の現在位置を確認してみよう。
現在俺は、樹林地帯。

そう、未だに抜けられずに居た。

しかし、少しは進んだらしく、景色が少し違っている。

その少しの為に、様々な奴に出遭った。

エンカウント率高くねって言う位出遭った。

中でも火を吐く兎は見物だった。口から轟ツと吐き出したと思っ
たら火炎範囲半端じゃなくて、危うく燃やされる所だった。

いやはや、魔物にも色々な種類が居るんだね、教訓。

ふむ、教訓を得られた事は良い事なのだが、代わりに問題が発生
している。

それは至って簡単な問題だが、難しい矛盾した問題。

それは寢床と食糧問題。

不死身とは言え、眠くなるし、腹は減る。

(さて……、どうした物か)

むう、いつその事魔物でも狩って、肉でも焼くか？

上手に出来ましたーってか？ 悪い、肉焼き機、無い。

一発で打ち切られた希望。さて、ホントにどうしよう。

暫しの沈黙。

鳥モドキの鳴き声が静寂と沈黙の中を飛び交う。

そして至った結論は、

「取り敢えず歩こう。この森を出ない事にはどうにも……」
と、言う事。

これが妥当だろうよ、森から出れば何かあるだろうよ、きっと。

俺は溜め息を吐いてから、きつとの希望に縋り、歩み出す。

これは明日の筋肉痛は免れないな……。

「……」

諸君、此処は本当に樹海らしい。

出口が見当たらない。

富士の樹海だろ、此処。

頂垂れ、大木に背を預け、崩れ落ちれば、空を仰ぐ。

「嗚呼……、そろそろ夕暮れか」

木々の間から差し込む、山吹色と橙色だいたいの光が、時間を告げている。
どうするよ、俺……。これは岩の上で野宿ルートか？

で、そのまま襲われてまた天国行きルート？

「……、はぁ」

人生に疲れたサラリーマンの様な、深い、暗い溜め息を吐く。
来て早々死亡ルートかぁ……。俺、何処で死亡フラグ踏んだんだ
ろ。

嗚呼、この世界、もう少し堪能したかったんだけどなぁ……。

闇も折角使い方覚えたのに……。

嗚呼——。

刹那、現実逃避していた俺の耳に、それは飛び込んだ。

「さっさと歩けやコラアツ——！」

「何チンタラしてンだよ——！」

「！？」

はっはっは、と現実逃避していた俺は瞬時に現実に取り戻され、
声のした方向を探す。

（何処だ……。確か後ろだったよな……。？）

大木に背を預けたまま立ち上がれば、顔だけを大木から出し、そ
の声を探す。

「何転んでやがる！！　こっちは急いでんだぞ、奴隷の癖に泣いてるんじゃないぞ、ああ！？」

「つく……、な、さい……っ」

（……、こっちか）

声を完全に聞き取れば、体勢を低くし、違う大木へと移った。

「さつさと歩けや、じゃねえとその足、ぶった斬って使い物にならねえ体にするぞ、ああ？」

「んなに叫ぶなよ、うぜえ。テメエ、わかってるよなあ？　此処で俺達が見捨てれば、魔物の餌になるって事をよお？」

まず二人発見。

一人は中年太りした男。うわ、鎧から肉はみ出してるし……、気持ち悪いわあ。

てか角生えてないか、あれ。　鬼か？

もう一人も太ってるな、それもまた体に合わない鎧着てるから肉出てるし……。

と、あら、アイツにも角……、鬼なのかね？

まあ角より鬼よりも何よりも、

（自分にあつた鎧着るよな……）

ホント、そう思う。

馬鹿だろ、あの二人。

「てかよ、兄弟」

「あん？　んだよ」

て、兄弟だったのね、納得。

「あの餓鬼、俺達の奴隷ならよ、好き勝手しちまわねえか？」

「好き勝手つつたつて、何するんだよ？　物運せてるだろ？　それに俺達にこれ以上出来る事あるかあ？」

「あるだろうがよ、馬鹿だな。俺達は男、アイツは女」

「ま、まさか兄弟っ！！」

物凄く嫌な予感がした。

待て待て、頼む。待て。

「そつだよ、奴隷なら拒んじやならねえ。だから犯^ヤつちまわねえか？」

「壊れちまったら棄てるってか？」

「嗚呼、良い案だろう？」

「嗚呼、お前にしちやあ良い案だ」

下卑た、吐き気を覚える位気持ち悪い最低な笑い声が俺の耳に木霊する。

……はあ。

悪い、極度の馬鹿二人だったようだ。

奴隷を使って性欲発散？

奴隷なら拒めない？

壊れたら棄てる？

そう言えば、神様言ってたな。奴隷制度があるって。

成程、これがそうなのね、納得。

嗚呼、ホント、最低最悪な世界だ事。

まあ、そんな最低最悪な世界を改変する為に俺がいるんだけどさ。

嗚呼、全く、これじゃあ街に着く前にカロリー使い過ぎて倒れち

やうな、うん。

さてさて……、まあ、潰して来ますか。

今度の為にも、ね。

「よお、嬢ちゃん？」

「は、はい……、荷物、運び、終わりました」

「よし、それじゃあよ、お前にしか頼めない事を頼んで良いかあ？」

「は、はい？」

後五秒。

「俺達の息「はい、ストップ」ごふあっつ？！」

「きよ、兄弟?!」

ふう、ギリギリセーフ。

発禁になっちゃうだろうよ、言ったら。

「テ、メエ……、何しやがるってか何者だ!!」

うひゃあ怖い怖い、鼻血出しながら睨まないでよ。

「兄弟、大丈夫か?!」

「あ、嗚呼……」

うわ、正直言って気持ち悪いぞ、おい。

男が男の鼻を撫でるな、ホント気持ち悪い事この上ないな、お前等。

「で、えーっと、何者か、だっけか?」

「そくだよ、いきなり蹴り飛ばしやがって……っ、後少しかったのに!!」

「そくだ、殺されてえのかよ、ああ?!」

殺す、ね……。

俺は溜め息を吐いて、肩を疎^{すく}めてから、彼等を見据え、告げる。

「何者か……、世界一の最弱だよ」

「世界一の最弱だあ……? 嘗^なめてんじゃねえぞこらあっ!!!!」
いや、嘗めてないし。

わわわ、怖い怖い。鼻息荒いよ、落ち着いて。

「俺達はなあ、言わずとも知れた最強の「割愛」……てめえ、ミニチにしてやらああああああああああああっっ!!!!」

あ、キレた。

二人の武器は斧と剣。

二人は俺に駆け寄れば、奇声を発しながら、それぞれの武器をブンツッ!! と風を斬り、唸らせながら振り下ろして来る。

「あ、危ない!!!!」

お嬢さん、心配後無用。

それにしても錆びてるね、刃こぼれもしてる。
どれだけ殺してきたのか……、血生臭いし。

俺は直撃寸前、溜め息を吐いてから、囁くようにして紡ぐ。

「闇刑に処す」

キツインツツ……！！

金属の弾かれた時に発せられる、澄んだ音が響き渡る。

俺を包む、漆黒の闇。それはまるで盾の様。

凄いな、これ。意思次第でこつも出来るのか……、確かに用途は
結構ありそうだな。

さて、

「お前等さあ、だから童貞なんだよ」

罵倒タイム。

「なっ、テ、メエ……！」

「よ、止せ……！！ 敵う訳ねえ……！！」

「つく……」

あら、闇って案外主流じゃないんだね。そりゃあそうだろうけど
さ。

さて、

「そんな肉がはみ出してる体にあつてない鎧着てさ、何が良い訳？
何を求めているの？ 女にモテたいの？ なら痩せろよ蛸。格好云
々、テメエ等は格好だけじゃねえか。奴隷で性欲発散して何が良い
んだよ、童貞。てかそもそも奴隷を買った時点でテメエ等終わって
るんだよ、阿呆面。そんな豚みてえな面してさあ、一丁前に角生や
して？ 奴隷を買って？ 性欲発散目論んで？ 最低な性格をして
て、それでその体系と来たもんだ。テメエ等一生童貞の独身だよ。
一生なあ、ハハハハハハッ……！！」

悪い、完全に取り乱した。

いやね……、機嫌悪いと俺、変なモード入っちゃうのよ……、うん。

所謂、ドSモード？ まあ人は悪魔モードって言っけどさ……。

悪い、ホント悪い、完全に壊れたわ、これ。

まあスツキリしたからもう良いけど。

「っう……！！」

「お、覚えてるよ！！」

「覚えるか阿呆。さつさと散れ不細工共」

「っう、うわああああああああんっつ」

泣くのかよ？！ 精神面脆っ！！

俺は溜め息を吐いて、直ぐにスイッチを切れば、深呼吸。

なるべく優しく、スイッチが切れたばかりは表情が可笑しいかもしれないが、柔和に微笑んで彼女に歩み寄った。

彼女は怯えた様に一瞬ビクツを震えてから、後ずさった。

「大丈夫。ほら、ね？」

「ホ、ホント……、です、か？」

「ホントホント、俺はあんな不細工共みたいに酷い事はしないし、させないよ？」

不細工共って、まだ口調戻ってないな、これ……。

俺は苦笑してから更に彼女に歩み寄れば、そつとその、紫掛かった銀色の、綺麗な、それこそ埃や土で汚れてしまっているが、それでも美しさを逃さない髪に触れた。

「う……」

「怖かったね……、大丈夫だよ、大丈夫だから、ね？」

そのまま優しく、髪を梳く様にして撫でてやれば、彼女はその紫色の大きな瞳から大きな透明な雫を零して、抱き着いて来た。

俺はそれを優しく抱き止めれば、そのまましっかりと抱き締め、優しく頭を撫で続ける。

「よしよし……、もう大丈夫だよ。怖かった怖かった」
「ふ、えええ……つつ、つく、ああ……っ」

それから数分、いや数十分間、時間は解らないが、俺は彼女を抱き締めたまま、嗚咽を聞き続けた。

第六話 微笑む彼女の奴隷解放（前書き）

さてさて、第一章も間も無く最期。

ファイナルチケットを取り忘れるなよおお！！！！
では、どうぞー！！

第六話 微笑む彼女の奴隷解放

あの後、泣き続け、疲れたのか俺に抱き着いたまま眠ってしまった彼女を、俺はそつと抱き上げ、周囲を見回した。

取り敢えず、この森を抜きたい。

今は寝床食糧より、彼女の方が先決。

俺は彼女を抱き上げたままあの男達の去って行った方向へと歩を進めた。

勿論、あの男達が都市から来た、と言う確証は無い。しかし、今は男達が近くの都市出身で有ると言う事に賭ける他無い。

まあ、俺としても女の子を抱き抱えたまま歩くと言う、とても貴重な体験させて貰ったわけで……。

彷徨う事数十分。

俺は苦労の末に森を抜ける事に成功する。

きっとこの事は、日本ならば富士の樹海からの帰還と言う事で新聞の一面に上げられる位の事だと俺は思う。まあそんなわけないだろうけど。

で、予想的中。あの男達は小さいが、機能している目の前の都市からやって来ていた。

「凄いな……、あれは、教会か？」

その都市の中でも、俺が目を感じたのは、巨大な十字架が一つと、小さな十字架が二つ、屋根に添えられた巨大な教会だった。

まるでドラ●エに登場しそうな教会。

それこそシスターさんやら、神父様が居るんだろうなあ、と言う想像を働かせつつ、彼女を抱き抱えたまま都市の木製の古惚けた門を潜った。

「さて……、まずは宿探しだな」

確か資金の方は自動精算されるとか神様は言っていた。

「ふむ……」

俺は顎に手を沿え、悩んでから、良しと頷いて、宿屋を探した。それにしてもこの都市は面白い。

それこそ、城下町の様な雰囲気を漂わせている。

「ほう……」

今、俺の目の前にはヨーロッパ風の街並みが広がっている。

思わず感嘆の声が漏れるほど、その街並みは整然と整理されている。

俺はその街並みを見ながら歩を進め、次の門を抜ける。

まあ芸術の都、パリの様だった、が、今の都市の結論だろう。門を抜けたその瞬間だった。

「お、おお……、す、すげえな……、おい」

先程の静寂の支配する、一種の貴族地区には無かった熱気と活気が俺の肌を叩いたのだ。

先手を打たれ、啞然としている俺の目に次々と飛び込む、日本には無かった物。

其処は多くの人々が行き交い、様々な露天や店が並んでいた。

「此処なら……、宿屋あるかもなあ」

うんうん、と頷いてから俺は歩み始める。

と、其処で気付く。

足元の感触が、先程の石畳では無く、土が剥き出しのままだと言う事に。不意に建物を見れば、これもまた乱雑に並んでいる。

（これがあの神様の言ってた貧困差別、って奴かね……）

歩みながら、周囲を見回し続ける。

人々の服装はパツと見、ローブやマントを羽織る者、シャツとズボンだけと言うラフな格好の者。中には鎧を纏った者まで居る。

髪の色や肌の色、種族の様々な様で、赤髪、青髪、緑髪。金髪、銀髪まで居る。小麦色の肌に金髪はこれまた似合っており、何処ぞのギャルだよ、と突っ込んでやりたかったのは秘密だ。

種族なのだが、RPG宜しく、二足歩行爬虫類や、兎耳の生えた人、猫耳、犬耳、中には既にお前人なのかって言う位な奴も居た。

「でもこれ位騒がしい方が俺は好きだなあ」

俺の口元に、不意に笑みが零れる。

いやね、祭りとか好きだからね、俺は。だから騒がしいのが好きなのさ。

と、出口に近付きつつある俺の視界に宿屋の文字が止まった。

「あつたつて……、ドラ●エですか、おい」

ホントに宿屋だった。

俺的には宿泊施設って言うより、プライベートホテルみたいなものとか、民宿みたいなのを予想してたんだけどね……、これ、まんま宿屋だよ。

ゲームで見る宿屋だよ、おい、RPG要素大好きだな、あの神様。「ま、取り敢えず宿屋と食糧はこれで確保、つと……」

しかし、初宿屋、と言う事もあるので心躍る俺は、彼女をしつかりと抱き抱えて、宿屋へと向かったのだった。

その夜。

俺達はギリギリで予約を勝ち取り、一つ部屋を貸して貰った。

部屋は案外広く、ベッドはシングルだが、化粧台、洗面台、風呂まで完備されている。

電気も、これが神様言っていた電撃の魔法を蓄積した魔石なのかどうか解らないが、先程から煌々と部屋を照らし続けている。

彼女をベッドに寝かせた俺は、俺もまた彼女の隣に寝転んでいた。

シングル、とは一言に、これまた案外ベッドは広かった。
一つのベッドで二人は余裕って言う程広かった。

へ？ 恥ずかしくないのかって？

全然。

と、

「ん……、此处、は……」

隣で眠っていた彼女の口から言葉が紡がれた。

「あ、起きた？」

目覚めた彼女に、俺は声を掛け起き上がる。

「は、はい……、あ、あの、先程は有難う御座いました」

頷いた彼女もまた起き上がり、俺に向けて頭を下げて来る。

「いやいや、構わないさ。それで？ 君の名前は？」

苦笑して肩を竦めてから、俺は首を傾げた。

「リ、リーラィゲシユタルト、です……」

「リーラちゃんか、そかそか。俺は七海椋。宜しく」

「は、はい」

手を差し出す俺の手を、おずおずと握って来る彼女。

きゅっと握られれば、そつとその小さな手を握り返し、微笑む。

「でさ、君は何であんな不細工な連中に捕まってたの？」

「不、不細工……、つて、……、いえ、捕まってたのでは無くて、

お金が無くて、父に身売りされまして……、はい」

「奴隷になった、と……」

「……」

コクリと頷くリーラ。

俺は小さく嘆息してから「何で君のお父さんは君を身売り何てしたんだい？」と尋ねる。

「ん……」

すると、彼女は黙り込んで、俯いてしまう。

ヤベツ、聞いちゃならない事を聞いたか？！

「い、いや、無理に言わなくて良いよ？ 誰にでも話したくない事

はあるからさ」

「い、いえ……、信じて貰えるか……」

「つて、へ？」

「話しますよ？」

「あ、嗚呼」

信じて貰えるかつて、どう言う事だ……？

「私の暮らしていた村、リゴスって言うんですが……、一日にして、帝国により、壊滅させられてしまつて……。家も母も亡くした私と父は、その、逃げたのです。村から、でも、お金が無くて、父は私を身売りして、……」

一日にして、壊滅？

多分、今の俺は目を一杯まで見開いている事だろう。

帝国による、侵略？

違うな、これは多分……、領土目的だろうよ。

領土目的？ 何故分かる？

勘。

「そ、か……」

俺は小さく、静かに頷いてから、そつと彼女の髪を再び梳く様に撫でる。

成程……、帝国は領土目的でその村を破壊。で、父親は彼女を売つて逃亡つて言つた具合か……。嗚呼、神様よ、貴女が最低最悪だと言つていた意味が良く分かつたよ、こつと言う意味だったのね……。成程だよ。

俯いて、目を細めるリーラ。

其処で俺は思つた事を彼女に尋ねてみた。

「ねえ、リーラ？」

「は、はい」

顔を上げて「何でしょう？」と首を傾げる彼女に俺は「奴隷を買い取る場合つてどうするの？」と尋ねて見た。

「へ、えと……、奴隷市場に言つて、お金を払うだけですよ、はい

……」

「市場つて……、分かった、有難う。じゃあ奴隷解放は？」

「奴隷解放には私のこの首輪を壊すしか……」

「首輪？」

「はい」そう言つて頷いては、首を見せる彼女。

「……それ？」

首を傾げる俺に「はい」と頷く彼女。

「それを壊せば奴隷じゃなくなるんだよね？」

「は、はい。それが決まりですの」

「よし、じゃありーう。目を瞑つてて？」

「へ……、え、あ、は、はい……、こ、こう、ですか？」

目を瞑つて、上目遣いに首を傾げてくる彼女に「可愛いんだよド畜生」と叫びたいのを我慢して、俺は闇を展開する。

「そうそう、ちょっと待つててね？ 痛かったら言つ事」

「は、はい」

「壊せ」

直後、闇は鋭くなり、彼女の首輪に向けて突つ込めば鍵穴に突き刺さり、そのまま貫き、砕いた。

「ん、良くやった。じゃあ目、開けて良いよ？」

砕けた首輪を手にして、俺は彼女に許可を出す。

「あ、はいつて……、へ？」

「一々動作が可愛いなつて言つのはさて置いて、これ、分かる？」

「あ、……」

彼女の前で赤い首輪をひゅんひゅんと回せば、彼女は己の首に触れて、撫でた。

「これで自由だ、奴隷じゃあない」

いや、だって奴隷のままつてねえ……？

それにこんな可愛い子を奴隷にさせて置いて溜まりますかっつての。そんな事を思っていると、俯いていた彼女の口元から、嗚咽が漏れた。

「あ、ありが、と……つぎ、ます……っ」

「あー、ほら、泣かないの、ね？」

苦笑して、俺は頬を伝う彼女の透明な雫を指先で拭ってやってから微笑んだ。

ホント、泣き脆いな、この子は。

「で、でも、わ、私、お礼何て……」

「あはは、大丈夫。あのさ、お礼の件なんだけどね？」

「は、はい？」

「俺と一緒に来てくれないか？」

彼女を一人にして置くのも危険だし、俺が一人でこの世界を巡るというのも困難だし、危険だ。仲間が欲しい、話し相手が欲しい。

「……リヨウ、さん、と、ですか？」

「そ、俺はこの世界を改変する為に今、旅してるんだけどさ。君が居れば俺も楽だし、君を一人にして置くのも俺としては嫌なんだよね。だからさ、どうかな？　って思ってた」

彼女の顔が驚きと喜びに染まれば、直ぐに俯いて「で、でも、私」と続けて「非力、ですし……、足手纏いに……」と最後の方は聞こえなかったが、そう呟いていたのは聞こえた。

俺は、ははっ、と笑ってから、彼女の頭をくしゃっと撫でて、告げた。

嗚呼、彼女はあの時の俺だ。

俺に何が出来る？

俺に出来るのか分からない。

出来なかった時の不安に刈られているのだ。

「大丈夫さ、俺がフォローする。それに、足手纏いにはならないさ、俺が保証する。

失敗しても、大丈夫。失敗は誰にでもあるし、俺何て失敗しまくりさ。それに、リーラだもん。リーラにしか出来ないんだぜ？」

俺はそのまま頭を撫で続けながら、そう告げる。

彼女にしか出来ない事をして欲しい。

それで良いのだ。

すると彼女は顔を上げて、少し頬を、ほんわかと桃色に染めてから頷いて「そ、それでは、はい、宜しく、お願いします」と微笑んだ。

「嗚呼、宜しく。リーラ」

直後、リーラに抱き着かれ、再び泣かれたのは、言うまでもない。

その後、俺の腕を枕代わりに眠る、彼女の小さな頭を撫でながら、まだ幼さの残るその眠る表情を見詰め、告げる。

「お疲れ様……、ゆっくりお休み」

不意に、窓の外に見えた夜空は、流星群が降り注いでいたのは、まるで彼女が奴隷から解放された事を祝福している様にしか、俺には思えなかった。

第七話 彼女は狙撃手、俺は黒騎士、そして招かれざる客は？（前書き）

長いサブタイトルと思いました。

それではどうぞ！

ととうとう直情型馬鹿が登場します。

第七話 彼女は狙撃手、俺は黒騎士、そして招かれざる客は？

まず俺は驚かされた。

何があつたか、と言うとだ。昨夜、彼女と眠りに落ちる前に刻んではないが、試しに携帯にアラームを掛けて見たのだ。

神様曰く、携帯が使えるらしいのでやってみたのだが——それはまあ見事なまでにバイブで鳴り響いた。

結果から言わせて貰えば、俺は7時55分と言う滅茶苦茶中途半端な時間に起床した。

俺の隣では、未だに俺の腕を枕にして眠りに付いている彼女の姿がある。相当疲れているのだろう、俺は微笑み、そつとその髪を撫でる。

それにしても、帝国、か……。

俺は彼女の髪を梳く様に撫でながら、思考する。

（帝国は領土を求めている……、なら他の国も同じなのかね……）
他の国も同じなら、この俺の居る世界の諸国家群や村群はすべからず狙われる事だろう。しかし、どうにも安易過ぎる。

（領土を求めているのなら……、村じゃあなく、国を狙えば良いだろうに。一日で村を壊滅させられる程の武力を持つてゐるなら尚更だ）
悩みながら、其処である結論に至る。

（領土、武力……、そうか、村を潰したのは、物資補給地点を得る為か……。それに、皆殺しにさえしていなければ、奴隷だつて集められる……）

奴隷補充、物資補給場所の会得。

我ながら浅はかな思案だが、これが結論だ。

（大規模な戦争が起こる前に……、何とかしないとまらないな……）
再び寝転び、天井を見上げれば、唸る。
すると、隣で動きがあつた。

「ん……」

「起きたか……？」

体を起こし、首を傾げれば、彼女は薄っすらと瞳を開けて、俺を見上げていた。

「お早う」

「……、お早う、御座いまふ……」

「寝惚けてるなあ……」

クククと俺は笑って、再びその髪を撫でてやれば、彼女は瞳を閉じ細め、気持ち良さそうにしている。

「ふむ……、それにしてもまずはお風呂に入ったらどうか？」

「お、風呂……、ですか？」

「嗚呼、朝風呂つてのも良いものだぜ？」

無論、女性に臭う等と言えないだろう。

言った瞬間、俺は男として終わっている。

「で、は……、はい、失礼ながら」

「ん、行つてらっしゃい」

俺から離れ、とてとてと風呂場に歩んで行き、中に入れば扉を閉める。

後には水の流れる音が響いた。

「さて……、これからどうしようか？」

俺もまた顔を洗い、歯を磨いて、スッキリしてから首を傾げた。俺の目の前には髪を乾かしている彼女の姿。

「はい……、どうしましょうか？」

「ふむ、早速行き詰ったか……」。

「て、嗚呼……、まずはそくだよ、忘れてた。」

「服、買おうか」

「……、お願いします」

彼女の服装が、奴隷装束だと言う事を、サッパリ忘れていた俺は、極度の大馬鹿だ。

宿屋から出れば、俺達は周囲を見回す。

「服屋服屋は……っと」

「あ、あれですあれ」

「ん？ 嗚呼、あれか」

彼女の指し示す方向、其処に服屋があった。

てか渋谷か此処は、いや、原宿か？ 滅茶苦茶騒がしいな、服屋。まあ騒がしい服屋つても嫌いじゃあないが……。

「それよりリヨウさんリヨウさん」

「はいはい？」

服屋へと向かいながら、俺の服の裾を引っ張って来るリーラに俺は首を傾げた。

「何でリヨウさんの髪、黒いんですか？」

「へ？ 黒いのって駄目なの？」

ヤベ、黒いの駄目なら目も駄目じゃん。

髪染めてカラコンかね、これは？

「い、いえ、駄目、と言うわけでは無いですけど……、珍しいので」

「へえ……、まあ黒いのは産まれ付きさ」

良かった、禁止じゃないんだ……。

まあ髪の色は染めて誤魔化そう……、何色にしようかな……。

服屋に入った俺達は、まずは俺の髪を染める為の髪染めを何故か服屋で見出し、プラチナブロンド、つまり白銀を入手。

さてさて、服服と……。

「リーラはどんなのが好みなの？」

隣を歩むリーラに首を傾げて尋ねれば、顎に手を添えて唸った。

「んー……」

と、其処で彼女は一式の服装の前で立ち止まる。

「つて、これ……？」

「わ、私、元々？^{スナイパー}狙撃手？だったので、はい……」
「嘘?!」

甲高く響いた俺の声は、周囲の客の視線を集めた。

ヤベツと思い、俺は周囲の客に向けて笑みを浮かべてから謝った。
申し訳御座いませんでした。

「は、はい、元々遠距離専門の狙撃手でした。ですので、これが目に止まって……」

「成程……」

服を指差すリーラ。

彼女の指差す服は一種の改造された女性用軍用服。藍色のマフラーに、黒より少し明るい位の濃いグレーのジャケットに、中には黒と白の胸当てとシャツを組み合わせた物。下は同じく黒より明るい位の濃いグレーのスカートに、下にはニーソックスだっけか？ あんなのの白いと黒で金属板が組み込まれていると思われる奴が組み合わされている。森林地帯とかでは隠密に使えるような装備だな、おいと最初に思った。

俺は暫く悩んでから、

「店員さん」

と、叫んだ。

「あ、はい」

「リヨ、リヨウさん?!」

驚く彼女は置いといて「これ、一式で幾ら？」と尋ねる。

「ははあ、お客様。お目が高い。これはそんじやそこらの店じゃあ買えない品ですよ。そもそもこのベルトの部分、これ？F（Fu11）式魔法障壁と呼ばれる魔法を防御する結界を展開する事が可能なベルトでしてね——」

「あ、分かりました。それで、お幾ら？」

全部説明を聞いていたら日が暮れるわ。

「全部一式で19800メイツです」

「メイツって……、ふむ」

俺は財布を取り出して、中を確認する。

「つて、……、成程、これが自動精算か」

財布の中の4万分のお札は、皆バラバラになっており、一つ一つに10000メイツと描かれている。小銭も小銭で、皆銅貨や銀貨の類。

「では、これで」

「あ、はいっ。有難う御座います。早速御試着なさいますか？」

「そうさせて頂きます、ほら、リーラ」

「ふえ、あ、え、あ、はいっ」

うずうずしていたのか、リーラは驚いて周囲を見回してから、俯いて、顔を真っ赤に染めてから、小さく頷いた。

「嗚呼、店員さんや」

「何でしょう？」

「お釣りは良いから」

俺はそう言つて一式を担げば、リーラと共に奥の試着室へと向かったのだった。

「おお……」

「どう、でしょう？」

雰囲気変わったわ……、いや、何処からどう見ても狙撃手だよ、

これ。

グレーに銀色の髪つてのがまたね……、良いわ、うん。

「さて、じゃあ今度は俺のか」

「あ、あのっ」

「ん？」

「あ、あ、有難う御座いましたっ」

勢い良く頭を下げるリーラに俺は苦笑してから、その頭を優しく撫でて「構わないよ、それじゃあ俺の服にも付き合ってくれ、な？」と告げた。

「は、はい」

嬉しそうにはにかむ彼女に、一瞬「可愛過ぎるよおおお」と叫びたくなったのは、秘密だ。

服を見ながら、ふむと唸る。

今度から俺も銀髪になるんだし、黒かなあ、等と悩んでいると――

「こ、これは……」

「わ……、リョウさん、似合うんじゃないですか？」

リーラも感嘆の声を上げるほどの物。

上は黒いシャツ、下も薄手の黒いスラックスの様なズボンだが、拘束具の様にベルトが巻き付いている。シャツの上から黒い、革と思われるレザーコート。これもまた胸と右肩に金属板が仕込まれており、左胸には小さなポケットがある。何と更には指先の出る黒い手袋付きでさて、お幾らか。

「店員さん」

「あ、はい」

そう呼ぶと、またお前かよ、がやって来た。

「この一式、幾ら？」

「あ、はい。それで19000メイツで御座います」

「ほほう……、じゃあ……、頂きます」

「有難う御座います」

深々と頭を下げて来る店員さんに俺は20000メイツ支払って
から、また「釣りは良いや」と言って試着室へと歩んだ。

実際、釣り貰ってもね……。

使い道が分からないし、まあ、稼ぐよ、稼ぐ。

取り敢えず今は、着替えよ着替えよ」

「わ……、あ」

「どう、だ……？」

完全真っ黒で現れた俺は、一度試着室の中の全身を移す鏡で自分
を見て、自分の格好に何処ぞのコスプレイヤーだよと思ってしまっ
た。

「に、似合ってますっ、はい、似合ってます！」

「お、落ち着け落ち着け、な、な？」

ぶんぶんと縦に頭を振って頷く彼女に俺は苦笑してから「それじ
ゃあ行こうか」と告げて、首を傾げた。

「はいっ、でも、何処へ？」

「あ、忘れてた……、何処行こうか？」

此処に真っ黒な俺と、狙撃手のリーラ誕生。

ふむ、と唸ってから、

「武器？」

と首を傾げた。

「で、でも、リョウさんお金は……？」

「引き出そう。多分貯金がある」

「は、はあ……、あ、でも、何時か必ず返しますから、はいっ」

「ん、期待してるよ」

俺は彼女の手をそっと握ってから、歩み出す。

今日は混むなあ、何かイベントの類でもやってんのかねえ？

店を出て、体を伸ばしてから、さて行こうとした瞬間だった――。

「お前、見掛けない顔だな？ それに髪も黒いし、眼も黒い。何処その物だ？」

赤い、それこそ真紅の、ツンツンと天に向けて尖った髪と、真紅の燃える様な瞳を持ち、黒と紅二色で構成された俺に似た、それでいて金属武具が彼の方が多い鎧の様な服装を纏った俺と年齢は然程さほど変わらなさそうな青年が、俺に向けて指を指して尋ねて来た。

あれ、嫌な予感がバリバリするんですけど……？

第八話 業炎と昏闇と（前書き）

はい、これにて第一章が終了と成ります。

案外短い第一章でしたね、まあ今回、あの暑苦しい馬鹿が登場します。

それではどうぞー！

第八話 業炎と昏闇と

「逃げるな貴様ツツ!!」

「誰が大人しくしてるかよ!!」

現在俺は絶賛逃走中。

何があつたのか、と言うとだ。

あの後俺は、あの赤い髪をしている男に「何者だと聞いている」と問われ「人間です」と答えた。結果「傭兵か?」と問われ「一般人です」と答え「嘗めてるのか」と言う展開に陥り、三十六計逃げずにしかずと言う事で逃走しているわけである。

リーラは服屋の店主に預かって貰い、俺単独での逃走。
と、

「降り注げ? 業火?」
メファイア

背後からその奇妙な言葉が響き渡った。

刹那、俺の頭上に現れる炎の球。それは雨の如く、俺のみに降り注ぐ。

「つて、操作可能な炎球ね、えんきゅう理解。それじゃあ……」
俺は急ブレーキを掛け、振り返り炎を見上げてから紡ぐ。

「奈落より這い山河を越え、大路にて判を下す。ヤマの文帖によると、この炎は全て防がれ、貴様に闇として還るらしい」

慣れ親しんだつてか、覚えてしまった彼の台詞を改造して紡げば、同時に足元から漆黒を濃い紫が縁取った流れを具現化し、迸らせれば炎全てを防ぎ、撃墜。そのまま右手を赤髪に向け――。

「な……、お前、その力は何だ?」

「……? 救済へと導く闇? だ。吹き飛ばす」

掌に闇を球状に凝縮し、弾丸として放つ!

それは赤髪に直撃すると、赤髪を吹き飛ばし、木箱の山に突っ込

ませた。

ガラガラガラと崩れる音と、もうもうと立ち込める砂埃。
さて——果たして。

俺は右手を振るい、闇を振り払えば、闇を消滅させ木箱の崩れた
残骸の山を見据え続ける。

耳に痛いほどの静寂が支配し、直後、俺に炎の塊が、轟ッ！！
と言う轟音を上げ、空気を焼き、唸りながら三発舞い込む。

俺は右手に闇を具現化し、剣の形状に変えれば握り締め、炎を斬
り払う。

無音で斬られ、消滅する炎。その向こうに額と頬から紅色の液体
を流す男の姿。

男は笑みを零してから「闇、か……。やるな」と頷き「名前は」
と尋ねて来る。

「七海棕」

「珍しい名前だな、俺はバイツ。バイツ＝アルトハイゼンだ」
バイツ、ねと頷いてから気付いた。

（アルトハイゼンってドイツの武器の名前じゃねえか……。確か意
味は鉄の夜……。雑学勉強して置いて悪い事は無いな……）

俺は一人苦笑を浮かべて「続けるのか？」と尋ねた。

「嗚呼、こんな楽しい勝負、終わらせるとでも？」

「じゃあ——行くぞ……？」

「嗚呼——来いよ……」

ふわつと迸る昏闇こんあんと、

轟つと巻き起こる業火。

相容れない奇妙な力と自然な力が激しく火花を散らした。

「い……けッ……！！」

まずは俺がスタートを切る。

俺は自分に叫ぶとともに思い切り地面を蹴り飛ばし、バイツの元
へと一直線に全力ダッシュを開始した。

初めての対人戦だが、俺自身のギアも戦闘モードへとシフトし、

エンジンも全開らしい。視界のマージン部分が放射線状に引き伸ばされ、バイツの姿だけが鮮明になって行く。

「はええなあっ、なら、これ、だあッッ!!」

俺の意識が猛烈なスピードで駆動して行く最中、バイツの咆哮が耳に届いた。

バイツは右腕を俺に向け、炎の弾丸を連続して放って来る。

それは先程のとは比べ物にならない量と、熱量。

俺はそれを見据え、右腕に昏闇を具現化し纏わせ、刀状にすれば、迫る炎に向け振り下ろし、次々と斬り飛ばして行く。

そのまま更に加速し、体を捻り、重力と速度を乗せた一撃を放つ!!

と、

ツキツイインッッ!!

本来ならこの音が響くであろう、炎の刃と闇の刃が接触する。

ギリギリと刃同士が擦れ、顔が至近距離まで移動した。

「せ、……あっ!!」

「っ、らあッ!!!!」

二人揃って刃を振り払い、同時に俺は上から、バイツは下から刃を滑り込ませて来る。

再び接触し、火花が散り、無音が違和感を与える。

俺とバイツは一瞬だけ視線を交錯させ、直ぐに距離を取れば、頷いた。

分かっている。

これが最期だ。

これ以上やっても時間の無駄、体力の無駄。

ならば、一撃勝負。

——さて。

「う……、ら、アツッ！！！」

「ぜ、……エエアッ！！！」

二人揃って地面を蹴り飛ばし、全力でダッシュを再開する。
目まぐるしい速度で俺達は迫り、俺は一つの思案を試す。

それは勝つ為では無い。

本来、逃げる為に使うつもりだった業。

「も、らったああああっ！！！」

バイツの炎の刃が迫る！！

轟々ッ！！ と空気を焼き、唸り、振動しながら迫るそれを見据え、俺は紡ぐ。

「……トランザム」

刹那、視界がブレた。

それこそ、世界ごとブレた様な錯覚に陥る程の速度。

纏うのは、紅色の光。

本来人間で成す事は不可能な体技。

闇を全て消滅させれば、右手に日本刀を具現化し、超刹那的移动を開始する。

刃を掻い潜り、体を捻り、日本刀の刃をバイツの裏の首元に当てた。

「な、にが……、今……」

「もう一つの力？創造し想像する者？の業さ」

荒い呼吸を繰り返しながら、両手を挙げ、呆然としたまま尋ねて来るバイツに告げた。

まさか俺も出来るとは思ってなかったからね、ぶつつけ本番。

「ク、クク、ふ、ははははははっ！！　そうかそうか、二つも能力を持つか！！　不思議な奴だな、貴様は！！　そうかそうか、では、貴様、いや、リヨウ！！」

「何だよ？」

無駄に暑苦しい奴だなと思いつながら首を傾げた。

「お前は俺の好敵手だ。と、言うわけで俺を同行させる！！」

「どう言うわけだよ！？」

んな無茶苦茶な……、何処まで俺様な奴ですか。

「これは宿命だ！！　俺とお前は最初から巡りあう運命！！　それこそ、戦い合う運命にあったのだ！！　分からないか、この熱い思いが！！」

「分かるか！！　無茶苦茶過ぎるだろうが！！」

てか貴様はグラ・ム・エーカーか？！

熱いにも程があるぞ、程が！！

「と、言う訳で同行させて貰おう、我が好敵手！！」

「……好きにしてくれ、もう」

額に手を当てたまま天を仰いだ。

嗚呼、神様。

無駄に暑苦しい奴が仲間になりました。

どうしましょう、これ。

その後、一勝負終えた俺とバイツはリーラの元に戻り状況説明をした。

リーラは「バイツさんですね！　宜しくお願いします」と頭を下げ、バイツはバイツで「うむ、良かろう小娘！！　俺からも宜しく頼む！！」と意気投合しているのを見て、俺もあそこまで熱くなつたほうが良いのかなあ、と言う錯覚に駆られてしまうのは、俺だけでは無い筈だ。

嗚呼、まあ、あれだ。

冷房の効いた場所で落ち着こう、そうしようよ、ホントに。

第一章最終第九話 旅立ち（前書き）

これにて第一章終了ですね。

さあさあ、どうなるのでしょうか？

案外長かったのか、短かったのか、それではどうぞ！

第一章最終第九話 旅立ち

「ほう、世界改変と……」

「嗚呼、俺は言って置くがこの世界の人間じゃあない。先に言っ
置く」

「へ?! じゃあ、リョウさんは……?」

「異世界の異端者だ。この世界を改変して欲しいと頼まれたんでね」
現在俺達は、店の名前は『空遊亭』と呼ばれる、一見さんお断り
みたいな雰囲気醸し出されていた店で昼食を取っていた。

「異端者、と……」

「嗚呼、だから髪も黒いし、眼も黒い」

俺は肩を竦めてそう告げた。

二人は目を丸くし、啞然としたまま俺の言葉を聞き続けた。

「勿論、怖いなら怖がってくれて構わないし、嫌がってくれても構
わない。異端者だしな、それなら俺は一人で歩むだけさ」

数秒間の静寂がその場を支配する。

と、

「怖がったり、嫌がったり、嫌がったりするわけじゃないですか
……。異端者だとしても、助けてくれた事には変わり在りませんか
ら」

「嗚呼、俺としても貴様と戦えた事に変わりはないし、負けた事に
も変わりはない。貴様が異端者だったとしても、嫌う理由も、怖が
る理由も何一つもない」

二人の言葉が耳を貫いた。

俺は暫しの間呆然としてから、胸に熱い物を感じて、額に手を当
てれば天を仰いだ。

嗚呼、こいつ等最高だ、そう思ったのだ。

嗚呼、こんな俺でも嫌わず、怖がらず受け入れてくれるなんて、最高だよ。

瞳に熱い物が競り上がってくる前に、俺は目元を拭い、

「有難う、これで改めて気が楽になった」

と、告げて置いた。

「構わん」

「はい、喜んで貰えて良かったです」

二人の明朗快活な返事を聞いてから、俺は顔を引き締め、尋ねた。

「じゃあこれからどうする？ この世界初心者俺としては二人の意見を聞きたい」

二人は顔を見合わせ、ふむと悩んでから、

「此処からならクトセリア帝国が一番近いと思います」

と、まずリーラが頷き、

「しかしアクトセリア帝国に行ったとしても、婚礼の儀が終わった後だから騒がしいぞ」

バイツが続けた。

「婚礼の儀？」

俺は首を傾げた。

「嗚呼、アクトセリア帝国第一姫君とエルテニア王国第一皇子が結婚したのさ。それが影響で婚礼の儀が始まり、未だに活気付いてるってわけだ。それに見張りや門番も厳しい。色々面倒な事この上ないと思うが……」

成程……、つまりは結婚式か。

結婚式、結婚披露宴、で、披露宴後もめでたいめでたいと宴が続いてると。

いやあ、流石帝国だよな、そう考えるとさ。

やる事が派手って言うか、盛大って言うか……。

まあ、あれだよ。

派手だろうと盛大だろうと、盛大だろうと、門番や見張りが厳し

くても――。

「行つて見る価値はありそうじゃないか……」
「違うかい？」

「まあ、行かないよりはマシだろうが……」

ふむ、と悩んでいると、彼女が首を突っ込んで来る。

「で、でも、馬車とかはどうしますか？」

「そうか、移動手段か……、忘れてたな。」

「借りられるよね？」

「まあ、はい。馬車は借りられますが……」

「が？」

「お金は……？」

あ、と思っていると、バイツが突然大笑いし出し「そうかそうか、金が無いのか」と言い出したのだ。

「どうした、頭でも打ったか？」

「違う！！ 馬車程度なら、この俺が買ってやろうと思ってな」

な、んだ、と……？！

「ま、マジか……？」

「まぢ……？ 嗚呼、本当だ」

マジッ本当でこの世界も通じるな、これ。

「やった！！ サンキューバイツ！！ じゃあ馬車はこれで確保と」

「ですねっ、有難う御座います、バイツさん」

「はっはっは、構わん構わん。まだ余裕がある故、世界改変等と言う大きな目標の為ならば、金一銭全て使い切つてやろうぞ」

あ、熱い……！！ やっぱリコイツ熱い、やっぱリグラ・ムだ！！

「行く場所はアクトセリア帝国。通行手段は馬車、これで良いな？」

「はい」

「嗚呼、了解だ」

「じゃあ午後3時に門前に集合な」俺はそう告げれば「リーラは武器を購入、俺と一緒にな。バイツは馬車確保を頼んだ」と頷いて「解散！」と叫ぶ。

結論から言えば、周囲の目線が地味に痛かったのは、俺の心に留めて置こうと思う。

「リーラはどんな武器を使うんだ？」

IN 武器屋。

俺とリーラはあの後、昼食代を払い、バイトと別れ、リーラ案内により銀行に立ち寄ってから資金を下ろし、武器屋に向かった。

そして今に至る。

「ん……、出来れば銃、ですかね」

「銃かぁ……」

銃の知識は無いぞ……、ふむ、どんなのが良いのだろうか？

悩みながらリーラと歩んでいると、リーラが一つのショーケースの前で立ち止まる。

「ん？」

「これ……」

「どれ……？」

指差された品に視線を移した。

それは、狙撃銃。無論、唯の狙撃銃では無い。

デカイ。全体的にデカイ。それこそ1.5メートル級の銃。重量もそれ相当、説明文によれば、直径10×99ミリの弾丸を使用するらしい。名前は『アスタⅡアルターマスティア998』と呼ばれ、アスタと言うのは俺で言う苗字らしい。アスタの意味はこの世界の言葉で『頭蓋を貫く乙女』と言う言葉から取られているらしい。何て物騒な……。

「欲しいの？」

「あ、いえ、その……」

む、ハッキリしなさいな、じゃないと――。

「店員さん」

「あ、はい」

俺の声に返答したのは若い女性。

女性の店員は「何で御座いましょう」と言って首を傾げて来る。

「アスタ」アルターマスティア998を」

「購入しますか？」

「はい、弾丸も付属で」

「有難う御座います！」

即決購入しちゃうぞ？

「ふえ、あ、あの、その……、良い、ん、ですか？」

と、隣で恐る恐る俺の顔色を窺うリーラに俺は微笑んで「良いよ良いよ」と頷いた。

「他には？」

奥で女性が銃を積み、弾丸を付属している間に尋ねる。

「良いのなら……、あの、その、これを……」

「これは？」

「『オスケア』キルアーゼ220』です。ハンドガンなんですけど

……、実用性も高いので、はい……」

合計30000メイツ、わお、換算すると三万かあ、痛いなあ、でもまあ……。

「良いよ、買って上げる」

「ホ、ホントですか！？」

目を爛々と輝かせる彼女に俺は頷いて「ほら、店員さんの所に行つておいで？」と告げる。

「あ、はい！」

で、てーいんさんと銃を持ったまま駆け寄る姿は幼児の様だった。改めて妹を持った気分になるよ、これ。

「ほう……、完全武装だな」

「ちよつと、重いですけどね」

苦笑を零す彼女の背中にはアスタ、そして腰のホルスターにはオスケアが納められている。

まるで戦乙女だ。まあ悪い気はしない、むしろ似合っている。

嗚呼、確かに言われてみると狙撃手っぽいな……、うん。

「リョウさんは？」

「嗚呼、俺はこれ」

見せた物は『ツラミネ』と呼ばれる短刀と『投擲用ナイフ』、そして一本の片刃直剣。無論、これで全部あわせても彼女の装備の値段には到底届かない。

既に関取を終え、装備し終えた俺は、背中に剣の入った鞘を背負い、ナイフをベルトに、短刀を腰のホルスターに納めて、頷いた。

「じゃあ行こう。そろそろ3時だ」

俺の頷きに、彼女は太陽の様な、輝く微笑みを見せて、

「はいっ」

と、答えた。元氣一杯のお返事有難うっ！

「遅いぞ！」

「いやいや、お前が早い」

「俺は一時間の前から待っていたというのに……、ふむ、それにしても武装したな」

「だろう？」

指差されれば、俺は頷いて「鞘、特注品だけどさ、案外安かったよ」と続けた。

「そうかそうか、しかし安価な物は入念に手入れはしておけよ？」

「嗚呼、分かってる」

頷いて微笑んでから「で、馬車の方は？」と尋ねた。

ニツと笑い、

「勿論！！ 最高級の物を用意した！！」

白馬と黒馬二匹の繋がれた、屋根付き馬車を指差す。

「おお、奮発したなあ……」

「そうだろうさうだろう、褒める褒める！！」

ハッハッハッハ、と笑うバイツに俺は「それじゃあ行こうか」と
頷き、リーラは「そうしましょう」と微笑んだ。

馬車に向かって歩み始めれば、

「お、お前等！！ 俺を忘れるな！！ っておい！！」

と、言う騒がしい声が聞こえて来たので、

「なら早く来い、もう出発するぞ」

「そうですよー、雨が降る前に行きましょう」

と、返答した。

確かに雨が降る前にはね……。路面、濡れると滑るし。

て、あ、……。

「……」

「……」

「ん…… っ、え、えいつ！ にやっ……、むう……」

其処で俺とバイツの視線に止まったのは、低身長故に、馬車に乗り込めないリーラの姿だった。

ヤバイ、ちょっと萌えました……。いや、滅茶苦茶萌えます、はい。

頑張ってるんだけど、銃の重さで登れないのかね？

そろそろ手助けしてやろうと、俺は彼女に歩み寄れば、そっと脇に手を入れ、抱き上げれば、そのまま馬車に乗せた。

「にやっ……、うみゅ、有難う、御座います」

「いや、よつと……、構わないさ」

苦笑して、俺も彼女の隣に乗り込めば、更に乗り込むバイツに尋ねた。

「此処からアクトセリアまで何日位だ？」

尋ねられたバイトは俺とリーラを押し分け、馬の手綱を握ってから「約3日だ」と続けた。

「しかしだ、休憩も考えれば約4日だろう」

「4日か、了解」

押し退けられた俺達は、後方座席で寛ぎ^{くつき}「じゃあバイト、出発」と告げた。

「寛ぎ過ぎるなよ、いざと言う時に動けんからなっ!! ではバイト号、出陣!!」

「何その安易なネーミングセンス?!」

ツツコミと同時にパシんツと言う何かを叩く音が響き渡り、馬が歩み始める。

ゴロゴロと転がるタイヤ。

砂利道なだけあって、進むのはゆっくりのようだが、これで旅は楽になる。

馬車に取り付けられた窓から覗く、黄昏時を指し示す卵を掻き混ぜた様に歪んだ赤い太陽。

馬車の中には最低限の食料品と、水分。歯ブラシや石鹸、食器の類もまた揃えられていた。これ全部バイトがやってくれたのかね…

…?

俺は寝転んだまま、窓から空を眺め、我知らず内に呟いた。

「嗚呼——無常」

第二章登場人物紹介（前書き）

わっは、登場人物滅茶苦茶多くなった……。
さて、それではどうぞ

第二章登場人物紹介

名前：七海棕 | R y o N a n a m i |

年齢：17歳

職業：高校生

部活：無し

装備：『ツラミネ』

『投擲用ナイフ』

『片刃直剣』

『全身一式の黒装備』

能力：『救済へと導く闇』『創造し想像する者』

体質：『死隔』死から隔絶された者

台詞：『最低最悪な世界を最高で最良な世界に変えてやるさ、それが俺だ』

本作品の主人公にして、不死身の体質を持つ不運過ぎる青年。

小学時代から剣道、柔道、空手を習い続け、有段者。それにしても華奢で細身な肉体。

黒髪黒眼に黒縁眼鏡を掛けており、ラフな格好を好む。

ヤル時はヤルのだが、普段はダルそうにしており、ツッコミ役。

卑怯でも姑息でも作戦は作戦と言い切り、必ず皆生きて帰る事を目標とする。

頭も良く、運動神経も悪くは無いのだが、特筆すべき点が無い為に、『普通』と言われている。温厚で人当たりが良く、優しい性格の持ち主で、怒ると何が起こるか解らないと言う。

名前：無し

年齢：不詳

職業：神界第零番統括創造神

趣味：情眠

装備：不明

能力：『授け分け与える者』

体質：『絶対加護』絶対^①に護られる

台詞：『脇役より主役ってね』

棕を異世界に召喚した自称神様。名前はまだ無い。

数億の能力を所持しており、それを分け与える能力を所持する。

金色の長い髪を、碧眼持ち。運動神経抜群克頭も良いが、ドジ。

案外主人公に優しく、厳しい時は厳しい母親のような存在。

喧嘩にもよくなるが、アドヴァイスもよくしてやり、優しい場合は慰めてもくれる。

名前：リーラ^②ゲシユタルト

年齢：15歳

職業：奴隷

趣味：自然観照

装備：『アルターマスティア998』

『オスケア^③キルアーゼ220』

魔法：『^{ヴァリアント}疾風』

体質：特に無し

種族：人間

台詞：『私に出来る事をするだけです。だから、私は前へと進みます』

己の住んでいた故郷が内戦により壊滅し、奴隷として売られた少女。淡い紫混じりの銀色の髪と、紫色の瞳を持つ美少女で、スタイルも年齢の割りには豊満。

名前のリーラは『薄紫色』である為、髪の色から取られたのかもしれないと言う。

優しく、微笑む姿や照れる表情に棕は何度かノックアウトされてい

る。

撫でられる事を好み、褒められる事をする。泣いてしまう場合も多く、感情豊かと言われている。棕に懐いている。

名前：バイツィアルトハイゼン

年齢：17歳

職業：賞金稼ぎ

趣味：絡む事

装備：『エルシアクエスター』

魔法：『火炎』
ローディアメステイ

体質：特に無し

種族：人間

台詞：『熱い熱いね……そうだな、熱くなきゃなあっ!!』

一言で言えば暑苦しい直情型熱血馬鹿。

赤い髪と赤い瞳の持ち主で、赤い髪を上につんつんに逆立てている。左耳には魔力増幅ピアスを付けており、黒と赤二色構成の服を纏う。明朗快活で、馬鹿だが、皆の支えとなる人物。賞金稼ぎとして今まで過ごしていた。

近接戦に関しては、もはや騎士団に入団出来そうな腕の持ち主で、魔法は中級程度。

攻撃的で、好戦的。負けたら相手を好敵手とする。

名前：オルヴィア・ヒュッケバイン

年齢：38歳

職業：盗賊

趣味：奴隷売買

装備：『コーバ・アデート』

魔法：『自身強化』
ビルディアアウト

体質：特になし

種族：爬虫人^{リザース}族

『ビルタクト盗賊』と呼ばれる盗賊団の頭首。

上半身が爬虫類で、くすんだ緑色の体をしている。筋骨隆々とした肉体が特徴的で、大斧を軽々と振り回す。肉体強化で自分を強化する事と得意とし、奴隷売買を趣味としている。

今まで幾多の村や町を襲い、潰し、盗みを働いている為、騎士団からは命すら狙われている。

言葉遣いが悪く、蜥蜴臭いと言われるとキレる。暴君横暴主義で、邪魔するものは必ず潰す趣向の持ち主。

名前：ゴルゴナ＝アルケイド

年齢：30歳

職業：盗賊

趣味：女漁り

装備：『キユクレート』

魔法：『^{グラビティ}重力』

体質：特になし

種族：獣人族

同じく盗賊団の豚人間。

淡い桃色の肉体に、体に合わない鎧を纏った奇妙な人間。

筋骨隆々なアルヴィアとは裏腹に、女を見付ければ誘拐拉致当たり前で、逃げれば殺すらしい。

極度の馬鹿で、引っ掛かり易く、騙され易いが、キレると当たり構わず魔法や武器を振り回す癖がある。盗賊では一番の力持ちとして人気だが、豚臭いらしい。

名前：エルナ＝エルアインス

年齢：23歳

職業：騎士

趣味：読書

装備：『セーヴィアアード』

魔法：『ブリッツェル稲妻』

体質：特になし

種族：アニマート獣人族

台詞：『ほらほら、其処。怠けてるとご褒美上げないぞ?』

帝国騎士団に所属する部隊長。

金色の長い髪と金色の瞳。鍛え抜かれているが、そのしなやかな肉体美と妖艶さは普通に男性を虜にすると云う。狙った獲物は逃がさないタイプで、その為なら何でもするらしい。

猫族で、猫耳と猫の尻尾が生えている。女王様性格の持ち主で俺様だが、案外弱い部分もあり、実はDM? 一々言葉遣いが卑猥克奇妙で、甘く、優しいが、厳しいときは厳しく、シリアスな面はシリアスにこなす器用人。

名前：ライン＝ヴァイスリッター

年齢：25歳

職業：騎士

通称：『黒騎士』

趣味：鍛錬

装備：『クイアーラーゼ』

魔法：グランドエアーデ『大地』

体質：特になし

種族：人間

台詞：『俺の道を阻むと言うのなら、忠臣でさえ斬り棄てよう』

帝国騎士団でも実力派エリート。

硬派で、頑固、一度決めたことは曲げる事が出来ない男気の有る人間である。

怪力の持ち主で、両刃の幅広の大剣を片手で振り回す事も出来る。大地系統と呼ばれる大地操作や地震を起こすことを可能とする魔法

の中でも上級魔法を扱う。リーダー的存在で、温厚克人当たりの良い人物だが、怒ると恐怖を覚えると言う。

名前：イザニア「クロスピースヒュール」アクトセリア

年齢：68歳

職業：帝王

趣味：散歩

装備：『無し』

魔法：『炎撃灰燼』
ローゼニアフランメシア

種族：妖精^{エルフ}最上位種

台詞：『世界は歪んでしまっており……、いつか、世界に平穏が訪れますようにと願っております』

クトセリア帝国帝王であり、世界の平和と平穏を願う男。

妖精族の中でも最上位に当たる種族で、炎魔法の最上級魔法を扱う。温厚で、優しく、いつも微笑んでいる様に見えるが、怒る時は怒り、寝る時は寝る。

息子も居るが、戦場に出ているらしく、顔を合わせたいと願っている。

次の戦争にはともし火として炎魔法を放つと言うが、魔力に限界が来ているため、多様は出来ないらしい。帝政の政治を帝国に組み込んだ人間でもある。

名前：ディーヴァ「ランティス」

年齢：20歳

職業：無し

趣味：料理

装備：『ネイツオーバー』
ヴィネア

魔法：『風遊』

体質：特に無し

種族：人間

台詞：『俺達に出来る事は、人々を解放する。それだけだ』

解放軍に所属する人間で、若い連中を集める事が出来る程の統率力の持ち主。

オレンジ色の髪を淡い藍色の瞳をしており、情報屋でもある。

奴隷や市民を解放する為に日夜、情報収集し、戦っていると言う。

温厚で、微笑む顔が女にモテると言われ、無自覚女タラシと言うのは掠と良い勝負。

剣術の腕は帝国騎士並で、風魔法を組み合わせる剣術を扱う。

名前：オールド・カシリール

年齢：30歳

職業：侯爵

趣味：作戦立て

装備：『ネーシェ』

魔法：『拘束^{ロック}』

体質：特に無し

種族：人間

台詞：『戦乱は起きる物では無い。起こす物、今から私が見せてやる』

貴族派頭首の侯爵。

戦乱を引き起こした張本人で、戦争は起きる物では無く起こす物と考えている自分勝手克最低な人種。最新機動兵器『インフィニテッドシステム（Infinited System The Second）』と呼ばれる破壊兵器による戦乱勃発を企む。実際破壊兵器の実力と、行動、殺傷力の実地演習として戦乱勃発させたのだが、自分は悪くないと告げた。

第十話 暇を持て余した旅人達のじゃれ合い（前書き）

男同士に談義の後は？

ではどうぞ！

第十話 暇を持て余した旅人達のじゃれ合い

風が冷たい。

宵闇。ベッドに腰を下ろした俺はそのまま寝転び天井を見上げた。最初の都市を出た俺達は、そのまま南下。二日掛けて、アウレゴス山脈と呼ばれる、帝国の前の砦までやって来ていた。

無論、この山を越えなければ帝国には到着しないわけで、しかしながら時間も時間。越えるのは明日にしようと思った俺達は、山を越える者達が集まる質素だが、賑わう宿屋に腰を落ち着けていた。

「腰痛え……」

「馬車に初めて乗る者は必ずそう言うが、致し方無い。これが安物の馬車ならその腰、圧し折れているかもしれぬな」

ニヤリと、ソファアに腰掛けて腰を擦る俺の右隣でバイツが笑う。

「高級で助かった……」

「だろうだろう。しかし二日掛けて此处か……、ペースとしては順調だが、妙だな」

「妙？」

顎に手を当て「嗚呼」と頷くバイツに「何が妙なんだ？」と尋ねる。

「この時期、魔物は冬眠時期に入る為に餌を求める。求めるのだが、如何にもこうにも、何故俺達はこんなにもすんなり此处まで来れた？」

確かに。

確かに、俺達が此处まで来る間に、魔物は数匹程度。それも皆雑魚ばかり。

「気候状況の、変化でしょうか？」

髪を洗ったのか、濡れた髪を乾かしながら、リーラが俺の左隣に腰掛けて、首を傾げて来る。

「それも一理有る——が、気候状況にしても少な過ぎる……」

「裏で糸を引いている奴が居るってか？ 魔物使いでも居るのかよ」
唸るバイツに、俺は肩を竦めて溜め息を吐いた。

「魔物使い……、それにも一理有る。少しこれからは用心せねば……、少しでも気配や視線を感じた場合、アイコンタクトを取ろう。その場で仕留めるか、生け捕るかはその時次第だ」

珍しく真剣なバイツに俺は頷いて「了解」と呟いた。

「分かりました」

リーラもまた、その紫色の瞳をしっかりと開いて、静かに頷く。
暫しの沈黙。

静寂と沈黙が部屋を支配する。

しかし、その静寂も沈黙も打ち破るのが俺ですよ、はい。

KY？ 何それ、美味しいの？

「ていつ」

俺はバイツの方に顔を向ければ、指先で脇腹を突いた。

突かれる、いや、触れ、指先がめり込むと同時に肩が跳ねた。
もしかしてバイツも脇腹弱い系か、これは？

「痛っ、な、何をする?!」

「いや、何と無く」

「何と無くで突くなっ」

「悪いね」

「謝る気無いだろう、貴様」

「いやいや、謝ってるじゃないか。悪いねって」

謝罪の気持ちで一杯だヨ？

「それは謝っているとは言わない。馬鹿にしていると言っただ」

「馬鹿にするって言うのはこうだろ？」

「ふむ？」

興味を持ったのか、首を傾げるバイツ。

「死ねば良いのに。直情型熱血馬鹿」

「貴様、此処で死にたいようだな」

ユラリと立ち上がり、見た事が無い奇妙な武器を取り出すバイツに俺は待ったを掛ける。

「待て待て待て待て待て！！ 待て！！ 落ち着け落ち着け落ち

——「問答無用オアアアアツツ！！」ぎゃあああああああああ
つつ！！！！」

結論、頭を鞘でぶん殴られました。

痛いつてか……、一瞬意識飛んだよ、また神様に出逢う所だったわ。

それから一時間後、俺の左肩に重みが加わった。

「つと……？」

「どうかしたか？」

目だけ俺に向けるバイツに「リーラが寝ちゃったみたい」と囁いた。

「そうか……、では静かに喋るとしよう」

「だな……、てかバイツ」

「何だ？」

此処から俺達の時代。

「お前、好きな女性のタイプってどんなの？」

宿泊学習、修学旅行では定番中の定番の質問。

バイツは「何？」と首を傾げた後「また唐突だな」と苦笑を零し、唸った。

「初めて聞かれたのでな……。ふむ、好きなタイプ、か……。因みにリヨウはどんな女が好みなのだ？」

逆に問われたよ、ふむ、俺の場合、か……。

「俺の場合は、そうだな……。家庭的な女性、かなあ……。まあ美人で可愛いのは前提でな？ 勿論、愛してくれるのは更なる前提だ

が」

「ほう……、家庭的で愛してくれる女性には一理有る。まあ、俺の場合は魅力的と美人と言うのは前提だが、愛し尽くしてくれる女性が好みかもしれん」

「愛し尽くす、か……。俺もそれには賛成だな」

「そうだろう？」

顔を見合えば苦笑し「まあ、あれだよ」と俺は続けた。

「あれ？」

首を傾げるバイツに、俺は肩を竦めて「俺達は似た物同士ってな」と告げた。

「……」

て、あれ？ 何で啞然としちゃってるんですかね、バイツさんや。「どした？」

目の前で手を振って見る。すると即座に我に返り、バイツは口元を抑え、小さく笑い始めた。

「何だよ？ 俺の言った事が間違ってたのか？」

「いやいや、正論過ぎて笑ってしまった」バイツは未だに笑い続け「そうだな、確かに似た物同士かもしれん」と頷いた。

其処まで正論だったのか……。俺の言葉。

ふむ、ならば――。

「……、これからも、宜しくな？」

俺はそう言つて、手を差し出す。

バイツは一瞬啞然としてから、ニツと笑い俺の手を取り握ってから「此方こそ、だ」と続けた。

その後、俺達は時間も時間だし、と言う事で切り上げ、それぞれの寢床へと移動した。

無論、リーラは普段通り、俺の隣で有る。

何故だかこれが定着してしまっているのだ。

いや、もしかしたらあれだ、バイツは年下を恋愛対象として見ていないから俺達がこうやってくっついて付いて寝ていても何も言わないの

かもしれない。

そうかそうか、そうだよな、そうだよ、うん。

「じゃ、寝るかね……」

スツキリした所で、そつとリーラの髪を梳く様に撫で、そのまま布団が二人に掛かる様にすれば、そのまま瞳を閉じた。

徐々に意識は遠のいて、

思考思想思案が止まり、

全身が休憩状態に落ち、

眠りに落ちた。

俺が夢の世界に誘われたのは、バイツとの談義から数時間後の事だった。

これが夢だと言う事は分かっている。

此処は、何処だ？

何処かの、都市？

見た事無いな……、まだ行った事の無い場所か？

と、其処で声が響いた。

それは、低く、まるで腹の底から響く様な声。しかし、それでいて醒め、シニカルさも兼ね備えている。一体何者なのだろうか？

「やれやれ……折角最低の亡者生活を楽しんでいたと言うのに――。死人をおいそれを起こすなと言う。ま、何処の誰かは知らないが――

―俺を起こしたからには、誰かを殺せつて、事だよな……？」

同時に走る、悪寒と恐怖。

溢れるのは、恐怖からの冷汗か、それとも悪寒からの嫌な汗か。背筋にゾクツと何かが走ったのだ。

言葉だけで。

まるで耳元で囁かれた様な、甘くも在り、冷たくも有る言葉。甘美な響きを持ちながら、何処か達観した様な、気障な台詞。青年の容姿は、誰かに似ていた。服装も、現代の、それこそ高校の学生服。手には妙な物を持っている。

――？ 短、刀？

其処で夢は途切れ、青年も、都市も消滅した。

第十話 暇を持て余した旅人達のじゃれ合い（後書き）

一体最期のは誰だったのでしょうか？
それでは、次回からは帝国潜入篇！！
では

第十一話 団体客をお持て成し（前書き）

さてさて、第十一話ですね。

団体客様とは？

それではどうぞ！

第十一話 団体客をお持て成し

「……」

朝7時45分33秒。

「……」

上半身を起こし、周囲を見回し、頭を二三度掻いてから、溜め息を吐く。

夢だったのは本当だったらしい。夢の中で夢だと分かっていると言うのも面白い物だ。

「ん……」

ベッドから降りれば、そのまま両手を組み、体を伸ばして行く。背骨が、脊髄が、全身の筋肉と骨が伸びて行く。

「……よし」

瞳を閉じて、深呼吸してから俺はまず、着替え始める。

お馴染みの黒いシャツと黒いズボン。黒いコートは纏わずに、片刃直剣の納まっている鞘を手にして部屋を出る。

「お早う御座います、お早いんですね」

部屋を出ると、此処の従業員の女性に微笑み掛けられた。

「いえいえ、貴女方こそ。朝から忙しそうで、お疲れ様です」

にこつと微笑み返せば、従業員は何故か頬を僅かに、それこそ淡い桃色に染めて「あ、有難う御座います」と俯いてしまう。

可笑しいな……、俺、何かしたか？

「あ、あの、俺何か、しましたか？」

理由を聞いてみる。

「い、いえいえ。何も、それではっ」

「あ、ちょ——って、……足早っ」

理由も聞けず、逃げられてしまった。くう、無念。

へ？ 気がつかないのかって？ 何が？ え、ちょ、待ってよ読者諸君。

何だよその痛い子を見るような視線は。俺何かしたか？　俺は笑っただけだぞ？

んむう……、やっぱり分からんな、女って……。

女は謎だ、これ、結論。

外に出た俺は、特注の黒い革の鞘から愛刀を抜き放つ。

刀、と言うより剣なのだが、片刃と言う事もあり、刀に近い造形をしているが故に俺は愛刀と呼んでいる。

「ふう……」

俺は愛刀を正眼に構えれば、静かに息を吐き、そのまま足元に闇を一度凝縮する。

「い……けッ！！」

自分に叱咤激励すると同時に、足元の闇を爆発させれば、一気に舞い上がり、そのまま空中で刃を二三度振るい、舞い降りる。

「ふむ……、滞空時間は7秒か……。空中戦向きじゃあないな……。せめて10秒は欲しいぜ」

滞空時間は長ければ長い程良い。

俺あ己の唇に指先を当てて、ふむ、と悩んでから、良しと頷き、愛刀を鞘に納め、再び足元に闇を凝縮する。

「……せえー……のおッッ！！」

ズドンッ！　と言う爆発音と共に闇が弾け、俺を空中へと吹き飛ばす。

舞い上がった俺の肉体は、自然法則である重力に従い、既に落下を始める。

「も、一丁……ッ！！」

今度の左右の足を別々に配置し、それぞれの足裏で闇を凝縮し――爆ぜさせる！

「ちょ、ツう!!」

爆ぜると俺の体は空中で一回転し、そのまま顔面強打紙一重で地面に舞い降り、踏み留まる。

「怖え……、てか危ねえ……」

ヤダよ、顔面強打何て。痛い痛い。

「今日は此処まで、かな……。そろそろあいつ等も起きて来るだろうし」

苦笑を零してから愛刀の納まっている鞘を担ぎ、宿屋に戻る。

俺は戻りながら、空を仰ぎ、ふっと微笑んだ。

「嗚呼、今日も良い天気になりそうだ」

「ほう、空中での体勢変更と……。出来はどうだったんだ？」

食パンに似たパンのトーストを齧^{かじ}りながら、バイツが俺に尋ねて来る。

「まあまあ、……かな。ちょっとヤバかった部分もあったけど」

頬を掻^かきながら、コーヒーを啜^{すす}る俺。

するとリーラが心配そうに俺を見詰めて、

「怪我だけはしないで下さいね？」

と、上目遣いに訴えて来る。

俺は微笑んで、その頭に手を乗せれば、くしゃっと撫で「分かったよ」と頷いた。

案外、此処の食事は普通の俺の毎朝の、勿論休日の食事と変わらなかった。

トースト、コーヒー、サラダ、焼き魚、卵。

いや、何処の和食定食ですかと尋ねたい程である。コーヒーとトーストを除いてだが。

朝食を堪能した俺達は、完食し切り「ご馳走様でした」と皆揃っ

て告げた。

此処は小学校かって突っ込みたいです、はい。

その後、俺達は荷物を取りに戻り、装備を整えれば、チェックアウト。

さて、これで宿屋生活も終わり。

難関の山を越えるよ、山を。

「さあ、行こうか」

「嗚呼、そうだな」

「ですね、気を配って行きましょう」

俺の声に答えてくれる二人に嬉しさを感じて、俺は微笑めば心の中で「有難う」と呟いた。

「じゃあバイツ、馬車頼む」

「任せておけ。振り落とされるなよ？」

「応っ」

「はいっ」

「そらっ、久々の運動だっ。駆け抜けろっ、バイツ号ー!!」

「だからその安易過ぎる安直過ぎる名前変更しね!？」

まあ、俺のツッコミも虚しく、バイツ号はそのまま山へと直行したのだった。

急な坂、緩やかな坂。

砂利、泥。

突風、逆風。

悪天候ではなかったのだが、やはり頂上へと近づくに連れて、風が強く、道が荒れる！

俺は既に振り下ろされそうに成っているリーラの肩をしっかりと抱いて、支えてやれば「バイツッ、後どれ位だ?!」と叫んだ。

「後、20分程度だろうっ!!」そう叫び答え「つとわ、危っねえ……、さて……、お客さんの御出座おでましみたいだぞ?」同時に馬車は急停車し、バイツがそう、嘆く様に呟いた。
「のわっ——って、お客さん?」

「きゃっ!! ってて、お客様、ですか?」

突如の急停車により、慣性の法則で前に体が傾けば、俺達はそのまま重力落下に従い尻を打ち付けてしまう。正直言って痛いですが、はい。

と——。

「グウルル……」

「キツイイキキ!!」

あれ、お客様にしては野生的?

わお、熊に蝙蝠コウモリ、デカイ蛇に、一角犬カブツ一行ですか。

……熊、ま・た・お・ま・え・かつっ!!!

てか前のより小さいし、でも角あるから違う種類なのかね?

「さて……、それじゃあ準備は良いな、お前等」

俺は溜め息を吐いて、短刀をベルトから抜き出せば、刃を引き出し、前に突き出す。

「嗚呼、まあ団体様だからな。俺と貴様で特攻。小娘がバックアップと言った所だろう」

俺の動作と見てから、バイツもバイツであの、俺の頭を殴った見慣れない鞄に納まっている、大剣を地面擦れ擦れの姿勢で構えた。

「私がバックアップ……、はい、任されました。その代わり、怪我だけはしないで下さい！」

ガシャンツッ！　と言う金属同士が連結する音。

シャンツッ！　と言う何かが引かれ、ロックされる音。

カチンツッ！　何かが納まった音。

彼女は既に『オルターⅡマスティア998』を組み立て、最後尾を肩に、中間を肘の間に、指先を引き金に沿え、左手を銃口より少し手前に当てて臨戦態勢に入っていた。

「ひゅう……、格好良いじゃんか」

「全くだ……、俺達も負けては居られないな」

ニツと笑うバイツ。

俺もまた苦笑すれば、そうだな、と頷き、短刀を構えたまま、重心を下げて行く。

特攻体勢。

「それじゃあ……、開始！！」

直後に、火花が散った。

火花だけでは無い。

轟音、激音、撃音。

澄み渡る金属音に、引き千切れる断絶の音。

俺達の第一ラウンドが、火花、そして様々な音と共に、開始されたのだった。

第十二話 アクトセリア帝国（前書き）

とうとう到着！！
それではどうぞ！

第十二話 アクトセリア帝国

澄んだ金属音。

舞い散る火花。

激音と激音に隙間を掻い潜り、俺は短刀をひるがえ翻す。

刃は熊の隣を舞う巨大な蠅ハエの尾から頭へと食い込み、真二つに斬り分ける。蟲の体液独特の悪臭が漂うが、気にしていたら負けだ。

と、同時に俺の頬を掠める一撃が背後から放たれ、もう一匹の蠅の額を貫く。

貫いたのは？アテンサー・イレヴィヴバレッツ？と呼ばれる、彼女の使用する狙撃銃専用の弾丸。

俺は背後で弾丸を啜えている彼女に心の底から感謝してから、地を蹴り飛ばした。

「ら……アアッ！！」

速度を乗せたまま、短刀を右肩から振り下ろす形で薙ぐ。

しかし、この熊は馬鹿では無いらしく、一撃をその鋭い爪で弾き、逆に此方に向けて左爪を突き出して来たのだ。

「の、わッッ！！」

それを体を左にずらす事で避ければ、短刀を爪と爪の間から引き抜き、再び、今度は足裏に闇を発生させ僅かに凝縮すれば飛び上がり、体を捻りながら短刀を重力と捻りを乗せた一撃として放つ。

「グオアアオアアオアッ！！」

まずは一本——俺はそう頷いて、肩に食い込む短刀を力任せに引き抜き、そのまま短刀を持つ手を居合いの形に構えれば、一閃。

短刀の刃はそのまま熊の右腕を斬り裂き、鮮血を撒き散らす。

「これで二本……」

一時的にバックステップで距離を取り、思い切り深呼吸する。

吐き出された酸素には、恐怖や疲労が籠っている。

「……い、けッー!!」

首を横に振って、思考を切り替えれば短刀を正眼に据え、重心を下げる。

全体重が上半身に集中し、そのまま体重と重力に任せ、気合と共に俺は地面を蹴り飛ばす。

砂埃が舞い上がり、短刀の刃が時折光に煌き、光の尾を引く。

「まずは……ッー!!」

吼える熊を俺は見据え、更に速度を上げる。

一瞬の交錯。

右から舞い込む熊の爪で無く、拳。

「ッ……あぐ、ッー!!」

拳は俺の鳩尾^{みぞおち}より、少し下に叩き込まれる。

頭の中が一瞬だけ白く、それこそ気が飛び掛ける一撃。

必死に意識を繋ぎ止め、俺はそのままその拳の繋がる腕に短刀を振り下ろした。

「ギヤアッアアアアアアアッッー!!」

断末魔では無い、それこそ断たれた腕の激痛からの絶叫。

俺は口の中に広がる鉄の味に顔を顰^{しか}めながら、意識を次の事に回す。

「せ、アアッー!!」

ゴオウッー!! と言うを斬る轟音と、唸る音が同時に響き渡り、短刀が熊の断たれた腕の脇の下に滑り込み、斬る。

刃は血液に塗れ、紅色の尾を引きながら、熊の右腕は今、完全に断たれた。

荒い呼吸をする熊を俺は見据え、次の行動へと意識を移す。

これが最後の一撃。

短刀を地面擦れ擦れまで下ろし、独特な構えを取れば、熊は既に

絶叫しながら駆け寄って来た。

気が早い事で、そう思い苦笑を零して、ペツと血混じりの唾液を吐き出す。

顔を引き締め、次にやる事を決意した俺は足元に闇を凝縮し、舞い上がるのでは無く、超高速速度での接近を試みた。

全身が悲鳴を上げる、脳内がスパークする。

刹那、熊の爪が、豪速で迫る——！！

「く……おッ——！」

顔をブンツと横にずらし、爪を避けるも頬に掠り、血液が滴る。頬を伝い、顎から零れる血液を他所に、俺は短刀を突き出した。速度と勢いの乗った一撃は、吸い込まれるかの様にして熊の左胸に突き刺さる。

「ゴオオアアアアアアアアアアアアアアアアアッツツ——！！——！」

断末魔よりも、阿鼻叫喚に近い絶叫が空間に木霊する。

俺はその場に膝から崩れれば、滴る汗と血を拭い、暴れ狂う熊を見据え続けた。

そして、ピタリと動きの止んだ熊を見て、俺は口元を綻はらばせた。

「終わった……、か」

俺は覚束無い足取りで立ち上げれば、絶命したと思われる熊の左胸から短刀を抜き放った。

紅色に染まった刃を振り払い、鞘に納めれば、振り返る。

「業火を司る紅焰の王よ、我に抗う者に裁きの一撃を……ッ——！！
フラスティアメスティア
？ 焰虐暴乱？」

あれ、何だ、嫌な予感が——。

刹那、紅色の炎の波が俺と魔物を包み——弾けた。

それでは皆様、さようなら——って、あれ……？

俺は目を開ける、周囲には焼け焦げ、異臭や悪臭を放つ魔物達。対して俺は無傷。

あるえ……、俺も巻き込まれたハズなのにな……。

ま、良いか。生きてたし。

「終わったのか？」

俺は息を荒げているバイツに歩み寄り、尋ねた。

「嗚呼……」バイツは頷いて、汗を拭ってから「此処の魔物は厄介な奴が多いな」と溜め息を吐いた。

「一理、馬鹿だけじゃあないのさ、魔物も」

「同感だ」

二人揃って溜め息を吐いていると、リーラもまた狙撃銃を折り畳み、歩み寄って来た。

「此方も浮遊する魔物は完全に仕留めました」

エッヘンとあの神様よりはある胸を張る。

ヤベ、物飛んで来ないよな？

「そうかそうか、それとナイス援護。助かったよ」

微笑んでから、くしゃつとその銀色の髪を撫で梳いてやれば、瞳を細めるリーラ。

いやぁ……、可愛いわぁ。

撫でながら、俺は「そろそろ戻って抜けよう」と続けた。

「そうだな、此処に長居するとまた襲われそうだ」

「ですね……」

頷き合う二人を見据えて、俺は駆け出す。

駆け出す俺にポカンとする二人。其処で俺は告げて置く。

「ビリの奴、後で飲み物奢れよ？」

効果覲面だった。

二人の形相が変わり、駆け出し始めたのだ。
いやあ……、何時の時代でも奢るのは嫌みたいだね、これ結論。

ガラガラガラ。

さてさて、俺達を乗せた馬車は現在、山を降り、草原地帯を闊歩中で御座います。

時折出て来る魔物は俺の闇と、リーラの銃で終わらせている為、障害には成らない。

それにしてもこの世界に来てからもう一週間近くが経とうとしている。

色々な事があった。

奴隷騒ぎ、熊殺し、熊。

てか熊バツカリだけどさ、まあ良い思い出だよ。

いつその事、これ全部写真に納めて物語を書いて見たい物だよ。

まあ、文章力無いのが残念だけどさ。

と、馬車が停止する。

「到着だ、あれがアクトセリア帝国だ」

俺は身を乗り出し――圧倒された。

まず最初に目に止まったのは、その高層ビルや、賑わい。

まだ距離が離れていると言うのに、活気が、賑わいが見て取れる。

高層ビルもまた、一つや二つでは無い。合計七つ。何に使っているのかは不明だが、会社か何かだろうか？

それにしても、広大だ。

面積規模にして、どれ位あるだろうか？

東京ドーム三つ分、四つ分位はあるだろうか？

俺の鼓動が高鳴る。

初めての遠足に行く小学生の様な気分になって来る。

「あれが……、アクトセリア」

「はい、アクトセリア帝国。軍事国家として有名な国家です」

隣で補足説明をしてくれるリーラ。

リーラもまた、帝国を舐め回すように見詰めている。

彼女も帝国に来るのは初めてなのだろうか？

俺は「くうう……」と唸ってから「バイツ、早速直行！」と叫んだ。

此処まで居ても立っても居られないのは、何年振りだろうか？

「良かるう、世界改変第一歩目、アクトセリア帝国。いざ！！」

『おー！！』

俺とリーラは定位置に腰掛け、到着を待つ。

再び馬車は歩を進める。

帝国に近付く度に鼓動が高鳴る何て、餓鬼かよ、俺は……。

しかし、それでも、餓鬼でも良いから帝国に早く着きたいと言っ
想いは、誰よりも強い気がして成らなかった。

第十三話 黒騎士（前書き）

正体不明ワード登場。

さてはて、どうなるのか？！

そしてアクトセリア帝国で見た者は？！
ではどうぞ！

第十三話 黒騎士

険峻^{けんしゅん}な山の峠道を越え、蒼々たる草木の生え盛る草原を抜け――俺達は今、アクトセリア帝国一番街に居た。

「最大九番街まで有るのか……、一日じゃあ回れそうにないな」

アクトセリアの街全体の乗る地図を片手に、俺は一人呟いた。
いやあ、流石帝国と言った所か。

最初に俺が滞在した都市とは比べ物にならないね、全てが。建造物に置いても、人口に置いても、活気、熱気、盛り上がりに置いても何もかも最初の都市には比べ物にはならないだろう。

しかし最初から帝国とは、運が悪いと言つか何と言つか……。

一人溜め息を吐けば、隣で俺の手を握り、人を避けながら歩むりーラが俺を見上げ、

「この後どうしますか？」

と、尋ね掛けて来た。

「取り敢えず宿屋確保だろうな。寝床が無ければ食い物にも有り付けないし」

完結に俺が応じれば、バイツが補足する様に「それに突如の事態にも宿屋ならば備えられるからな」と続けた。

「分かりましたっ、では宿屋を探しましょうか」

「嗚呼、そうだな」

人を避け、避け、避けて歩み続ける。

ホント、人が多い。

祭りだよ、これ。屋台が並んでたら確実に夏祭りだよ。いや、花火大会か？

いやまあ、何れにせよ、人が多過ぎる。

もう既に身は流れに任せている状況なのだ、これ以上増えれば押し潰されるかもしれない。

アクトセリア帝国ってこんなに凄いのかよ……、ふむ、聞いて置

くとするか、此処は。

無知つてのが一番怖いからなあ。

「てかさ、アクトセリア帝国ってどんな所なんだ？ 帝国って言うからにはやっぱり帝王が頂点で、帝政政治なのか？」

流れに流れ。

人込みを流されながら、俺は二人に問いかけた。

「そうだな、帝政政治形態を取る帝王が頂点の軍事大国だ」

まずは隣でバイツが頷いて応じた。

「ですね。そして今の帝王の名前が？ イザニア・クロスピースヒュール・アクトセリア？ です」

補足説明の様な感じでバイツの後に続いてリーラが紡ぐ。

「覇権を狙う国家の一つで、一種の魔術国家とも呼べる国家ですね。人工的には一番此処が多いのではないかと」

ふむ……、やっぱり人口が一番多いのか。予想はしてたけどやっぱりね。

「まあ以前話したが、婚礼の儀が未だに続いているのも原因かもしれないがな。」

婚礼の儀の後は多分だが相当静かになるだろう」

出たな、婚礼の儀。ってか長いな、婚礼の儀、どれだけ長いのか。確か二週間近くは続けるんでしたよね」

長過ぎやしませんか？！ 春休み級か、オイ！

「そうだな、しかも今回は王国と帝国の結婚。故に婚礼の儀、祝いも長いのだろう」

ふむ……、帝国同士なら短かったのかね？

様々な疑問が頭の中を駆け巡る。

どれから尋ねようか迷っている——「食い逃げだよおお！！だ、誰か捕まえてえええ！！」と言う叫び声が響き渡ったのだ。

「食い逃げ？」

「みたいだな……」

「どうしますか？」

助けたいのは山々なんだがなあ……、よし。

「リーラとバイツは先に宿屋の確保を頼む。俺は俺であの食い逃げ野郎を確保したら追い付く」

「構わんが、それでは宿屋集合と言う事で良いのだな？」

「嗚呼、そうしよう」

これなら宿屋確保、食い逃げ確保でダブル確保。縁起良さそうじゃね？

「で、でも場所とかは……？」

「周りの人に聞かさ、これだけ居るんだ、大丈夫だろ」

苦笑を零してから、頭に手を乗せて「それじゃあ宿屋の方は頼んだぜ」と告げて、俺は思い切り地面を蹴る。

さて……、何処に居る？

さてさて、俺は現在、空中浮遊中。

いや、浮遊と言うか思い切り飛び上がったせいで落下まで時間が有るだけの事なのだが……、取り敢えず今は食い逃げだ、食い逃げ。

「何処だし、食い逃げ。隠れられたら俺もお手上げだぞ」

落下しつつ周囲を見回し続ける。

と、

「退けッ！！ 退け退けえっ！！」

人込みの中から短いながら女性の悲鳴や男性の怒声が上がっていた。

退け、と言っているのが多分だが食い逃げ犯だろう、多分だが。

「それじゃあさっさと確保しますかあっ！！」

石畳の地面に着地すると同時に再び、今度は真上で無く斜め前に

向けて駆け出し、跳躍する。

ズドンッ！！　と言うジェットサウンドが響き渡り、周囲の民衆もまた驚き、俺を見ていた。

まあ、そりゃあそうだよな、人間が飛んだんだから。しかも魔法も何もなしで。

「さてさて……、どうしようか。軽症程度なら負わせても大丈夫かね？」

今度は噴水場のあたりに着地し、着地と同時に蹴り、飛翔する。繰り返し繰り返し連続。

其処で漸く犯人の真上までやって来て、

「さて……、まあ、これで大人しくしてよ」

俺は落下する前に太腿ふとももに巻き付けてあるナイフベルトから投擲用ナイフを一本抜き放ち、犯人に向けてスナップを利かせ投擲する。

バシュッ！！　と言う音が風を切り、空を切り、唸りながら犯人に迫る。

「なっ、っが、あアアッ！！」

野生の勘か、犯人はナイフが迫っている事に気付いて、音からなのか避けようとする、が——見事直撃、背中に刺さった。

まあ其処まで深く刺さってないみたいだし、軽症の軽症だな、ありゃあ。

俺は犯人の少し前に着地し、額に浮かんだ汗を拭った。

犯人はその無精ひげの生えた、ゴツゴツした切り株から切り抜いた様な顔を挙げ、俺をその細い目で睨みつけた。

「デメエ……、何しやがる……ッ！！」

わお、怖い怖い。え？　何しやがるってそりゃあ——。

「確保」

これしかないでしょ。

「デメエは唯の一般人だろうがッ！！ 騎士でもねえのに首を突っ込んで来るんじゃないぞこの糞餓鬼がッ！！」

「あーはいはい、黙れ」

喚くなよな、煩いから。

てか一般人？ いえ、召喚された者で、しかも一種の冒険者ですが何か？

俺はナイフベルトからナイフを抜き放ち、もう一発投擲する。

それも今度は先程より近距離故に――。

「ギャアアアアアッ！！！！」

直撃したら深くまで刺さる事は免れない。

まあ見事なまでに直撃したけどね、あらら、右肩に刺さったんだ。

「デ、メエエツツ！！！！」

「怖い怖い。止めてよね、逆恨み何て、俺は悪くない」

何て言ってみたりしたけど、実際向こうが最初に食い逃げしたのが悪いのさ、俺はだから悪くない。

瞬間、男の何かがキレた。

瞳孔を開き、歪んだ笑みを浮かべてから顔を引き攣らせ、絶叫する。

「ブ、チ、ツ、殺してやら、ああアアアッ！！！！」

男の持つのは、俺の投げたナイフ。

まあ浅い方を引き抜いたのだろう、深い方は引き抜くの浅い方より数倍痛いからね。

「殺す……、ね」

しかし、俺が感じているのはそれ以外。
殺す、と言う言葉。

「嗚呼——」

「死ねえええええええええええつっ！！！」

ブオオンッッ！！
 と言う風を切り、唸り上げるナイフ。

空気抵抗を受けながら迫るナイフは、直撃すれば確実に俺は死ぬ一撃だ。

まあ――直撃すればの話なのだが。

「嗚呼、無常」

——刹那の交錯。ナイフの刃を俺は瞬時に取り出した短刀で防ぎ、弾き返した。

そして俺は紡ぐ、歪んだ、それこそ危険な笑みを浮かべて……。

「極彩と散れ、毒々しい輝きならば誘蛾の役割も果たせるであろう……」

幕開け、では無かった。

ツキユウツインツツ！！　と言う、風、空と言う抵抗する物全てを貫き穿つ、神の槍の如き豪速の一撃が横から男に直撃し、男を吹き飛ばしたのだ。

$$\begin{matrix} \neg \\ \vdots \\ \wedge \\ ? \\ \perp \end{matrix}$$

俺は構えていた短刀を下ろし、呆然とする。

男は木箱と木材の山に突っ込み、一度痙攣したかと思えばそのまま動かなくなった。

一体何が、そう思っ
て振り返れば、

「感謝しよう、少年」

その、低く、それでも威厳を持つ、威圧感を漂わせる言葉が、俺を貫いた。

俺の視界に止まったそれは、黒い甲冑を纏う、騎士だったのだ。

誰もが彼をこう呼ぶ事だろう。

？黒騎士？——と。

第十四話 愉悦と快楽

圧倒的威圧感。

圧倒的存在感。

威厳漂う黒き甲冑。

俺の目の前に対峙する、黒き騎士。

「お前達、食い逃げ犯を確保せよ」

『ハッ！』

低い声が、彼の後ろに居る白い甲冑を纏う、同じく騎士達に命を下した。

騎士達は左胸に拳を当て、応じてから吹き飛んだ食い逃げに駆け寄って行った。

「助かったぞ、少年」

騎士達の様子を見ていた黒き騎士は数秒後、俺の方へと視線を移し、そう告げて来た。

「い、いえ、当たり前の事を、したまでですから、はい」

途切れ途切れに返答する。まあ、当たり前の事をつてこれがこの国での当たり前なのかはと聞かれれば分からないが。

「そうか……。では一つ問おう」

「はい」

「この国を君はどう見る？」

どう、って……、ふむ……。

「良い所だと思います。活気もあるし、賑やかだし。しかし、今回の様な食い逃げ等が起こってしまうのを考えると、治安が悪いと言っわけではありませんが、警備が少々甘いのではないか、と考えます」

元倫理学科一位を舐めちゃ駄目だぜ、諸君。

これでも学校での倫理のテストは全て90点以上ばっかなんだぜ？ まあ倫理以外に特筆すべき点が無いと言うのが正しいのだが。

と、其処で気付く。

これ、俺死んだんじゃない？ と。

キツパリ言い過ぎたか、これは……。てか相手が何者か分からない中で、あれは非常に不味かった、今気付いたよ。

しかし、返って来たのは、笑いだった。

「く、ふふ、はははっはははっ！ー！ そうかそうか、そう見るか、少年。良い事を聞いた、どれ、少年、名は何と言っ？」

「リヨウ。リヨウ」ナナミです」

「そうか、リヨウ。それでは今度は問いでは無い、頼みを聞いてはくれぬか？」

「頼み？」

はて、何だろう？

そして俺は後悔する、頼みを受けてしまった事を。

爆音に次ぐ、激音。

反転に次ぐ、逆転。

凝縮に次ぐ、閃光。

「ら……、あつ！」

「ぬ、うつー！」

舞い散る火花。

響き渡る金属音。

さて、今何が起こっているのかと言うと、黒騎士の頼みを叶えております。

頼みとは何だったのか……、まあこれまた簡潔で『君と一興を興
じたい』との事。

つまり決闘してくれ、**が結論。**
で、今に至る。

「済まないな、少々甘く見ていたようだ……ッ」

「甘く見てると——怪我するぜ……ッ」

両者距離を取り、愚痴憎まれ口を言い合ってから、正眼に己が武器を構え直す。

——一瞬の交錯。石畳の床を破壊する勢いで蹴り飛ばした俺と黒騎士は同時にそれぞれの俺は短刀を、騎士は騎士の使う両刃剣を交わらせた。

火花が散り、今度は澄んだ金属音では無く、耳障りな金属同士の擦れる音が轟き渡る。

「ふ、
……
ツ
ツ
!!
」

黒騎士の剣が短刀の上を滑り、俺の首を薙ごうと再び横に構えられる。

しかしそれを俺が許すわけも無く、短刀を低姿勢に構え、黒騎士の瞳に向けて突き出した。

「ツツ、く、ツツ！」

防いだのは両刃剣の刃では無く、黒騎士の纏う黒き甲冑の箆手。
箆手に刃が突き刺さる事は無く、弾かれては、俺は一度距離を取る。

（甲冑は防御にも使えるのか……、なら——ッ！）

甲冑と甲冑の間を狙う、それで決める。

殺すつもりも無ければ、怪我をさせるつもりも無い。

狙いは一撃。当てるだけで終わらせる。

刹那、両刃剣が轟の唸り声を上げて俺の右肩から振り下ろされる。

「——ッッ！」

直撃寸前、俺は両刃剣の腹に短刀の切っ先をぶつけて、弾かれる形で回避する。

「反応速度、反射神経共に凄まじいな……、今のを避けるとは、ならば——ッ！」

「お褒めに預かり——光荣だッッ！」

今度は右脇腹からの斬り上げが来ると予想しつつの、横への一閃への一撃に備え、体の重心を限界まで下げ、駆け出す。

「ぶ、——ッ！」

予想通りの斬り上げ、俺はそれを地面を蹴り上げる事で飛翔し、避ければ、そのまま短刀を空中で構え、思い切り息を吸ってから止める。

そして、思い切り、叩き、付けるツツ！

「う、——らあああつつ！！」

ギュツウツウオンツ！！　と言う風斬音が耳を劈き、短刀の刃は吸い込まれるかの様に黒騎士の右肩に迫った。

「ぐツ、——おお、おおおツツ！！」

黒騎士も黒騎士で紙一重の形で両刃剣を振り上げ、短刀の刃を刃で防ぐ。

しかし此処で止めない、いや、止めるわけには行かない！！

「せ、ええりやああアアアああツツツ！！！」

刃同士が接触し、火花と轟音を唸り上げ闘ぎ合う中で、俺は肩を動かし、振り抜く。

擦れ、削れ、抜ける。

散り、舞い、弾ける。

俺の思考が、意識が、限界まで引き伸ばされ、フラッシュし、スパークする。鮮やかなオレンジ色と黄色の火花が目の前で弾け渡る。

「っ、——おおっおっおおッッ！！！」

攻撃と攻撃、接触と接触の間隙を駆け抜け、俺の腕が限界まで振るわれる。

振るう度に風が斬られ、刃同士が接触し、火花を上げ続ける。まるで、星空に舞う、星々の如く煌きながら。

そして俺は紡ぐ——、決める！！

「極彩と散れ……」

黒騎士の両刃剣の腹の上に乘れば、体を捻り回転し、重力と速度、捻りを加えた轟音を鳴らし響かせる一撃を——！！！！

「ぐ、ああ、ツッアアッアアアッ！！！」

ツキイイツイインツッ！！！　と言う何かが碎ける音が——。

俺の短刀が碎け折れたのか、両刃剣が碎け折れたのか——。

——果たして。

「……、見事」

「……、流石」

俺と黒騎士はそう呟き合う。

二人とも顔を見ずとも、分かっている。

きつと、きつと――。

笑っている事だろう、戦いの中に生まれた、愉悦と快楽に酔い痴れた。

まるで舞踏を舞いを踊り、酒を呷り、酔い、愉悦と快楽に溺れた
姫と皇子の如く。

嗚呼、そうだよ、笑ってるさ、笑わないと居られないのさ。

だって、だって――俺の短刀は見事に押し折られたのだから。

此処までやられて、笑えないはずが無いだろう？

第十五話 両手に花か両手に鬼か

「ど、どど、どうしたんですかその傷は?!」

「な、何があつたのだ?! 此処に来るまでに!」

案の定、現在俺は黒騎士との決闘の後、休憩中だった建築士の男性に宿まで案内して貰つたのだが、これだ。

予想はしていた、してたさ。してなきゃ俺は今余裕を保っていない。

「えと、黒騎士と決闘しました、はい」

結論から告げれば、二人は驚いた様にその眼を見開き「それは本当か?」ですか?」と同時に尋ねて来た。

「嗚呼、引き分けだったけど、武器折られちゃったから俺の負けかなあ」

刃の碎けた短刀を抜き放てば、二人の目の前に置いてある木製の机の上に静かに置く。

食い入る様に短刀を見詰めてから、リーラが首を傾げた。

「それ以外には……、あつ、食い逃げの犯人はどうになりましたか?」

「嗚呼、あれは勿論その黒騎士の率いてた同じく騎士達に確保されてたね」

「そうですね……、でも良かった、リョウさんが無事で」

安堵した様に息を吐くリーラに俺は「悪いな……、心配掛けて」と呟き、そつと頭を撫でる。

撫でられながら、リーラは少し頬を桃色に染め、上目遣いに「痛み所は、有りますか……？」と尋ねて来る。

「いや、掠り傷ばかりだから痛くはないけど……、強いて言うならヒリヒリするかな」

これは風呂入ると絶対染みるタイプの傷だ。諸君も経験あるだろう、あの激痛。

電流が走るようなあの激痛……、嗚呼、ヤダヤダ。

「そつ、ですか……、なら一応治癒の魔法を」

「あ、有難う。でもリーラ、治癒魔法何て使えるの？」

首を捻る俺に、リーラはクスリと微笑んで「氷系統の魔法所持者使用者は大体治癒魔法は基礎で教わりますので。基礎程度は」と続けた。

「へえ……、じゃあお願いしようかな」

「はいっ」

太陽の如き微笑みを見せてから、俺の傷に触れてから何かを紡ぐ

リーラに対して、バイツは一唸りしてから「黒騎士は何と言っていたのだ？」と尋ねて来る。

「さあ……、見事、とだけ言われたよ。俺も体力無いなってあの時改めて実感させられたね」

肩を竦めれば、バイツは「そうか……」と頷いて「では一つ、聞きたい」と続けた。

「何だ？」

「黒騎士の武器は、何だった？」

「武器……？」

ふむ……、武器ね、何だったか……、嗚呼、確かあれだ。

「両刃の剣だよ、でもあれを軽々と振り回す何て、流石だよな、ホント」

うんうんと一人頷く俺にバイツが溜め息を吐いて「リョウ」と名を呼んでから「黒騎士の予想は大体付いた。だが、それはまだ本気の武器では無い」と続けた。

「本気の武器……？」

「嗚呼」バイツは頷いて「黒騎士の名は多分だが、ライン・ヴァイスリッター。使う武器はお前の言った通り、両刃の剣。故に黒騎士以外にも他国では？鬼剣きけんの騎士？とも呼ばれる兵だ」と続けた。

懇切丁寧に説明有難う、しかしだよ、バイツ。

最後、何だって？

「最後、他国でもって言ったか？」

「嗚呼、他国でも知れ渡るほどの兵だな」

……マジですか。

俺、失礼働いたんじゃない、これ……、嫌だよ、明日には首が飛びますとか。

翌日死刑とか最悪過ぎて声にもならんよ、いや、死ねないから死刑になっても強制蘇生か、こりゃあ。

死ねないってのも、案外厄介だな、おい……。

「成程……、理解した。で、お前達にも質問だが、此処が今夜から滞在する宿か？」

首を傾げる俺にリーラが俺の傷を修復しながら「はいっ、資金の方はバイツさんが」と微笑んだ。

「バイツ、お前、幾ら持ってるんだよ？」

「秘密だ。男にでも秘密は欲しい」

「……まあ、な」

確かに秘密は欲しいな。

てか此処がこれから滞在する宿か……、案外山の前に泊った宿と変わらんな。

帝国王国でも宿屋のデザインは纏めてるのかね？

「そっぴゃバイツ、今何時だ？」

「ん？ 今、は……、六時だな、何故だ？」

「いや……、俺とそのラインって奴、一時間近く戦ってたんだなあってさ」

「戦闘狂と呼んでやろうか？」

「瞬間的に闇で飲み込むぞ、オイ」

冗談だ冗談と目の前で手を横に振るバイツは置いて、おお、痛みが無い。

「終わりましたっ」

そして目の前に広がる太陽の如き、輝かしい微笑み。

「有難う、助かった」

俺もまた微笑めば、そつとその髪を梳く様に撫でてやる。

いやはや、撫で心地が良い事で。

と——俺は不運を呼び集める避雷針なのかね？

宿屋の扉が押し開けられると、一人の白い甲冑では無く、胸元が大きく開かれ、特殊改造でもしたのか装甲の薄い鎧を纏う、美女が俺の目の前にやって来たのだ。

「其処の貴方？」

「はい、何で御座いましょう？」

目の前の彼女はその金色の瞳で俺を数秒見詰めてから、妖艶に微笑み、髪を躍らせると、俺の仲間も数秒間見詰めた。

直ぐに視線を俺に戻せば——俺の腹に触れて来た。

「……何でしょう？」

変態か？ この女は。

「良い腹筋ね、何か昔やってたでしょ」

「まあ一応」

そりゃあ見抜かれるわな、うん。

てかお姉さんや、離れてくれないか、周囲の客の視線とリーラの視線が痛い、鋭い、突き刺さって流血する。

「それにしても華奢。髪も黒いし、眼も黒い。珍しい人種ね、貴方」

「そうですか？ これでも一応普通の健全な男子ですが？」

俺は小首を傾げてみせる。

と、其処で気付く。

「おや、貴方は猫ですか？」

するとリーラもバイツも周囲の客も気付いたらしく、ポンと手を打っていた。気付かなかったんかい！

ふふ、と笑ってから彼女は頷いて「そうよ」と続けた。

「私は？^{アニマート}獣人？の種族で猫。尻尾も耳もあるのよ？」

「ふむ。確かに獣人で猫ならば納得が行きます。で、その猫科の美しいお嬢さんが何の用でしょうか？」

流石にそろそろ名乗らずに？ 無礼にも程が無いか？ これ。

と言う事でプツンしそうですね、はい。また罵倒^{ドエス}モード入りますよ、おい。

「用は簡潔。今宵、貴方達を私達？帝国聖光騎士団？の宿舎に招待するわ。ラインが逢いたがってるの」

「……は？」

『は？』

俺とリーラ、バイツの声が一致した。

「待て待て待て、何故に招待？ てかアンタ、名前は？」

「あら、名乗り忘れてたわね。私はエルナ。エルナ＝エルアインス」

「了解です。ではエルナさんや、何故俺達が招待されなきゃならんのですか？」

瞳を据えてそう尋ねればエルナさんは「だあかあらあ」と続けて「ラインが逢いたがってるのよ」と頷いた。

「ラインって……、あの黒騎士？」

「そうよ、決闘であそこまで強い奴も久し振りで燃えたとか。だから今宵は酒を交わしたいって言うてるの」

「さ、酒って……、とするよ、二人ともって……、行くつもり満々ですね、はい」

『ハイツ』『おうっ』

見事なまでに、まあ大方予想は付くが、多分リーラはリーラで俺の心配、心配症だからね、彼女。

そしてバイツはバイツで？ライン＝ヴァイスリッター？に逢えるのが嬉しくて仕方無いのだろう。

はっはっは、笑えないわド畜生！！

「じゃあ決定ね、着いて来て頂戴。リョウ君」

「はい、って何故に俺の名を？」

多分――、

「ラインから聞いたのよ」

でっすよねー。

直後、俺の腕は何か、あの、あれだ、柔らかい、そう、マシユマ
口のような柔らかさを持つ大きな二つの何かに挟まれた。

目が点になるってこの事だね、俺の意識、危うく飛ぶ所だったよ？

「あの、何を？」

「ん？ 駄目かしら？」

「いやぁ……、まあ、良いですけど、何故にまた？」

「何となくよ」

と、同時、俺の左腕にも小さいが、何かが当たり、腕が絡まって
来る。

これは両手に花か？ 両手に鬼か？

いや、これは新手の拷問だろう。言わなきゃ妄想で殺すよって言

う。

「あの、リーラはリーラで何を？」

「い、良いんですつ。良いですからリョウさんは前を向いていて下さいー!」

「は、はいっ!」

此処まで意志の強いリーラ、始めて見たよ……。

まあ言われた通り、俺は前を向いて歩み始める。

うん、悪い、バイツ。

嗚呼……、このまま死んでも良いかな？

第十六話 俺と『俺』とラインの苦勞

「で、どうしてこうなった？」

「青年、いや、リヨウ。其処は突っ込んではない」

さてさて、現在俺達はエルナさんに連れられる事数十分の場所に
あつた宿舎と言つより酒場に居る。

で、目の前にはドンチャン騒ぎをする俺の仲間一行と、騎士団
員達。

酒臭さと、男臭さが半端じゃない。まあ女も居るが、女の匂いは
全て酒で消えてしまっている。

嗚呼、酒って怖い。何それ怖いじゃないけどホントに怖い。

因みに俺の仲間一行がどうなっているのか、と言うとだ。

リーラは現在、グラスに注がれた淡い桃色の、カクテルに近い酒
を先程から飲み続けマスターらしき人物に愚痴を漏らし続け、

バイツはバイツで騎士団員達と飲み比べをしては踊っている。

何だ、この有様。

まあ……、たまには良いのかね、休止符って事で。

え？ 俺？ 俺は俺で楽しくやってるよ、まあ飲んではアル

コールの低いカシス系統だけど。

隣では同じくアルコールの低い酒を呷るラインが溜め息を吐いて、この有様を見詰めている。

「恥ずかしい所を見せたな、リヨウ」

額に手を当てて、呆れた声で呟くラインに俺は「いや、こう言うのも良いんじゃないか？」と告げて置く。

「そうか……、たまには、か」

「そうそう、ってかタメ口で良いのか？ 本当に」

数分前、酒を飲み合いながらラインは唐突に「敬語よりタメの方が気が楽だからタメにしてくれ」と言ってきた。

当たり前でしょ、最初は猛反対したよ。猛反発の猛反対。しかしこれがまあ通らず、ラインは頑固なのかね？

結局タメで話す事となったのだが、まあ、俺も俺で気が楽なのでもう反論はしない。

「嗚呼、構わない。それで、だが。リヨウ、聞きたい事が幾つかあるのだが、良いだろうか？」

「聞きたい事？」俺は甘い酒で喉を潤してから首を捻り「構わないが」と続けた。

「お前は何者だ？」

「結論だよな、それもう。——まあ、何者と問われれば人間。召喚された、ね」

「召喚……?」

至極真面目な顔でその真紅の瞳を細めるラインに俺は頷いて「異世界から召喚されて此処に来たのさ」と肩を竦めて告げた。

ラインは目を見開き、口を酸素を求める魚の如くパクパクしてから「それは本当か?」と尋ねて来た。

「嗚呼、本当さ。嘘だと思うなら、試してみるかい?」

「試す?」

「嗚呼——、深淵しんえんの更に奥底まで沈めてやろう」

ズズズツと右腕に漆黒を真紅が縁取る闇を薄っすらと展開し、苦笑を零す。

「まあ、嘘だ。実際俺は闇使いさ、召喚された異世界の闇創造使い」
それから溜め息を吐いて「それだけだ」と頷いた。

「そう、か……。通りで強いわけだ、異世界で修行でも積んだのだろ?」

「修行ってか武道をな、小学校の頃からやらされてたんでな」

「ショウガツコウ？」

聞き慣れない単語を聞いた俺の様に首を傾げるライン。

「あ、嗚呼、此処で言つと幼い子供達の通う魔法学校さ」

「ほう、ではその幼い学校に通いながら鍛えていたと？」

「嗚呼、まあ半場強制的だったけどな」

そう、俺は父親に言われ、母親に背を押され武道を学んだ。

小学生になつて早々空手、中学生で柔道剣道。俺は何だ？ 俺を何にしたいんだ、あの親は。

「だが何故其処まで鍛えて華奢なのだ？」

「嗚呼」それはね「簡単な事だよ、俺はどれだけ鍛えても華奢なままなのさ。前にも試したけど永久に華奢っぱい」んだよね。

病なのか、疾病なのか、事故なのか、先天性なのか、後天性なのか……、いやはや困った物だよ、ホント。

お陰で中学校の頃男にナンパされたし……、ふは、痛い痛い。

「それは困った物だな……。それと、もう一つ言って置く事があるのだが――」

「何だ――「りょーおっ」おぐはっ――！」

「遅かったか……」

何だ、新手の奇襲か?! 重い、重いってか何か二つの山がつ、山が当たってる!!

て……、この胸、この髪、この体は——!!

「う、ふふふふ……」

「ひひひひひひ……」

「リョウ、済まない。先に言って置くべきだったな……。エルナ」
エルアインスは酒を飲んでも飲まなくても変態なのは変態なのだが、飲むと更に変態化する」

「……それは、良い事？」

「物凄く悪い事だ」

ですよねーっっ!!! てか頷いてないで助けるやライン!!!!

「お、おお、済まない!! ぶ、無事か?!!」

「無事、じゃあ、ない……」

俺は猫宜しく、胸に擦り寄るエルナさんを振り払い、ほふくせんしん匍匐前進で距離を取れば、差し出されたラインの手を取り立ち上がる。

やっぱり酒怖い!! 酒、飲むな、絶対はこの女にピッタリだろ……、お似合いだ。

「にゃんっ、何で逃げるのよおっ……」

「良いか、リヨウ。彼奴は手強い、いや、此処の騎士団の女性隊員はあの女の影響を受けて？^{バカ}面倒？になった」

「元凶貴様か！！」

最悪じゃねえかつ！！

って――。

「らーいん様っ……！」

「させるかあっ！！」

瞬間、ラインの背後から忍び寄る女性隊員の額に向けてデコピンを放つ。

てか忍者か貴様は、気配なく忍び寄るなや……、焦ったわ。

「済まない、助かった」

「いや、構わない。で、どうするこの状況」

「……、逃げても魔法で拘束されるのがオチ。逃避行動は無駄、と考えるのも良いだろう」

流れる汗も冷たく、背筋には悪寒が走り続けている。

脳内状況は現在、怖い怖い怖いばかり浮かんでいる。

逃げる方法を探しながら、説教等も考えたりしている。

或いは逆に縛り付けて逃げるか、気絶させて逃げるか。

消えては浮かぶ案。

其処で俺の意識はブラックアウトした——嗚呼、此処までか。此処で俺の貞操は——。

「やれやれ……、意識の奥底より俺を起こすなと言う。無理矢理、いや、無理矢理で良いのか？

何故無理矢理意識を途切らせ、俺を呼ぶ。

深淵で眠って居たかったと言うのに——まあ、これも俺を護る為の因果か」

やれやれな事だ……、何が俺の貞操だ。

——待て、お前は誰だ？

俺は『俺』だ。俺以外の何者でも無いさ、まあ俺は一言で言えばお前の使われる事の無い行動原理の塊。

——行動、原理？

そうさ、結論から言わせて貰おう。俺はこのままコイツ等を黙らせるんだが……、どう黙らせたい？

——どうって……？

罵倒？ 拘束？ 殺害？ 刺殺？ ××プレイ？ それとも×××？

——お前……、何を……？

さて、決まった事だし、お前は少し眠れ。終わったら呼ぼう。

——ちょ、待つ……！！

途切れた俺の言葉。

『俺』に口出しするなよ……、これは俺の舞台だ。踊るのは『俺』、観客はお前だ。

「リヨ、ウ……？」

「案ずるな、此処は『俺』が何とかしよう……。そうだな、ラインは、俺の後ろに居ると良い。巻き込まれないように、な」

俺は深い笑みを零してそう告げる。

ラインは一瞬、肩をビクツと震わせてから静かに頷き、二三歩後退し、俺の背後に身を潜める。

やれやれ、発情期の猫か？ あれは。

発情期の猫には、一発×××をやれば直ぐ我に戻るんだが、やれば間違いなく俺は殺される。

此処は——試すか。

俺は深い、いや、歪んだ、歪な、壊れた様な、終わりそうな程口元を綻ばせ、囁く。

「罰を受けなければ、即座に戻る事だな」

刹那、空気が一変する。

女性男性陣は皆、顔を引き攣らせ、肩を震わせる。

リーラも、バイツもまた、豹変した俺に驚いているようだ。

まあ、それはそうだろうな。『俺』は『俺』であって、俺では無いんだ。

はは、分かり難い事この上無いな、まあ今は——目の前の発情猫に罰を与えよう。

「りょーおおっ」

瞳を潤ませ、頬を淡い桃色に蒸気させて抱き着いて来るエルナを俺は抱き止め、首を捻る。

「何だ、猫」

「む、猫じゃないもん……」

「じゃあ変態か？」

「もっと酷いでしょっ!!」

餓鬼か、コイツは……。

「じゃあ変態猫、一言言おう」

「更に酷い!! な、何よ!」

「……黙れ」

「——ッ!!」

声にならない叫びを上げ、エルナは顔を蒼くし、引き下がる。

確かに、これは俺の気持ちも理解出来る。

ラインも俺も、大変な生活を送っているんだな……、貞操、護れてよかったと喜ぶべきなのか——瞬間、『俺』の意識もブラックアウトした。

久々に出て来た物だから疲れたな……、それに眠い。

意識の奥底から呼び起こされた物だから……、無理をし過ぎたか。

膝から崩れる俺の体を支えるのは——リーラ、か？

まあ良い……、嗚呼。

さあ、返すぜ？ 相棒。

第十七話 休息、夜空、そして青い月

「つと……」

意識の戻った俺は、リールに支えられながら頭を横に二度程振った。

頭が重い。

「大丈夫、ですか……？」

「あ、嗚呼……、何とか、な」

頷けば、バイツも駆け寄って来て「何があつたのだ？」と首を傾げる。

「俺じゃあない『俺』が俺と交代した、と言つべきか……、この場合」

「お前では無い『お前』？」

更に深く首を傾げるバイツに俺は「やっぱり良い」と告げて、二の腕を突かれた。

「はい？」

突かれた先に居るのはライン。どうかしたのか、と小声で尋ねると、無言で右を指差した。

右？ 首を俺も傾げて見てみると——……あー……。

「っひ、く……、ふ、ええ……」

額に手を当てて、俺は項垂れた。

おいこら、『俺』。エルナに何言いやがった……。思い切り泣いてるじゃあねえか。

泣かすまで言うなよ……、全く。

俺はリーラに「もう大丈夫」と告げて頷いてから、ゆっくりとエルナに歩み寄った。

「ひっ……」

歩み寄る俺に怯える様に肩を震わせて少し後退る彼女。オイオイオイ、何ホントに言いやがった……？

怖がられてるじゃないか……。

「待て待て、もう大丈夫だから。さっきはちよつとね、もう大丈夫。大丈夫だから、ほら、ね？　おいで？」

声音優しく、柔和に微笑んでから両手をそつと広げて待つてやれば、彼女は一瞬だけ呆けて、瞳から大粒の涙を零しながら抱き着いてくれた。

俺は倒れる直前で腕を使わない受身を取れば、そのまま彼女を抱き止め、優しく、その金色の髪を撫でてやる。

「ホント、御免……。怖かったよなあ……」

絹のようなその髪を梳く様に、何度も何度も撫でる。

その度に彼女は嗚咽し、途切れ途切れに言葉を紡いだ。

「こ、わ、った、よ……、お」

泣かせた『俺』、これからはもちつと優しくしてやってくれ……、俺、こう言つの苦手なんだから……。

良し良しと髪から背中中に手を滑らせれば、トントんと優しく落ちて着かせる様に撫でてやる。

すると、彼女は次第に泣き止み——て、あれ？

「どうしたんだ、リヨウ？」

此方に歩み寄って来ては、怪訝な色を顔に浮かべるライン。
他の隊員達も集まって来る。

「どうかなさったんですか？ リヨウさん」

「そうだぞ、ハッキリ言ってくれ、気になるだろう」

リーラは俺の頭の上に顎を乗せて、バイツは俺の肩に手を乗せて続いた。

「いや……、見てみりゃあ分かるよ、つくく……、はは」

小さく笑みを零す。だってエルナ——。

「あ……、寝ちゃって、ますね……」

「寝てる、な……」

「全く……、迷惑を掛けるだけ掛けて眠るとは、良いご身分だな、

「コイツも」

上からリーラ、バイツ、ラインである。
ラインは少々呆れながら苦笑を零した。
周囲に集まっていた隊員達もまたそれぞれで苦笑を零し合い、笑っている。

「ではどうしようか……、このままじゃあ俺、抱き着かれたまま寝る事になるんだが……」

「良いんじゃないか？」

「そうだぞ、たまには良いんじゃないか？」

たまにはって……、何だその毎日俺が女と一緒に寝てるみたいな言い方は。

と、瞬間、リーラが二人をキツと上目遣いながら睨み、告げた。

「だ、ダメですよ！！　ダメですよ！！　そ、そんなの！　わ、なら私だって……！」

「いやいやいや、何が私だってだ、おい」

「ふむ、なら一緒に寝たらどうだ？」

「それは良い案だな。よし、リョウ、そうしろ。部屋は確保してやる」

「俺の話も聞いてよ……」

流石にそろそろへこむ。

てかこの世界にもスルースキルはあるんだな……。精神面ダメージを少々負った俺は「で」と呟いてから「実際にどうするんだ？」と問い掛ける。

「ふむ……、実際は二人と一緒に寝て貰うのが最善策なのだがな」

「俺もそう思うぞ」

「……、マジですか」

まさかこうなるとは……、冗談かと思ってたのに……。

いやね、実際健全な男子高校生である俺は女性二人と寝るのは慣れていたりする。

別にリア充言うわけでは無い。姉妹が時折俺の布団に潜り込んで来るのだ。故にそうなる。

右腕に姉、左腕に妹の形で。

悪友曰く「このリア充め、死ね」と言われたが、何処がリア充なのだろうか……？

リア充ってのはリアルを充実してる人の事だろ？ 俺は今まあ充実してるけど、前は全然だったぜ？

人によって基準が違うのかどうなのか……、ふむ。

と、同時、ラインが俺の肩を掴んで爽やかな笑みを零した。

「よし、今宵は此処に泊って行くと良い」

「へ？ 部屋とかは？」

次いでバイツが「部屋を提供してくれるそうだ。資金面も問題は無い」と紡いだ。

「あ、なら良いな……。じゃあ今夜だけ部屋、お借りします」

俺は小さく頭を下げ、マスターに告げた。

マスターはいえいえと言う様に首を二度横に振って、「ご自由にお使い下さいと言う様に肩を竦めていた。

抱き着いたままのエルナをそのままひょいと抱き上げれば「部屋に案内してくれるか？」と尋ねる。

「良かるう、俺が案内する」

頷くライン、導くラインてか？

此方だ、と呟いて、手招きをするラインの後を俺は着いて行く。

俺の隣にはリーラ。そして今日の前にはエルナが居る。

リーラは俺の服の裾を掴み、エルナは抱き着いている。

少々刺激的だが、この程度問題は無い。

「この部屋だ」

ぎいつ、と開いた先には、案外ゆつたりとした部屋の景色が広がっていた。

木製のベッドに、木製の床、木製の壁に、全てが木製の部屋。

「ゆっくりして行くと良い。明日の朝には起こそう。それと――」

「有難うな……、って、ん？」

「済まなかったな……、恥ずかしい一面を見せてしまって……。そしてエルナも」

俺は苦笑を零し、肩を竦めてから「構わないさ。それに恥ずかしいのは無い。たまには良いんだよ、それにエルナは明日の朝にでも返すさ」と続けた。

「助かる。では、な……、また明日」

「嗚呼、また明日」

ボタンと閉まったと同時に、下の階からバイツの「もっと熱くなれよおおー！」と言う叫び声が響き渡った。

「ただだけ煩いんだ、お前は……、そしてもっと熱くなれって鋼×さんか？ お前は？」

「まあ取り敢えず今は酔い覚ましと、明日へ向けての時間として――」。

「それじゃあ俺達は寝ようとするかね？」

「そうしましうかね？」

「あ、はい！」

微笑むリーラの顔は何時見ても癒されるよなあ……、っとほんわかしてても仕方無いな。

まずベッドに腰掛けた俺は、抱き着いたまま眠る彼女を左側に寝かせる。

そつと左腕を抜けば、腕枕完成。

「ほら、来い。リーラ」

「う、うう、は、はいっ！！」

オイオイリーラ、顔真っ赤だぞ？ 風邪でも引いたのか？俺は同じくベッドに腰掛けてから俺の右に寝転ぶリーラ。

彼女もまた俺の右腕の上に頭を置いた。

これぞ両腕枕。実際腕に血が通わなくなって死に掛けるけど。

主に腕が麻痺る、麻痺って翌日動かなくなって湿布地獄、乙ですになる。

まあ、慣れれば平気だけど。
と、

「あ、あの……、リヨ、リヨウ、さん……」

隣で頬を売れた苺の様に真っ赤に染めたままリーラが顔を近付けて来る。

「どうかしたのか……？」

顔を近付けて来るって事は……、熱でも計って欲しいのかね？顔真っ赤だし、風邪は中々治らないのもあるからね。

手洗いうがいはいしつかりと、これ絶対だよ。

「ひ、一つ、聞いても、良いでしょうか……？」

「ん？ 何？」

あれ、質問だった。

何だろう？ これからの事かね？

「リヨ、リヨウさんは……、その、好きな人、とか、居ます、か……？」

……あるえ、恋バナか、これ？

恋バナ苦手なんだけどな……。

んー、好きな人、ね。

「今は居ないかなあ……、俺はちゃんと目的を果たしてからじゃないと中途半端じゃ好きな人を作れないタイプだからさ」

面倒臭い奴と言われる事多々。

まあそりゃあそうだろう、こんな硬派で古典的な恋愛な奴は俺位だ。

今の男子は付き合えばそれで良い、みたいな感あるからな。其処が気に食わないんだよなあ……、うん。

「そ、ですか……、良かった……」

「ん？ 何だつて？」

「な、なな、何でも無いですっ！」

「ととと……、全く」

頬を綻ばせると、リーラは俺にそのまま抱き着いて来る。

右左から圧迫感半端じゃないんだが……。

ま……、良いか、久々の人肌だ……、温もりを少しでも、な。

抱き着いている二人を引き寄せ、抱き締める形にすれば、そっと囁く。

「お休み……」

最後に、目に映ったのは、美しい、夜空に浮かぶガラスの様な月だった。

酒臭い空気は消えて、青く、蒼く染まって。

暗い夜空——螺旋を描く様な雲と唯青白く輝く月。

遠い、触れれば壊れてしまいそうな空と月。

青い月。

そして俺達の長い一日は、終わった。

第十八話 幕開け（前書き）

さてさて、とうとう十八話。
此処から怒涛の展開！！
それではどうぞ！！

第十八話 幕開け

さて、朝だ。

朝だ朝です朝ですよ、と。

と、言うわけで現在俺は両手に花、いや、両手に女性の状態で寝ております。

正直言わせてくれ、両腕の感覚が麻痺して来てる。

まあ血が通っていないのが原因だろうが……。

ふうむ、どうした物か……、起こしちゃ可哀想だしなあ……。

ベッドの上で試行錯誤する事数分、ある結論に至る。

「……闇の中に沈み込む事、出来ないかね？」

そう、良く漫画やアニメ、ゲームで闇を使う者が行う移動技の一つである。

某東方の妖怪のスキマ移動も一種のこれに値する。

「……やってみる価値はあり、か」

しかし闇に沈み込むってどうすれば良いのだろうか？

己の背中部分にだけ闇を展開するか？ いや、ベッドも沈むわな、それは。

じゃあ二人も一緒に？ 起こすわ、それ。

結論、無理じゃね？

「ハア……」

結論に至ると虚しい。溜め息を吐いて天井を見詰めていると、左側に動きがあった。

「ん……、こ、こは……？」

「おや、お早う」

「お早う——って……、あれ？」

「どうした？」

此方を向いて目を擦っているエルナ。

目にゴミでも入ったか？

「昨日、私、貴方と、寝たの……、かしら？」

「嗚呼、そうだな。俺と、だけじゃなくリーラもだが」

頷いて麻痺の残る左腕を上げて、リーラの頭をそつと撫でる。

「そ、そう……って違うわよ、何で、私……って……、嗚呼……」

「思い出したか？」

「……ええ」

掘り返さない方が良い気憶なのにね。

人間の脳って、都合良く出来てないから思い出したくないのに思
い出す。

同じ経験のある俺だからこそ言えるよ「ドンマイ」って。

「またやつちゃったのね、私……、今、何時かしら？」

「六時四十分だな、まだ寝れる」

「ん……有難う、……でも起きるわ、また寝ると次は午後まで寝ち
やうから」

「睡魔強し」

午後まで寝たらあれだよ、時間が勿体無い。

時間の有効活用をお勧めするよ、俺は。

と、右でも動きがある。

「んう……」

「お、起きたか？」

俺は首を傾げてリーラの方に視線を向けた。

すると彼女はゆっくりとその紫色の双眸そつぱうを開いて、俺を見詰めて

から「お早うほはいまふ」と呂律の廻っていない口で告げた。

「お早う」俺は苦笑してから、そつとその髪を撫でて「さて、俺も
起きるかね」と続け、彼女の頭から手を離せば体を伸ばす。

嗚呼、

今日も良い天気になりそうだ。

「おはつて……、これは酷い」

「同意します」

「朝まで、やってたのかしら……、この人たち」

顔を洗い、歯を磨いた俺は準備万端な二人と共に一階へと降り、その現状に溜め息を吐いた。

皆酒樽に抱き着いていたり、その場で腹を出していびきを掻いていたり、或いはその人に抱き着いて寝ていたりと様々な寝方でその場に寝転んでいた。

完全に熟睡しているようだが、これは確実にオールナイトだろう。酒臭過ぎるわい。

「お早う御座います、マスター。結局彼等は朝まで？」

俺は苦笑しながら店主に尋ね掛けた。

店主もまた苦笑をして頷いてから「嗚呼、今さっき寝た奴も居るよ」と笑った。

「飲み過ぎにも程がありますね……」

「ホント……、どうしようかしら」

俺は二人を見てから「ならさ、暇なら散歩、行かないか？」と尋ねる。

「「散歩?」?」

二人の声がハモリ、尋ね返される。

「嗚呼、朝の空気でも吸いに行かないか？」

数秒の間の後リーラが微笑んでから「分かりました、行きましょう」と頷いて、その後にエルナも次いで「確かに此処に居るよりはマシね」と溜め息を吐いた。

「それじゃあ案内がてらに行こうか」

「はいっ」
「そうね」

「で、どうしてこうなった？」

「良いじゃないですか、ねえ、エルナさん」

「そうよ、別に減る物じゃないんだし」

さてさて、現在俺は両手に女性の状態で街の中を歩んでいる。

右にリーラ、左にエルナと言った感じだ。二人とも腕にくっ付いて来るから歩き難いの何のって。

ん？ いや別に恥ずかしくも襲いたいとは思わないが？ 何故に

またそんな事を聞くんだか……。

「これからどうします？」

一人液晶の諸君に答えていると、リーラに服の裾を引っ張られる。

「どうしようかあ……、エルナさん、何処か良い場所ありますか？」

「良い場所、ね……、そうね、じゃあ四番街にでも行って買物でもしましょうか」

「お、良いね。ウィンドウショッピングって奴か」

「う、ういんどーしよっぴんぐ？」

「あー……、いや、何でも無い」

そうだった……、この世界では通じる言葉と通じない言葉があるんだった……、忘れてたよ。

これからは気をつけよう、心の中で決意してから「それじゃあ行こうか」と続けて再び歩を進める。

煉瓦造りの家が多い区域を抜けた先には、立派な噴水のある広場らしき場所が待ち構えてた。

周囲には木々が生い茂り、色取り取りの花々が咲き誇っている。

朝だと言つのに人々の行き交いは尋常では無く、夏祭りを思わせる程だ。

俺は二人の手をキュツと、痛まない程度に握り締めてから「氣をつけるよ?」と続ける。

二人は一瞬啞然としてから直ぐに頬を、熟れる前の淡い紅色に染めてから元氣一杯な返事をくれた。

人々の行き交う広場を抜ければ、今度広がったのは商店街らしき区域。

朝だからか活気は昼間より無く、むしろ飲食店か、不思議な名前の店しかやっていない。

「此処が四番街よ。朝だからこの程度だけだね」

苦笑をするエルナに俺は「ははは」と笑ってから「俺の故郷もそうさ」と頷いた。

「へえ……。何時か行つてみたいわね」

「私事です。どんな所なのか気になります」

「んー……。どんな所、か。そうだな、平和で、技術大国。戦争も何も無い場所です。」

俺達みたいな学生は皆此処で言う魔法学校に必ず13年間通わなきゃならないのが決まりでね、まあ抜け出す時もあるけど」

日本に思いを馳せ、俺は紡いで行く。

二人は俺の言葉に感心したり、質問して来たり、時には怒ったり、笑ったり。

俺はその瞬間、通っていた学校の休み時間を思い出した。

下らない話で笑って、怒って、泣いて。

彼女が欲しいとか、テストヤベーとか、勉強面倒臭いなあとか、昼飯どうするとか……。嗚呼、ホント下らないなあ、バカバカしいなあ。

でも、でも、その馬鹿馬鹿しい事が、下らない事が、俺にとって、今では宝物で、支えに成ってるんだよね……。そう考えると、有難う学校だよ。

おっと、何感傷的になってるんだ、俺は。落ち着け落ち着け。
「でさ——」

刹那、甲高い、それこそ女性の絶叫が、街中に響き渡った。

「!？」

「!？」

「な、に?!」

俺達三人は声のする方向に視線を向けて目を見開いた。
今のは尋常では無い。

それこそ、死んだ人間を目の当たりにした様な、或いは人を自分の手で殺してしまった時の様な、そんな絶叫。

「エルナ、リーラ」

「はい」

「そうね」

おお、言わずとも分かってくれるか。

まあ分かるよな、目で。

「行くぞ！」

「はい」

「ええ」

嫌な予感がする。

俺達三人は駆けながら、声のする方へと向かう。

風を斬る音が、痛々しいほど、耳に響いた。

そして――、

「これ、は……?!」

俺達は止まる。

その光景は、残虐、惨劇その物だったんだ。

第十九話 革命者と熱血コンビ

「これ……は……」

俺の肌を焼くのは、賑やかな熱気ではなく、純粹な炎による熱気。

「一体、何が……？」

硝煙と、火薬の香りが鼻孔に流れ込む。

「門よ……、門の騎士団は?!」

刹那、一つの民家の壁に亀裂が走り、空気が入ると同時に大爆発を巻き起こす。

轟音と同時に家は粉碎し、弾け飛ぶ瓦礫がれきの破片を俺は闇を展開し、二人を護りながら見据える。

たった数分間の間に何があつたと言っただ……？

「ちよつと見て来る……ッ!!」

「て、オイ! エルナ!!」

「エルナさん!!」

あ、さん付けしなかった……、でもまあ、緊急時だし、良いか。俺の腕を振り払って駆け出す彼女の背を追う。

熱気は容赦無く俺達を包み、水分を、酸素を奪って行く。

炎は黒い黒煙を、まるで神に救援を求めるが如く天に吐き出し続ける。

俺は彼女の背を追いながら、言葉では無く、悲鳴^{こゝろ}?を耳にした。それは、痛い、怖い。

しかし、今の俺に出来るのは彼女達を助ける事もそうだが、状況を飲み込む事。

泣き喚く子供の声。

震える人々。

嘆き、喚き、呻き、喘ぐ声。

ギリツと、奥歯を噛み締めて――俺は炎に包まれた街を駆け抜け続けた。

「何で門番が一人も居ないのよ!？」

門に到着した時の第一声はそれだった。

「一人も、……居ない、か」

俺は顎に手を添えて、瞳を閉じる。

もしもこれが、この帝国により滅ぼされた民による革命戦争ならば、まず俺達は巻き込まれる。

革命で無いとしても、戦争ならば巻き込まれる率は百パーセント強だ。

しかし、巻き込まれたは良いが、どちらに味方すれば良い?

帝国か、民か。

帝国は領土侵略の為に、これから起こるかもしれない大戦の為にその国を滅ぼす。

帝国には帝国なりの理由があつて、戦争をする道理がある。

民は滅ぼされたが故に、無残にも殺された者の敵討ち、或いは革命の為に帝国を襲う。

民には民なりの理由があつて、戦争をする道理がある。
何れにせよ道理がある中で、俺はどうすれば良い？

俺は悩みながら、次なる声を聞いて結論を出す。

未だに混乱しているエルナを他所に、リーラがぼやいた。

視線の先にあつたのは、一本の質素な剣。

何かと戦つたのか、真紅の液体がこびり付いている。

「あの剣……」

「剣……？」

リーラは俺の声を聞いて一瞬ビクツとしてから直ぐに落ち着いて
頷き「ええ」と呟いた。

「それがですね、あの剣……、私見た事がありまして……」

「何……？」

「何ですって？！ 何処でよ、何処？！」

こうなるよな、現在リーラの肩を掴んでエルナ、揺すっています。
ほらほら、エルナ、落ち着け。リーラが喋れないだろう。

「は、はい……。一度前に私の村に食糧供給の為に来たカシリーパ
家の兵士の持っていた剣に良く似ていました……」。

特に鰐の部分の黒い文字は未だに印象的で……。多分ですが、
あの剣はカシリーパ家の物だと……」

「カシリーパ……？」

聞いた事の無い単語に首を傾げると、エルナが「カシリーパ家つ
て……、貴族地区で有名な、あの？」と首を捻っていた。

「は、はい……。あの刻まれてる文字を見れば分かります」

そう言つと、リーラは駆け足で剣の元へと向かい、鰐を見詰めて
口ずさんだ。

「？I、S、……T、S？……、はい、やっぱりそうです、これは
カシリーパ家の物です」

振り返って叫んだ瞬間だった。

閃光が音を響かせと轟いた。

二度目の爆発——！！俺はリーラに駆け寄り、そのまま抱き上げれば緊急回避する。

直後、リーラの居た場所に降り注ぐ瓦礫の破片。

俺は額の汗を拭ってから「無事か？」と尋ねる。

すると腕の中でリーラは静かに、それでも埃でむせながら頷いた。
「それで……、よいしょと……。そのISTSって何なんだ？」
リーラを抱き上げ、立たせれば、俺もまた立ち上がり首を傾げた。
何かの略語なのは間違いないだろうけど……。

「?Infinited System The Sekond?」

「へ？」

しかし、返答は違った場所から耳に届いた。

「無論、それは生物兵器では無い。技術により造られた、この生温くなった帝国を立ち上げる大量殺戮兵器さ」

埃の向こう、若い男の声。

俺は瞳を細め、尋ねる。

「何者だ……？」

返答は来ない。

数秒後、声の主は「そうだな——今は？革命者？、とでも名乗って置こう」と続け、その場を後にした。

緊張の糸が切れ、俺は肩の力を抜く。

「革命者って……、誰、よ……？」

俺の背後で囁くエルナ。

「分からね……、唯そのリーラの言っていたISTSが滅茶苦茶危険な物だったのは理解した」

「はい、私も分かりました……」

俺の声に頷く様に隣から声が届く。

「取り敢えずバイツ達と合流しよう。其処からだ」

「そうね……、今は単独行動は危険過ぎるわ」

俺の言葉に素直に返答するエルナに次いでリーラが「はい、そうしましょう」と頷く。

「それじゃあ行こう……！」

俺は再び炎の巻き上がる街を見詰めて、駆け出した。

革命者、その正体も知らずに。

その頃バイツ達は、爆音と轟音で目を覚まし、飛び起きた。

「何事だ！？」

「分からぬ！！ 取り敢えず皆は此处で待機！！ バイツ殿」

「了解した」

頷くバイツは騎士宿舎の扉を開け、目を見開いた。

「こ、これは……ッ！？」

「何が——これは……、一体……?!」

二人揃って啞然とする中、轟音と唸り声を上げ、喘ぎ回る爆炎が一つの民家を包み大爆発を巻き起こした。

「ッう……！！ たった数時間の間に、何が起ったと言っの……ッ……！」

目が眩む程の閃光から腕を翳^{かざ}す事により護ったラインはそう呻き、バイツと共に外に飛び出した。

熱風と熱波が高熱を纏い、肌に叩き付けられる。

肌がジリジリと焼かれているのが手に取るように分かる。

周囲を見回しながら歩んでいると、声が響いた。

「革命者め……、とうとう始めたか——これでは革命所か戦争が巻き起こるぞ……！」

その声は、リヨウと同年代の、まだ若い声。

炎と同色のオレンジ色の髪を持ち、それこそ黒と紅二色構成の制服を身に纏っている。

首元には黒い長いマフラーが巻かれており、風にそれが靡く度に、青年はそのマフラーを巻き直している。

「君、ちよつと話を「済まない……、今は話す余裕も無いんだ」で、ちよつと待ってくれ……！」

ラインが歩み寄り、話を聞こうとすると青年は一瞬その深い、闇より深い藍色の瞳でラインを一瞥し、そう呟くと同時に飛び去ってしまう。

そのジャンプ力、尋常では無い。あの炎の中に飛び込み、駆け抜けるのだから相当鍛えているのだろう。

「何者だったのだろうか……？」

歩み寄って来て尋ねて来るバイツにラインは首を捻り「分からない」と俯いた。

俯くラインにバイツは少々慌ててから見繕う様にして告げた。

「今は落ち込んでいても仕方無いだろう。今出来るのは人命救助。リヨウ達との合流だ」

すると彼は顔を上げて顎に手を添えてから苦笑を零し「そうだな」と頷いた。

「では参ろう。まずは一番街からか？」

「そうだな、一番街、三番街、四番街を回って行くぞ」

「了解した」

此処に熱血コンビ結成。

二人は灼熱の街の中へと、今出来る事を行う為に駆け出した。

一歩一歩確実に、吹き荒れる熱風をも薙ぎ払って……。

第二十話 出来る事はお持て成し（前書き）

とうとう二十話！！

さて、どうなるのか？！

そして現れたのは一体？

それではどうぞ

因みに今回は視点変更が多いので視点について書かせて貰います。

第二十話 出来る事はお持て成し

「掠視点」

「出て行つた!？」

「は、はい。人命救助とかどうとか言つて……、私達もそれを見習い現在人々を救助中なのですが……」

「被害が大き過ぎる、か……」

俺達は騎士宿舎に戻り、バイツ達が既に宿舎を去つた事を伝えられた。

あいつ等はあいつ等なりにやるみたいだが……、大丈夫なのだろうか？

それにしても――。

「これは……、酷過ぎる」

時折鼻孔を貫く異臭は、人間の焼けた臭いだろう。キナ臭いと言うが、本当だった……。

鼻を腕で覆い、臭いを防ぎながら周囲を見回した。今、出来る事は……。

「取り敢えず人命救助。生きている人間を片っ端から救助してくれ……、俺達は原因を探る」

「了解しました!」

マントを翻しひるがえ、頷く一人の若い騎士の背中を見送ってから、俺は二人に視線を送った。

「行くぞ」

「はい」

「ん」

短い返事を貰ってから、俺達は再び駆け出した。滴り落ちる汗も構わずに……。

〓 バイツ／ライン視点 〓

「ぬう……、これでは迂闊に近寄れんな」

「全くだ……。だが、このあたりは救助し切ったと思うが……。どうだろうか？」

第三番噴水広場。

燃え上がる木々や花々に囲まれ、火傷を負う人々を若手の騎士に任せ、バイツとラインは周囲を見渡した。

「嗚呼、多分だがもう居ないだろう……」

「そうか。では次の場所に移りましょう」

「承った」

視界に移る燃え盛る民家。

火渡りの如く民家から民家へと燃え移る。

消火活動も行われているようだが、一行に進んでいないと見得る。
この火力ではそう簡単に進みはしない。

水魔法を使えば早いだろうが、まだ魔法主力部隊が来ていない。

「それにしても……、一体これを誰が……」

「分からぬ。唯分かるのは、これは宣戦布告だと言う事だ」

静かに告げるバイツにラインは瞬間瞳を大きく見開いて、しかし直ぐに顔を俯かせれば「それしか無い、か」と紡いだ。

「嗚呼、これは他国による宣戦布告。或いは……——」

「掠視点」

「革命戦争……、ですか？」

「嗚呼、これはこの帝国によって滅ぼされた諸国家、或いは——」

「バイツ／ライン視点」

「農村による、物、だと言っのか……?」

「嗚呼」

頷くバイツにラインは「革命、戦争……」と呟いた。

「もしこれが成功してしまえば、この国は終わる……。誇りとしても、軍事勢力としても、全てが一瞬で終わる」

「ッ、終わらせるわけには行かん!」

「なら今出来る事をするしかない!! 行くぞ!」

「了解した」

石畳の床を蹴り出し、駆け出すと同時のタイミングだった。

「……、あれ、は……?」

「何だ、あれは……?」

二本足ながら、銃火器を両腕に装備した、それこそ生物の類では無い存在。

肩に背負っているのは、同じく銃火器だろうが、大きさは手に持っている銃火器より数倍大きい。

「兵器……、なの、か……?」

「団体客だな……」

型は全て同じようだが、それでも数は数十。
金属同士が擦れる音が、轟々と燃え盛る炎の中で際立って響く。
直後、

ツツガガガガガガ——ツツ！！！！

兵器は一斉に二人に向け、両腕の銃火器を向け、弾丸を放ったのだ。

「ツツそ、野郎……！！！」

「バイツ殿、こっちだ！！！」

紙一重で弾丸を避けたバイツは、横に飛び回避し、崩れ壁代わりとなっている民家の陰に身を隠すラインの元へと飛び込んだ。

弾丸は地面を抉り削り、空を貫き、風を斬った。

一発でも直撃すれば重傷間違いなしの威力だ。

「どうする……、このまま逃げるのもありだが……？」

肩を揺らして息を吐きながらバイツはラインを見上げた。

「何を言うか。此処は私の故郷。此処で逃げ帰るわけには行かん！」

「！」

「……そうか、ならば戦おう。背中傷は——」

「「騎士の恥だ」」

轟ッ！！ と噴き上がる紅蓮の業火と、

ズドンッ！！ と砕け散り舞い上がる岩や石畳の塊。

業火の主、バイツ「アルトハイゼン、

黒騎士、ライン「ヴァイスリッター」。

出陣——！

〓 掠視点 〓

轟——ドオンッ！

駆け抜ける俺達を襲ったのは、耳を劈く程の轟音だった。

「な、に！？」

「つつ……、何、ですか……？」

「今の音は……」

呻き喘ぎながら、俺達は周囲を見回した。

危うく鼓膜が破れる所だった。

現在俺達は五番街に着ていた。

此処まで炎が広がっていると、被害は甚大だろう。

魔法部隊は数分前に到着したらしく、第一から消火活動を行っていると言う。

「て……、お客様、みたいだな……」

ブンッ、と空中と地上に何かが舞い降りる。

それは生物では無く、機械の塊。

心は無く、命令通り、外見通り、殺す為に作られた存在。

「お客様……、では、丁重におもてなししないと、ダメ、ですね……」

「そうね……、数は多いわ。私とリーラで右半分。リヨウは左半分と前方をお願い出来るかしら……？」

背中合わせになればそう尋ねられ、俺は苦笑をしてから「俺の方が多くね？」と呟いてから頷き「了解した」と続けた。

ふわっと、迸る漆黒の、深淵より姿を現す闇を纏う俺と、

狙撃銃を担ぐ形で構えるリーラ、

バチンッ！！ と火花を散らし、何か青白い閃光を纏うエルナ。

第二十一話 人として

地の底から響く様な低音を轟かせつつ、兵器達は一斉駆動する。俺は背より片刃直剣を抜き放ち、左右に二度振ってから構えた。実際物凄い恐怖感を覚えている。今までに無い恐怖感だ。

今俺達は嵐の中に居る。何もかもが音を立てて流れ、変わって行く。故にこんな事が巻き起こった。この激流の行方は分からないが、今は唯、灯台の灯火を探すだけ。

「行くぞ！！」

俺の叫び声を合図に地を蹴り、俺とエルナが別れる。

打ち合わせも何もしていない状況で、切り抜けられるか……？

兵器達が駆動音を轟かせつつ、俺達二人に殺到して来る。予想通り、動かないリーラには目が行っていない。つまり息さえ潜めていれば狙われる事は無い。

リーラは故にこの場では——最強を意味する。

カッアーンツ！ と言う乾いた音が兵器の群れの中で上がり、火花が散る。

直後奇妙に動き回った兵器はそのまま崩れ落ち、沈黙した。

「リーラか……、流石だな……」

俺の視界には移らないが、きっと彼女が遠距離射撃でもしたのだろつ。

と、彼女へ感心していると俺に兵器の太い金属質の腕が俺に迫った。

「負けていられないな……ッ！！」

顔と身体を逸らし、腕を避ければ懷に潜り込み剣を振り上げる。引き千切る音と共に脇腹から右肩まで刃が滑り込み、見事に分断する。

「しかし数が多い……」

スラッヅブリニエシル

「唸れ？雷刃？！！」

一人呻いていると、背後からその凜とした声が響き、雷の刃が一斉に兵器を貫いた。

機械製品には稲妻系統魔法ってか？ 良く考えたな、そう思いつつ次に視界に舞い込む弾丸を身を屈めて避ける。

「ら、ああ、ッー！」

避けてから右足を軸にして身体を回転させれば遠心力任せに刃を兵器の脇腹へと叩き付ける。

しかしながらやはり金属、先程同様繋げる為のコードが多かった部分とは比べる必要が無いほど硬い。

腕に痺れを感じてから、俺は一度距離を取り、ぼうつと闇を展開する。

闇は俺を覆う様に進れば、槍の形を形成し――。

「い、けっ……！！」

ズ、ッオンツー！！ と言う轟音と共に射出される。

放たれた槍は兵器を一気に飲み込み、そのまま壁へと突き刺されば大爆発を巻き起こす。

「これでもまだこれだけ居るのか……、流石に疲れるぞ、オイ……」
耐久レースじゃあないんだから、ねえ？

「危ない！！」

「へ？」

瞬間、俺の背後に迫っていた刃が一線。
放たれた弾丸によって刃が弾かれ、紙一重で生き延びる。

「……危ねえ……」

「だ、大丈夫ですかっ？！」

屋根の上からその声が聞こえてくれば俺は手を振って「大丈夫」と頷いた。

するとリーラは安堵の息を吐いて、そのまま瞳を一度閉じてから再び狙撃銃を構え直していた。

「貸し、作っちゃったなあ……。それに名誉挽回しないとな!」

再び剣を正眼に構え直してから地を蹴る。

蹴った、までは良かったのだが……。

「バニシアス?? 炎轟?」

「斬り刻め……!!」

そう、まさかの奴等が来たのだ。

炎は波の如く顕現すると、俺の目の前に居た兵器達を飲み込み爆ぜ、

閃く黒い両刃の剣が止めとでも言うように俺の背後に居た兵器を斬り倒す。

「遅れて済まなかった、少々手間取ってしまった」

「私もだ。此方の方が数は多いようだな」

紅色の髪、バイツと、紅色の瞳、ライン。

そう、直情型熱血馬鹿と、何処か引つ込み思案な騎士様だ。

「いや、助かった……。それにしても数、多過ぎないか、これは?」

バイツ、ラインと背を合わせるようにして立てば、ラインが「大量生産されていると聞いたが、これがそうかもしれん」と続けた。

「大量生産?」

今度は雷の槍を振り回し薙ぎ倒していたエルナが声を上げた。

「嗚呼、ISTSの試作品大量生産。それがもしかしたらこれかもしれん。確か計画名が『ウェアバスノイジー欠陥兵器』」

「試作品じゃあなく、試作品の中でも最も良好な物を最終的に仕上

げるのさ、その為の実験さ」

上からライン、バイツと言う様に続いて、再び乾いた、金属同士が擦れ弾ける音が響いてからリーラが叫んだ。

「上、上を見て下さい！！！」

『上？』

全員がハモって首を傾げてから上を見上げた。

圧巻。

圧倒。

「ごうんごうんと言う地の底から響き轟く様な金属音が空を支配する。

紅色の輝きが、怪しく黒煙を照らし、金属質の外壁を覆う砲台が周囲を見回すように首を回している。

「……、ま、さか……」

「何だよ、……あれ」

俺の声にバイツが息を呑んでから、厳かに答えた。

「ISTSの前に造られた……、DSTT……かもしれん」

「DS、TT……？」

また英語の綴りですか……？

「Disteny System The Teard、この略称さ。通称『空の女神』とも呼ばれる空中要塞だ。数年前に処分されたと聞いたのだが……」

俺は視線を未だに空を舞う巨大要塞へと向け、息を呑んだ。
空の、女神……か。

「しかし、何故こんな所を……。あれはアシミネシア王国で製作されたと聞いたが……」

唸ってから、瞳を閉じたラインは瞳を開き「いや、今は考えるより行動だ」と頷き、俺を見据え、告げた。

「リヨウ、お前はこの先、第六番街へと進め……。その貴族地区の何処かにカシリーパー家があるハズだ……」

「は！？ ま、待てよ、お前達は！？」

「俺達は此処で足止めた。本来ならば俺様が行きたいんだが……、今回は譲ろう。行け、友よ」

「そうよ、此処は私達に任せて行きなさい。本来、あの馬鹿の言うとおり騎士の仕事なんだからね！ って、ああ！ 邪魔よ！！」

台詞の途中で迫って来た兵器を睨んだエルナは雷の槍を容赦なく突き刺し破壊した。怖い……。

「バイツさん達の援護は私がします……、私だって本当ならばリヨウさんに着いて行きたい。ですけど、今回は貴方に託します！」

「無論、俺達の命、お前に預けた。行け、相棒」

俺は齒を食い縛ってから、剣を背の鞘に納め「嗚呼」と頷いてから駆け出した。

糞、何泣いてるんだ、俺は……！！

階段を駆け抜けながら、俺は思う。

有難う——と。

〓 神視点 〓

「で、アイツを行かせたのは良いが……、この数、厳しいぞ？」

炎を片腕に纏わせながらバイツがそう呻いた。

「これなら私も行くべきだったわね……、失敗したわ」

雷の槍を担ぐエルナがそう呟くとラインが「お前が行ったらむしろ雷が居なくなるからな、私達は全滅間違いなしだ」と溜め息を吐いた。

「援護射撃にも限界があります。出来る限り援護しますので、宜しくお願いします」

口に弾丸を咥えたりーラがそう告げるとバイツ達は頷いて「分かった」と紡いだ。

ブンブンと二度黒の両手剣を振り回してから、ラインが皆の前に立ち、叫んだ。

「無論、私達に出来るのは、此処にいる兵器達の殲滅。良いな！能力を魔法を惜しむな、全力で潰せ！！！」

『了解！！』

舞い散る火花と業火の中、その火蓋は切って落とされた。

〓 掠視点 〓

「此処か、六番街……！！」

長い階段と直線の道を抜けた俺は、地図の導く通りに歩み、息を切らせながら六番街へと辿り着いた。

此処はまだ炎が侵入しておらず被害は無いが、それでも住民は皆避難警報発令により避難。故に現在この場所は今もぬけの空だ。

泥棒も今なら出来るし、放火する事も出来る。

それにこれだけ広ければ何かを隠すにも持って来いだろう。

「そうだよな……、革命者」

「嗚呼——その通りだ、青年」

「お前の造った兵器は今何処だ？」

「君の言った通り、この六番街の何処かにある」

「そうか。目的は……？」

「革命さ」

「革命？」俺は首を捻ってから「何故革命をする必要がある」そう尋ねた。

「君には分からないのか？ この国の実体が！！ この国は確かに生活水準は極めて高い！！

だがな、裏路地を見てみる、貧困差別、人種差別、奴隷市場が存在するそんな場所だぞ？！ こんな国、こんな平和、偽善的平和を掲げた国、潰してしまえば良い！！

軍事国家？ 軍事大国？ 大陸制圧？ 大陸支配？ 聞いて呆れる、人々を不幸にする事だらけでは無いか！！

だからこそ革命する！！ 革命し、人々に俺は敬われ、畏れられる！！ 何れこの国を占拠し、乗っ取り、俺の国にしようとしたと言つのに……、あの糞帝王が……ッ！！」

「帝王が？」

そう尋ねれば革命者は苦笑を零して「俺の様な研究者は必要ない

つて切り捨てやがったんだよ！！　何がいけない？！　人工的に造り上げた人造人間兵器ならば幾万と！！　死人を出さずに澄むと言うのに！！」と嘆いた。

待てよ、人造人間兵器？

……野郎。

「オイ、お前間違ってるよ……」

「何？　君まで俺の研究にケチを付けるのか！？」

「いや、確かに素晴らしいよ。死人を出さない戦争、それこそ誰もが望む戦争さ。」

だがな、人造人間兵器何ぞ、造るお前の頭は可笑しいんだよ。

人造人間兵器は心を持たないのか？　唯の殺戮兵器に、無情兵器に仕立て上げるつもりなのか？

人の形をして、人の頭脳を持つて、人として産まれたと言うのに、貴様は――殺戮兵器にして戦争に放り込むと言うのか！！！」

血を吐く様な俺の叫びに彼は一瞬怯むも「煩い……、黙れ、俺が正しいんだ！！　俺が、俺が次なる帝王となる男なんだ！！　だから邪魔者は消す、それで良い！！」と叫んでから、呻いた。

「人の皮を被った化け物が心を持つ訳が無いだろうが、心何て物は殺すのには邪魔な感情なんだ！！　だから消す、消せば人造人間でなくても普通の人間でも殺戮兵器に出来る！！」

それをしなかったただけ有り難く思え！！　死人無き造られた人間のみが戦う平和克展開する軍事国家、最高じゃあないか！！

人の形をして？　人の頭脳を持つて？　人として産まれた？！

戯言を、綺麗事をほざくのなら家に帰って母親にでもほざいてろ！
！これは一世一代の研究にして最高の実験！！

人の形をしてようが、人の頭脳をしてようが、人として産まれて
ようが、造られた人間に従うのは当たり前前の事なんだよ、それを知
れ、糞餓鬼が！！！！」

ドクン、と、俺の鼓動が甲高く脈打った。

嗚呼——わかってる。

コイツハ、手遅レダ。

「自分に酔ってるんじゃないよ……、テメエの言ってる事とやって
る事は——人として最低最悪だよ。だから帝王にも、研究者にもな
れないんだ……。」

今此处で痴れ——その身軀からだを持って……地獄に言ったら閻魔に宜
しく言って置いてくれよ……？」

「黙れ、糞餓鬼。貴様こそ痴れ、貴様の無駄過ぎる温過ぎる平穩思
考の馬鹿さ加減と、俺の素晴らしき計画を！！」

互いに言葉を吐き切れれば、囁く。

「殺す」

「死ね!!」

それから数秒後、轟音が鳴り響いた。

第二十二話 吟じ紡げよその言葉

「死ね——」

「殺す——！」

二人の怨嗟がその場に轟く。

鋭い呼吸を吐き出しながら、俺は地を蹴った。

遠い間合いから直剣を横薙ぎに繰り出す。革命者がそれを後ろに飛ぶ事で避ければ「ISTServer1、我が手に——！」と叫び、手中に武器を具現化する。

「具現術……、次元操作、干渉系統の魔法か……？」

「違うな。ISTSによる武器転送、故に具現化」

武器はそれこそ俺の心臓を貫く為の武器。

即ち、槍。

革命者は二三度槍を振り回してから背負う形で構え、俺に向けて叫んだ。

「お前は——、いや、貴様は偽善者にしか、過ぎんツツ——！」

直後、矛先が俺の視界に迫った。俺はそれを直剣を振り上げる事で弾き、金属同士がぶつかり火花が散り、二人の顔を一瞬明るく照らした。

金属がぶつかり合う衝撃音がまるで戦闘開始の合図だったとも言う様に一気に加速した二人の剣槍戟けんそうげきが周囲の空間を圧した。

俺は息を詰めて、その言葉を聞いてから迫る矛先を弾き飛ばし、叫び返した。

「俺が偽善者ならば、貴様は人間以下の——屑だよ——！」

バランスを崩した革命者は小さく舌打ち俺を一度睨み付けてから、尋ねて来た。

「青年、名前は何と言う？」

「リヨウ。リヨウ＝ナナミだ」

そうか、革命者は頷いてから「俺の名前はオールド。オールド＝カシリ＝パだ。覚えて置くと良い、それが貴様を殺す——男の名前にして、この国を支配する男の名だ！」と叫び、槍を叩き付けて来た。ズ、轟ッ！！——と言う唸りと轟音が空気を制し、槍が俺の直剣に直撃し、

「死に——晒せ！！！」

そのまま俺を掃き捨てる様にして横に薙ぎ、吹き飛ばした——！！

「ッ、が、あ……ッ！！！」

吹き飛ばされれば俺は受身を取る前に硬質な積み上げられた煉瓦の壁に背を打ち付け、砂埃を巻き上げる。

酸素が肺から無理矢理吐き出され、一瞬脳内が真っ白になる。

初めてこの世界に来てマトモなダメージを受けた気がするぞ……。

「ク、クク……、I S T S v e r 2、我が手に」

直剣を杖代わりにして立ち上げれば、俺は一度呼吸を整え、揺れる視界で革命者を見据えた。

手には既に槍では無く、大きな剣。

それこそ幅広克、薙ぎ払い押し潰す為に生み出された様な武器。即ち、大剣。

一撃でも喰らえば、捌き切れるかどうか……。

「貴様の温過ぎる偽善物語も此処で終幕だ……、リョウ、良く此処まで耐え抜いた。直ぐに楽にしてやろう」

「ッ……、テ、メエに殺されるなら、自殺する方が、マシだ——っつの——！」

俺は重心を低くし直剣を正眼では無く、地面擦れ擦れに構え直せば駆け出す。

地面が爆発した様な、ズドンッ！！　と言うジェットサウンドを響かせ、俺はオールドに迫った。

「ち、いつ！！　な、らば——！！！」

俺は地面から胸を薙ぐ様にして、一閃！！

しかしそれは大剣が振り下ろされる事によって弾かれ、重量と勢いにより俺は叩き落される。

「っ、あ……！！！」

重い——。

再び口から酸素が吐き出されれば、俺はむせ返り、全身が一瞬硬直する。

「無様無様！！　貴様では俺に届きもしない！！　I S T S v e r 3！！！」

再び消失する大剣。

次いで現れたのは——素手？

俺は揺れる視界の中でそれを捉えてから、何を持っているか、暗器でも持っているのか目を凝らした。

しかし、何も無い。

どう言う事だ？ 俺は内心首を傾げてから直剣を地面に突き刺し身体を起こした――が。

「？ 覇？」

背中に向けて拳が振り下ろされた。

この程度なら――そう思った瞬間、俺は思い切り地面に叩き付けられた。

まるで重力が瞬間的に増した様な、そんな感覚。

「――ツツ！！？」

声にならない悲鳴。

骨が軋み、全身が啼く。

口の中に感じる血の味。

嗚呼、何処か斬ったか……？

「コイツは一撃一撃を重くする力。今までの武器もそれぞれに力があつたが……、これが一番手っ取り早い――。」

今直ぐ、此処で、楽にしてやろう……。」

瞬間――俺の頭に降り注がれた一撃。

脳内がまるで潰された様な感覚。

全てが黒く染まり、

視界が何かを見るのを拒絶する。

絶叫すら上げられず、俺は——死んだ。

「バイツ達視点」

「此処は粗方片付いた！！ 行くぞ！！」
『了解！！』

兵器達を片付けた俺達はリョウの駆け上がって行った階段を同じく駆け上がった。

長い、長い階段を駆け上がり、細い道を抜ける。
そして広場に抜け——俺は目の当たりにする。

その光景を、

絶句するしかない、その光景を。

「今直ぐ、此処で、楽にしてやるっ……」

振り下ろされる一撃。

それは地面で呻き喘ぐリョウの頭に触れ、同時に爆ぜた。

強大なる、周囲の空気をも制する轟音が響き渡り、一瞬だけ伸び

たりヨウの手は——そのまま地面に投げ出される形で落ちた。

それは誰もが信じられない光景。

かの、無敵にも思えた闇使いが……？

此处で……。

と、隣に居たりーラがその場に崩れ落ち、口元を震わせて、何度も首を横に振り、顔を歪ませ——叫んだ。

「いやあああああああああああ……！！！！！！」

それは血を吐く様な、絶叫。

断末魔にも似た、声。

「貴、様……ッ……！！！！」

りーラが絶叫すると同時に、ラインが地面を蹴り、男にその黒い両手剣を振り下ろした。

しかし——、

「？歩？」

何事も無い、唯の拳が剣に触れた。

刃は拳を切り裂く事無く、逆にラインを吹き飛ばした。

「な、あ……ッッ?!」

「ラ、ライン隊長!?!」

吹き飛び、岩壁に叩き付けられ崩れるラインの名を呼び男を睨めば、エルナもまた、俺も叫んだ。

「ッ、の野郎……!?!」

「触れるな!! 轟け!!
ディーグロイスフレッシア ? 逆鱗稲妻?!!!!」

舞い込む紅蓮の業火を纏う刃に、

荒れ狂い、龍を形成し放たれる稲妻。

それは空を切り裂き、吼えながら男に唸り直撃し、

「I S T S v e r 4」

見得ざる壁に直撃し、ものの見事に防がれた。

稲妻はそのまま天に返され、刃は壁に直撃し弾かれる。

「っ、う!!」

「な、んでよ!?!」

「貴様等は彼奴より弱い。脆弱過ぎる存在よ。惜しい人材を亡くした物だ」

額に手を当て、やれやれと溜め息を吐く男。

俺とエルナは男を見据え、齒を食い縛ってから叫んだ。

「な、ぜ……、何故、リヨウを殺した？！ 殺す必要が何処にあった！！」

「俺の研究にケチを付けたんでな。それに、彼奴は勇者気取りの偽善者に過ぎん。故に消されても許される存在なんだよ」

歪んだ口元は、既に危険を現す。

と――、俺達の視界の端、それこそ男すら興味を示さずリーラが唯、唯、身体を引き摺って、首を振りながら、嗚咽を漏らし、リヨウへと近付いていた。

「りよ、さ、……ん……？」

信じられないとも言つ様に、身体を揺する。

「リヨウ……、さん……」

まだ、揺する。

「りよ、う、さ、……んっ……！」

揺すり続ける。

それは、虚空への手紙か……、故に、彼女の言葉は、想いは――。

それは――、全てを覆す結果。

「やれやれ——……まさか、殺される何てな……」

聞き覚えのある声。

男もまた振り返り、目を見開いている。

俺達もまた、声の主の方へと視線を移して固唾を飲んだ。

「これが強制蘇生か——ロア、いや、転生の蛇か……、故に輪廻転生、か……」

声の主は零れる紅色の液体を拭い、溜め息を吐いてから、身体を起こした。

瞳はまだ閉じられているが、口は紡ぎ続ける。

吟じるが如く。

「集束する断片、点滅する傷痕は、きっと終わる時に響く事だろう……」

そつと、腕が動き、リーラの頭の触れてから、呟いた。

「済まない……。これが――俺何だ」

直後、瞳は開かれる。

それは今までの黒い瞳では無く、淡い紫色と、藍色をした瞳。

「俺を殺したんだな……。そうかそうか――じゃあ殺し合おうか、
……オルド〃カシリーパ」

第二十三話 輪廻王の終着点（前書き）

さてさて、第二章もそろそろ終幕。
決戦、どうなるのでしょうか！？
それではどうぞ！

第二十三話 輪廻王の終着点

「貴様……、何故、生きている……?」

声が耳に届く。

嗚呼、俺はまだ生きている。

「さあ、な……、唯俺は、人より死に辛い体質の持ち主でね——死神に嫌われちゃっててさ……」

眼がアツイ。

アツイ……。

頭が、

体が、

血流が、アツイ。

「良からう……、痴れ、貴様よりも上の存在が居ると言う事を——」

ズズズツと言う地響きの後、それは姿を現す。

「I S T S v e r s ——纏え狂え乱れ咲け!!」

それは——刃。

八本の豪壮なる刃。

それは全て俺に向いており、またオルドの手にも二本、豪壮なる刃を持つ剣が握られている。

「——今こそ見せよう? カオス 輪廻王? の片鱗を!!」

輪廻王、ね……。

俺は火で炙られ続ける様な感覚に陥りながら、視線をオルドに向

けた。

オルドを覆っていた豪壮の刃は一度離れてから密着し、何かを形成し始める。

鎧か、甲冑か。

紅色の金属を下地に、金色の刺繍のなされた物が纏われた。同時に足元に逆風が逆巻くと、ふわっと彼奴の体が舞う。

「……」

「声さえ出せぬか……、これがISTServer？輪廻王？よ」

は……。

「——はははは」

「何……？」

輪廻王、輪廻王、輪廻王——！！！！

嗚呼、俺の中で何かが終わってる。

嗚呼、一秒でも早く目の前の奴を『殺せ』と何かが命ずる。

嗚呼、体が煩い。

嗚呼、脳が喚く。

嗚呼、可笑しい。

嗚呼、笑いが止まらない。

「あ……はははっ、ハハハハハハハッ！！」

「貴様……」

そつだよなあ、俺は俺であって、『俺』じゃない。

さて、今はどちらだと思っ……？

「……くくっ、そうか……、輪廻王か……」

「何だと言っ……、何が可笑しい!!」

可笑しい？

違うね。

「殺し甲斐がありそうだ……、さあ——遺書は書いたか？」

「——ッッ!!!!」

今は俺と『俺』どちらもさ。

混ざり合った状態とでも言おうか。

若干遠慮気味なのが俺。

殺意全開で喋っているのが『俺』。

殺されたから、こうなっちゃったのかなあ……？

「お前の体は今の所、誰よりも解体し甲斐^{バラ}、殺し甲斐がありそうだから……、自然と笑みが零れちゃうのさ」

「貴、様……!!!! この俺を殺すと言っのか!!」

ツキユウツイツインッッ!! と言う豪壮な刃が俺の方を向き、空を切り裂き貫きながら射出されたのは数秒後の事だった。

迫る刃は直撃すれば確実に命に関わる一撃。

避けるにせよ、多分所有者の下へと帰るタイプの武器だろう。
ならば——。

「殺し尽くす」

俺は直剣を緩く構え、左目を閉じ、刃を見据える。
距離5メートル、時間4'32'1――。

「……存在自体を殺してやろう」

カッアンツ！！

轟く乾いた音。

刃は物の見事に真二つに碎け壊れれば、ガラスを粉々に碎いた様に周囲に光を四散させながら落下した。

二度、剣を左右に振ってから俺は直剣を正眼に構え囁く。

「――案ずるな、直ぐ終わる」

囁きが合図とでも言う様に俺は地面を蹴り飛ばし、ジェットサウ
ンド染みた音を聞きながらオールドに詰め寄った。

「ツツ！！！！ 此处で、朽ちて溜まるか！！！」

オールドもまた地面を蹴り、豪壮の剣を全て俺に向け駆け寄って来
る。

「ふ……ツ！！！」

ギュンツ！！ と言う轟音と共に舞い込む刃を弾き、そのまま刃
先を斬り飛ばす。

啞然とするオールドに目もくれず、俺はそのまま身体を捻り直剣を
弧を描く様にして薙ぎ、纏めて豪壮な刃の刃先を殺した。

舞い上がる刃先は降り注ぐ雪の如く煌きながら落ちて行く。
俺の瞳から尾を引く光は、何らかの影響による物だろう。

嗚呼、だから瞳がアツイのか……。

まるで硝子でも砕いた様な音が響き渡る。

それこそ響き渡る甲高い金属音と、舞い散る火花は普段より激しく、轟いた。

「な——、んだ、と……?!」

「理解したか……?」

茫然自失としたオルドに向けてそう尋ねてから、俺は直剣の刃先を突き付けた。

ははっ、後は首を薙げば終わりだ——。

存外脆いな、ISTS。何が輪廻王だ、雑魚の癖しやがつて。

「ッ、く……!! 最後に聞かせてくれ……」

「何だ? 遺書代わりに聞いてやろう」

突き付けたまま首を捻れば——腹部に冷たい何かが侵入する事を感じた。

「——死ね」

滑り込んでいたのは、砕けた刃先。

ズズッと刃は俺の腹部を貫き、突き刺さる。

滴る鮮血と、上がる悲鳴宜しく——。

「今度は最後に聞いて貰おう」

「ッ!？」

「――所詮その程度か」

――ツツツツ!!!!!!

音無き一撃が、風を斬る、嘆きにも似た一撃が、オールドに首に触れ、薙いだ。

それは容易く、軽く、脆い。

それは早く、弱く、脆弱。

勿^はね上げられ落下する生々しい首を一瞬見据えてから、俺は口元を綻ばせ――紡いだ。

「――俺も、お前と似てるのかも、しれないな……」

其処で俺の意識はブラックアウトした――。

残っているのは、俺に駆け寄り、支えてくれた誰かの腕と、身体と言う事だけだったんだ……。

あの時、俺は何を見た……？

殺された時、俺は何を見た……？

殺された時、俺は何を聞いた……？

記憶の断片を拾い集め、集束する。

怖い？ 何が。

憎い。何が。

何を耐えている？

何を堪えている？

このまま殺されて、死ぬ？

痛いのは嫌だ。

生きたまま死ねない。

意識を残したまま死ねない。

嫌だ。

死にたくない。

死ねない。

此処で——終われない。

壊れる。

壊れて行く。

壊れ、壊され、壊れ尽くされる。

壊れ、殺され、崩れ落ちて行く——。

俺は……——何をした？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4753y/>

死ねない俺の異世界召喚戦記

2011年11月24日20時47分発行